20th の軌跡

ともに歩む

創立20周年　記念誌

はじめの一歩

社会福祉法人 まるこ福祉会

20th の軌跡

ともに歩む

創立20周年　記念誌

まるこ福祉会

You tube チャンネル開設しました。

幸せの花を咲かせることを目指す

社会福祉法人

まるこ福祉会

登録はこちらのQRコードからお願いします。

20th memory

2023.11　障害福祉サービス事業所

きらり

とんぼハウス

地域密着型特別養護老人ホーム大樹

共同生活援助事業所

グループホーム ホームとんぼⅢ

2004.4.1 とんぼハウス開所

2012.12.15 きらり開所

2016.10.15 福祉空間施設 あったかい輪
オープニングコンサート

2017.3.21 大樹開所

20th memory

利用者の思い出

2008.7.23 初めての海水浴（石地海岸）

2008.10.3 発芽玄米パン発売

2012.9.14 初めての登山（東篭の塔）

2018.7.24 神奈川の高校との交流

2023.4.5 お花見（上田城）

2019.12.21 お楽しみ会

どんぐり3,500本植樹　思い出のどんぐり山

2012.5.12 どんぐり山 植樹

2012.8.11 理事長・春原さん・宮下さん

2020.10.3 どんぐり山で「こどもレストラン きらっと」

20th memory

理事長就任10周年を祝い、
世界的トランペット奏者 大野俊三氏
（グラミー賞2回受賞）が
まるこ福祉会を訪問

2018.1.29 柳澤理事長就任10周年

2018.8.4 第1回こどもレストラン・きらっと

2018.4.9 雪村いづみコンサート

2023.5.19 佐々木秀実ボランティア

2014.8.9　福島っ子 夏の学校

2015.7.11　霊泉寺 クリーンフェスタ

2017.12.21　利用者中心のお楽しみ会

2021.12.19　「0円スーパー」

2022.10.1　第50回記念セレモニー こどもレストラン

20th memory

ボランティア視察研修旅行

2018.7.21　上高地

2019.6.15　富山県射水市

2021.10.27　三保の松原

2022.7.22　志賀高原　横手山

手をとり輪になり、みんなで地域を支え合う

■長野県：社会福祉法人まるこ福祉会

グラフ21

撮影－藤田政明
取材・文－編集部

グラフ21

社会福祉法人まるこ福祉会は、長野県上田市丸子地域を拠点として、障害のある人の暮らしを支える福祉サービスを展開している。加えて2016（平成28）年には、地域の誰もが利用できる交流サロンを施設内に開設。ボランティアグループと協働で運営しながら、地域に開かれた福祉拠点をめざしている。地域住民と手を携えた福祉サービスの取り組みについて取材した。

まるこ福祉会がある長野県上田市丸子地域は、千曲川の源流となる依田川が流れ、豊かな自然に恵まれている。「あったか空間きらり」は親しみやすい外観。喫茶コーナーは10時から16時まで開いており、地域住民が集う憩いの場となっている

作業前の朝礼ではラジオ体操の後、目標や合言葉を唱和したり、歌うなどしてみんなで心を通い合わせる

「きらり」は、スーパーマーケットの建物を再利用した広々とした空間。理事長のデスクや事務所と作業所の仕切りもなく、利用者は事業所内を自由に行き来している

朝は看護師の職員による血圧測定なども行われる。利用者の様子を気にかけながら、心身の健康にも目を配る

隣接する「大樹」では、3つに分かれたユニットごとに「きらり」の利用者が担当して、床やトイレの清掃作業を行う。ベテランの利用者は若い人の指導も行っている

企業から委託されたジャムのラベル貼り作業。曲がらず真っすぐになるよう、一つひとつ丁寧に貼りつけていく

「コーヒーを出すなど給仕的なことをしていますが、いちばんの仕事はお客さんの話し相手になることです」と語るボランティアの男性は週に2、3回ほど参加。1回の参加ごとに「ぐらんまるしぇ」でのみ使えるチケットが配られる。多くのボランティアが客としても訪れる。パンを買うと無料でセルフサービスのコーヒーが楽しめる

お昼休みの時間になると、コーヒーチケットとマイカップを手にした「きらり」の利用者が訪れ、ボランティアや地域の人とも言葉を交わしながら、憩いのひとときを過ごしている

就労継続支援B型事業所でもある「ぐらんまるしぇ」のパンは、安くておいしいとあって人気が高い。ランチタイムの忙しい時間帯は、利用者の厨房(ちゅうぼう)スタッフも給仕サービスを手伝う

「あったか空間きらり」では、ヨガ教室、子育て講座、健康マージャンなどさまざまなプログラムが行われる。この日の園芸講座は、地域貢献活動を行うシニアボランティアグループによるもの。地域住民のほか施設の利用者も参加してクリスマスのリースづくりを楽しんだ

「きらり市民ギャラリー」の展示スペースでは写真展なども行われる。NPO法人が主催する子育て支援室に無償でスペースを提供しているので、子ども連れの母親も多く訪れる

この日は「きらりホール」で着ぐるみ人形劇が行われていて、地元の幼稚園・保育園児や「大樹」、「きらり」、「とんぼハウス」の利用者が一緒になって観劇を楽しんでいた

手を携えて、地域とあゆむ

まるこ福祉会の始まりは1983(昭和58)年。旧丸子町が開設した障害のある人の作業所がその前身だ。当時は町社協が運営していたが、後に丸子町が上田市に合併して存続が困難となり、2004(平成16)年に有志が集い新たな社会福祉法人を設立。継続がかなうことになった。現在は丸子地区の2か所に障害福祉サービス事業所「とんぼハウス」と「きらり」を設け、軽作業や清掃、農作業など働く場を提供するとともに、グループホームによる生活の支援を行うなど、幅広いサービスで障害のある人の暮らしを支えている。

2016年には、地域に開かれた福祉拠点をめざして、誰もが利用できる交流サロン「あったか空間きらり」を施設内に開設。運営は地元のボランティアグループ「あったかい輪」と協働で行っている。サロンには手づくりパンやクッキーを販売する「ぐらんまるしぇ」や、趣味の講座から演劇まで大小のイベントに対応する「きらりホール」がある。「ぐらんまるしぇ」のカフェスペースは、昼時は地域の人や休憩中の利用者で大いににぎわう。

小袋に乾燥剤を入れる作業、クッキーの袋詰めなど、職員に見守られながら利用者が作業をすすめる。手づくりクッキーはおいしいと評判。地元産のクルミをふんだんに使ったサブレやクッキーが人気だ

指定管理者として上田市から運営を任されている上田市丸子物産館「花風里（はなかぜり）」。眺めのよい丘の上に建ち、店内ではコーヒーやランチを提供するほか、厨房では施設内外で販売するクッキーをつくっている

バターと砂糖を混ぜて白くなった頃合いを見計らい、卵や小麦粉を加えクッキー生地をつくる。長年、生地づくりを担当している利用者は慣れた手つき。法人では利用者の好みや特性に合わせて働く場を提供している

「大樹」は定員29人のアットホームなつくり。さくら通り、いちょう通り、くぬぎ通りと名づけた3つのユニットにそれぞれキッチンとダイニングがあるほか、中心には大勢で集まれる交流ホールがある

取材の日、「大樹」の交流ホールでは上田市にあるロゼッタシャンソン教室のシャンソン・コンサートや地域ボランティアによるハーモニカ演奏が行われた。昔懐かしいシャンソンの曲やハーモニカ演奏に、「大樹」の利用者が心地よさそうに聴き入っていた

「障害のある人と地域の人があえる場をつくりたい。そんな思いでサロンを始めました。それまで閉ざされた印象だった施設がサロンによって開かれ、地域の人と施設の間によいつながりができたと思います」と語るのは、「あったかい輪」代表の白井由美子さん。サロンを訪れる人の笑顔に活動の手応えを感じている。

また、「障害のある人の生涯を支える」という理念のもと、2017(平成29)年には特別養護老人ホーム「大樹」を開所。地域の医療機関とも連携し、高齢者の暮らしを支えるシステムも整いつつある。そのほか、堆肥づくりに始まる農産物の加工、販売、消費を地域で循環させるシステムづくりや自然公園の整備を目的としたクヌギの植林など、地域おこしの活動にも積極的だ。地域活性化に力を入れる法人の姿勢について、理事長の柳澤正敏さんはこう語る。

「社会福祉法人の使命は、地域福祉と考えています。障害の有無にかかわらず、誰もが幸せに暮らせる共生社会をめざして、地域の方と手を携えてあゆみたいと願っています」

まるこ福祉会の主要行事が、このQRコードからご覧になれます

まるこ福祉会HP

とんぼハウスの取り組み
（you tube）

どんぐりの樹を植えよう
（you tube）

福島県への緊急支援
（you tube）

きらり開所式
（you tube）

2019.6.19 OAザクザク信州
（you tube）

子供達に居場所を提供
（NHKニュース）

きらっと祭り
（you tube）

2021.1.17炊き出し訓練
（東信ジャーナル）

ドライブスルー方式の
うえだ子ども食堂
（東信ジャーナル）

第31回こどもレストラン
（you tube）

0円弁当0円スーパー
（東信ジャーナル）

子ども食堂東信地域の食材拠点
（東信ジャーナル）

こども食堂&カフェ
子どもの居場所づくりセミナー
（東信ジャーナル）

第42回きらっと
生寿司とバイオリン演奏
（東信ジャーナル）

福島の魚を食べる会
（NHKニュース）

福島の魚を食べる会
（東信ジャーナル）

震災の心のバトンリレー
2024.1.20（you tube）

中澤佳子のうっぴぃステーション
（SBC）

安心安全なぼかしたい肥
（you tube）

社会福祉法人まるこ福祉会創立20周年記念誌

グラビア　思いでの写真、月刊福祉での紹介写真
　　ＱＲコード一覧表（まるこ福祉会の主要行事がご覧になれる）

目　　次

一　２０周年記念誌の発刊にあたって …… 理事長　栁澤正敏　1

二　評議員代表ご挨拶 …… 小山田秀土評議員　橋詰邦男評議員　6

三　「第２１回読売福祉文化賞」受賞の記録 …… 8

四　まるこ福祉会の理念　と「みんなで大切にしたい言葉」 …… 15

五　職員代表抱負　本部・とんぼハウス・きらり・大樹・ホームとんぼ …… 17

六　利用者代表の「ことば」と「声」、「利用者のすばらしさ発見」 …… 21

七　まるこ福祉会２０年の歩み …… 33

八　まるこ福祉会の「社会貢献活動」と「こどもレストランに参加して」他
…… 40

九　新聞記事とテレビ放映記録で見る、まるこ福祉会の歩み …… 68

十　役員名簿　編集後記 …… 110

社会福祉法人まるご福祉会
理事長　栁　澤　正　敏

「皆様に支えられ感謝の創立20周年」

心温かな素晴らしい皆様のご支援とご協力により、社会福祉法人まるご福祉会は創立20周年という佳節を迎えることができました。

創立前から今日まで小さく生まれた本会を、大きく育てていただいた全ての皆様に満腔の謝意を申し上げます。誠にありがとうございました。

思い返せば、イラク戦争が勃発した平成15年は平成の大合併の渦が巻き起こっており、その狭間で町の「障害者等共同作業所条例」に基づき社会福祉協議会で運営していた「身体障害者共同作業所とんぼハウス」が廃止の危機に瀕しておりました。

そんな時、私は町より人事異動で社会福祉協議会事務局長に派遣され、着任と同時にとんぼハウスの利用者の親御さんや関係者から、「町で唯一の共同作業所が廃止されたら大変なんです！自分でバスに乗って他の市に通えないんです！」など、涙ながらの切実な訴えを聞き、解決策を模索いたしました。

しかし、市及び社会福祉協議会では合併後運営を継続しないとの結論に至り、障害のある利用者を幸せにして生涯にわたり支えていくにはどうしたら良いのかと真剣に考えました。

その結果、社会福祉事業を目的としている特別な法人である「社会福祉法人」を設立し、多くの人が幸せになるよう頑張ろうと、同年５月９日に決意しました。法人設立の決断日でもあります。

社会福祉法人の設立要件として、社会福祉事業を行うためには、１億円の基本財産が必要

です。（※ただし、すべての不動産が国等から貸与又は使用許可を受けている場合は、1,000万円以上に相当する資産を基本財産とする必要があります）と記載されておりました。
チャンスだ！

幸いなことに、とんぼハウスには人もいなく又、土地も建物も車も備品もありません。

町が協力してくれたら規制緩和の条件には当てはまります。「とんぼハウスを社会福祉法人にして共同作業所を障害者通所授産施設にする！」と方針を決めました。

ところが、当時は、先輩の方々が何度か法人設立の計画を立て挑戦しましたが、あのＴ知事から、ＮＰＯ法人ならともかく、新たな社会福祉法人は認められないと厳しくお断りされておりました。

しかし、とんぼハウスに通所してくる可愛い利用者たちが「自立した幸せな人生を送るため」にと奮起、人生は断られたところからがスタートだと歩みを進めました。

その後、立ちはだかる障壁を乗り越えるため、町の全面協力を得て、あらゆる人脈を駆使し社会福祉協議会の理事会や評議員会の承認、家族会で全員の賛同を得、県への申請や内容説明、現地視察などを行いました。

そんな中でも、設立に反対する動きもありました。社会福祉法人（社協も社会福祉法人です）が社会福祉法人を生み出した前例はなく、行政や社会福祉協議会の会計では資金の支出が困難などいくつかの問題が生じておりました。

しかし、厳冬の試練があるからこそ爛漫と咲き誇る春が必ず来るのだと、心に希望を灯して前進しました。

そんな時、長野県社会福祉協議会関係の税理士の方は「こんな素晴らしいことができれば、全国の障害者共同作業所も幸せになれますね。」と賛同し、会計上の問題を解決してくださいました。

その結果、社会福祉協議会の理事会や評議員会で、新法人設立のための基本金1,000万円と運営費５００万円の助成金支出が補正予算として承認されました。

新法人の名称は、父が丸子町、母が丸子町社会福祉協議会であるため、「社会福祉法人まるこ福祉会」とし、設立役員も決定しました。

また、通所授産施設に必要な調理室の改修工事の補正予算も、町で急遽５００万円補正し

ていただき、突貫工事により年度末に間に合わせていただいたわけです。

こうして、平成16年3月29日、桜咲く53歳の春に私は、「社会福祉法人まるこ福祉会」が社会福祉法の規定による認可を受けたことを「万歳」と喜びました。ここに、日本一小さな社会福祉法人が、発案からわずか10ヶ月と20日の短期間で奇跡的に誕生したのです。

ゼロからのスタート、創造の楽しみ、醍醐味、障壁を乗り越える喜びを噛み締めることが出来、大感動です。小さな法人の設立ですが、大きな希望のスタートラインに立てた記念日です。

平成16年4月1日（木）、快晴の中、桜の花びらに囲まれ、社会福祉法人まるこ福祉会の知的障害者通所授産施設「とんぼハウス」（定員20名）の開所式が行われ、第2種社会福祉事業が始まりました。まるこ福祉会が目指すものは、本会に関わるすべての人が幸せになることであり、一人ひとりの自立した生活を守り、生涯を支えることです。

福祉とは直訳すると「幸せ」です。私たちは人を幸せにする法人として、人生には避けられない四苦八苦（生・老・病・死・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦）に立ち向かうために、「ゆりかごから墓場まで」の基礎基盤を構築する必要があります。

しかし、基本財産としての土地の取得や昼間の仕事や生活の場だけでなく、夜間も安心して居住できる暮らしの場、そして高齢になって身体機能が失われても生活ができ看取りまで可能な施設、また、お金がなくても永眠できる墓地など、当時はまだ何も存在しないものばかりでした。

安定した経営を築かなければ、人材も集まりません。また、職員も利用者も幸せになれません。法人の発展と利用者の幸せは、車輪の両輪であり、鳥の両翼です。

これらの幸せは、「利他の精神」でもあります。自分自身の幸せだけでなく、他人の幸せ、いわば、周囲の全ての人の幸せを考えて行動することです。

まるこ福祉会の理念に「人の心に幸せの種をまき、人を育てる」とあるとおり、生活上や物質的な相対的幸福でなく、愛情に満ちた思いやりの心で、人の幸せのために尽くせる人間性の神髄を身につけ、豊かな人格を練り上げ、生きること自体が楽しく充実した絶対的幸福の人生をおくることを、今日まで胸奥に置き行動してまいりました。

また、障害福祉サービス事業所の福祉サービスの充実だけでなく、法人の発展のための基礎作りに悪戦苦闘し、多くの皆様の力強い応援と協力を得ながら波乱万丈の波乗り人生を楽

しませていただきました。振り返ってみれば、あっという間の20年間でした。

もう一つの社会福祉法人の使命は「地域福祉の推進」です。

現在、地域福祉空間（広さ220坪）を活用して、ボランティアチーム「あったかい輪」の皆様をはじめ行政、医療、団体、地域企業等のあらゆる皆様との連携を図り、協働の力で地域と時代に即応した次のようなボランティア活動を推進しております。

・こどもレストラン きらっと（一般的には子ども食堂）は、単に食料提供貧困対策だけでなく、将来を背負う若者として人材を継続的に輩出しており、今後が益々楽しみです。「0円スーパー・0円食堂」や、「休校中の子どもレストラン」なども無料で開催させていただきました。

・地域サロン　チームあったかい輪の皆様と飲食を共にしながら、地域の楽しい憩いの場として、ノーマライゼーションの場になっております。

・災害支援や対策　東日本大震災からの復興のお手伝いや、能登半島地震の支援など、直接現地の皆様と対話しながら、様々な支援活動を継続しております。

さらに、まるこ福祉会は災害対策として、震災や台風などで万一ブラックアウトが生じた時の準備として、非常用ガスバルクと大型ガス発電機（三相200V）と100Vの発電機2台、井戸水を活用しています。被災時の水洗トイレの利用、総合厨房での食事の提供、事務所でのパソコンやコピー利用、携帯電話の充電なども可能です。

また、米・味噌・水・非常食などの備蓄もあり、地域の皆様にも非常時には利用していただければと思っております。

法人設立当初のすべての夢のような目標が達成し、基盤作りもできました。これらの集大成として、皆様のご支援のもと、社会福祉法人として全国初の「第21回読売福祉文化賞」を受賞することもできました。

いよいよ次の10年は青年と共に飛躍する時代となります。地域と共に歩み、貢献しながら必要な事業も取り入れ、地域の灯台となれるように若者に期待しています。平和で環境にやさしい社会づくりを目指し、常に「明るく」「楽しく」「前向き」挑戦者の心で一歩一歩、日々、前進してまいります。

今後は創立３０年を目指し、「さあ、出発しよう。悪戦苦闘を乗り越えて決められた決勝点は取り消すことができないのだ！」の心意気で勇猛精進してまいりますので、皆様の益々のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

信濃毎日新聞
2010年（平成22年）9月14日 火曜日 地域 26

ひと探訪

障害者の生涯を手助け

社会福祉法人「まるこ福祉会」理事長 柳沢（やなぎさわ） 正敏（まさとし）さん（60） 上田市

上田市生田の物産館で作業所利用者が作った木工品を見る柳沢さん

上田市生田の知的障害者向け通所施設「とんぼハウス」などを運営する社会福祉法人「まるこ福祉会」の理事長を、2008年春から務めている。とんぼハウスの近くでは、物産館「花盛里」を上田市の指定管理者として運営。同ハウスの利用者が作る木工品を販売している。「利用者が安心して暮らすために、もっと多くの場所で販売できるようにして、事業を軌道に乗せたい」と意欲的だ。

同市上丸子出身。地元の丸子中学校を卒業後「いろいろな世界を見てみたい」と上京し、飲食店や精密工場などで20歳まで働いた。その後は実家に戻り、旧丸子町（現上田市）の青少年育成相当職員との出会いをきっかけに、非行少年の更生を手伝い始めた。「実家の町工場で半年ほど少年を受け入れ、一緒に生活しながら働き、相談に乗ったこともある」と振り返る。

この職員の勧めもあり、25歳で丸子町役場に就職。「上京中に、アルバイトや就職などでいろんな方にお世話になった。今度は自分が人の役に立ちたい」。就職後は通信教育で盲野西高（長野市）を卒業し、32年間の職員生活のうち20年余は、ケースワーカーとして高齢者の生活相談に乗るなど福祉分野を担当した。

「印象深い仕事」が04年春のまるこ福祉会設立だった。前年に町で、04年4月の法人設立に必要な1500万円を盛った補正予算案が承認された。だが、県が設立を認可したのは、ぎりぎりの04年3月下旬。「認可されなければ、責任者として辞職する覚悟だった」と、辞表を机の引き出しに入れて働いたという。

法人ができてから4年後、当時の理事長が高齢を理由に辞職する意向を示したため、早期退職して理事長職を引き継いだ。だが、06年の障害者自立支援法施行により利用者の経済的な負担が増加。08年秋以降の景気悪化で企業からの仕事が減るなど、環境は厳しい。

とんぼハウスでは「思い付いたらすぐ行動」を信条に、育てた花の販路を確保するために企業を回ったり、発芽玄米を使ったパンや改良土の製造・販売を企画したり。18～72歳までの利用者約40人のために奔走する。知的障害者向けグループホームの運営にも携わる。「働く場と暮らしの場は繋いでいきつつある。次は老人ホームを建てて、知的障害者を生涯手助けできる法人に育てたい」

（火曜日に掲載します）

創立20周年を祝う

評議員　小山田　秀　士

まず創立20年を迎えられた「まるこ福祉会」に心からお祝い申し上げます。

これもひとえに理事長始め職員の方々や保護者の会、支援者の方々の並々ならぬご努力と多大なご尽力の成果です。私はかつて行政に身を置いた縁でまるこ福祉会に今日まで関係してまいりました。役職や担当はありませんから側面から応援してきたに過ぎません。いま20年の節目を迎えて様々なことが思い浮かんできます。そのいくつかを記して益々の飛躍をお祈りしたいと思います。

理事長が急遽引き受けることになった「とんぼハウス」。お預かりした子供達と役場から借りた建物とわずかな職員、お金も土地も何もありませんでした。平成二十年代に北部商業協同組合だった建物を苦労して取得して基本財産にできたことから飛躍が始まりました。

上田養護学校を出ても行くところがない子を受け入れよう。また障害児も老いていく、老後を見てくれる施設がない!　それならば障害年金で入れる施設を造ろうと、特別養護老人ホーム『大樹』が開所しました。人生の最終章まで安心して暮らせるよう障害者を支えたい、理事長の熱い信念が実現したと感激しました。

毎月開く子ども食堂「こどもレストランきらっと」は近くの高校生やお母さん・大学生などの応援を得て、支援者が届けてくれた食材で多くの子ども達が利用しています。開催は６５回を超え、利用した子ども達は七千人余になります。

そして「あったかい輪」のボランティアグループのサロンもオープンしました。地域の子どもやお年寄りが集い、憩いと交流の場となっています。社会福祉法人で地域福祉に目を向け、地域の人たちの灯台になろうとしているところは寡聞にして存じません。向かうべき方向として全国に紹介されました。

必要とされる人、年齢や障害のあるなしにかかわらず、すべてに人に温かく寄り添う「まるこ福祉会」が益々発展されますようにお祈り申し上げます。

法人創設20周年を祝して

評議員　橋　詰　邦　男

社会福祉法人まるこ福祉会の創設20周年、誠におめでとうございます。

平成16年3月29日の創設以来、今日までに燦然と輝く歴史は、枚挙に暇がなく激流の大河を敢然と乗り切った大船の航路であり、偏に、柳澤正敏理事長の先見の明と英知と決断による実践力に敬意を表し、長年にわたるご尽力とご苦労に心より甚深の感謝を申し上げます。

思えば、平成15年当時私が勤務していた県庁厚生課を訪れた柳澤正敏氏の五体は、何としても障害者の生活圏を生涯をかけて守り抜くという信念と使命感と情熱が横溢し、社会福祉法人の設立を渇望する姿は、今も忘れることができません。諸葛孔明の箴言にある「逆境に屈せず、順境に驕らず」の現代版を作り上げたと、万雷の拍手をお送りします。

以来20星霜、社会福祉法人としての地域福祉の数々の実績は、他の模範であり、平成30年に開始したこどもレストランは、時代の要請に真正面から応えてまいりました。この一例は単に食事の提供でなく、地域住民や高齢者との協働を第一義として、集う小学生から大学生たちに21世紀の使者として進路選択の道を切り開き、豊かな人間性醸成の人権感覚と平等性醸成の人間道場となったのです。

職員の皆様は、一番大切である尊厳を守ってともに歩む障害者との日常生活は元より、現実の社会に目を向け、今日的課題を我が法人側にぐっと引き寄せ、そこから青少年に光をあて課題解決に挑戦し慈愛を込めた数々の取組の代表となってまいりました。法人理念の実践例として毎年巡り合う1．17阪神淡路大震災と3．11東日本大震災及び8．6広島原爆の日の人権と平和を学び、教訓を後世に伝える事例は、どの団体も成し得ない見事な歴史であり、その集大成が、第21回読売福祉文化賞の輝く受賞につながったと確信します。今日までの総ての役職員の皆様、陰に陽にわたる多大なご尽力に感謝申し上げます。

結びに、「何らかの援助を必要とする人に対して、総ての人が平等」との職員の人権感覚と実践力は法人の至宝であり、法人と共に益々の永続を祈念致しまして、お祝いの言葉といたします。

『第２１回読売福祉文化賞』受賞の記録

第21回読売福祉文化賞は、読売新聞と読売光と愛の事業団が、2003年に設置され、今年で21回の歴史を迎える福祉文化の分野で権威ある賞です。

目的は、社会福祉の分野で創造的な業績をあげ、障害者や高齢者の暮らしやすい環境づくり、自立支援、社会参加の推進や、困難な状況にある子どもたちの支援などに貢献している団体、個人を励まし、豊かな福祉社会づくりの一助とするものです。

また、時代にふさわしい福祉活動に長年にわたり取り組んできた団体や個人に贈られる賞であり、障害者や子どもの福祉を中心に福祉全般を対象とする「一般部門」と高齢者を支援する福祉活動を対象とする「高齢者部門」の２部門があります。

今回は、全国から優れた66団体の応募があり、厳正な審査の結果、その中で６団体が、『第21回読売福祉文化賞』受賞。

私たち、まるこ福祉会も受賞となり、社会福祉法人としての受賞は、21回の歴史の中で、今回が全国初という輝く受賞となりましたことは、
今まで20年間陰に陽にわたり、多大なご理解とご協力のもと、支えていただきました賜物でございます。誠に、ありがとうございました。

授賞式は、別紙のとおり、令和５年12月11日（月）に、読売新聞東京本社の13階にある国際会議室で行われ、引き続き、懇親会が、同32階のレセプションルームで賑やかに開催されました。

理事長はじめ受賞者全員から、喜びの感想発表があり、使命と誇りに満ちた地道な実践から、感動的な内容のお話が聞かれました。歴史に残る一日となりました。
今回の受賞にあたり、応募の段階で、推薦者として元公立大学法人長野大学学長で、現在、同大学院教授の中村英三先生には大変お世話になり心から感謝申し上げます。誠にありがとうございました。
ここに、推薦理由を掲載致します。

高齢社会と危機の時代と言われる現代にあって、平均年齢75歳のボランティア団体「チームあったかい輪」の設立で、地域の高齢者が立ち上がり、様々な団体や仲間と協働して、多彩な地域貢献活動に生き生きと取り組んでいる姿は、新たな時代の地域福祉のモデルといえる。

その取り組みを平成23年から12年間着実に基礎を創り、障害者の働く施設と特

別養護老人ホーム、さらには、地域に開かれた福祉施設である、サロン・ホール・ギャラリーの建設で、地域ぐるみで福祉を推進させていることは、他の模範的存在である。

また、集う子どもから高齢者まで、だれもが輝き、喜んで活動をする姿は、現代にあって貴重な存在である。

中でも、不登校の児童生徒が、困難を乗り越えて学校に復帰できたことや、高校生が、未来への確かな指針を見つけ、教育や福祉の分野の大学に進学し卒業後、教員や福祉関係のエキスパートに成長する姿等、これからの社会にとって極めて重要な青少年たちに最も大きな光を当て、活躍の場と機会を与え数多くの成果を生んだことも、他に例がない。と同時に、その青少年を周囲で温かく見守り支えてきた高齢者のボランティアの皆さんの存在も大きい。

以上の実践事例は、正に共生社会そのものであり、このような成果のある素晴らしい取り組みを、老若男女の地域住民の皆様と協働で作り上げた、社会福祉法人まるこ福祉会をここに強く推薦致します。

表　彰　状

第21回 読売福祉文化賞「高齢者福祉部門」

社会福祉法人 まるこ福祉会 殿

貴団体は 新しい時代にふさわしい福祉活動に取り組み 社会福祉の分野で創造的な業績をあげてこられました
日ごろの功績をたたえ これを表彰いたします
今後も豊かな福祉社会作りの担い手として 益々のご活躍を期待いたします

令和5年12月11日

読 売 新 聞 社
社会福祉法人 読売光と愛の事業団
理事長 水田邦雄

読売福祉文化賞

第２１回読売福祉文化賞 贈呈式・式次第

日　時：２０２３年１２月１１日（月）12：15～13：00
場　所：読売新聞東京本社　１３階 国際会議室

１．開式の辞	読売光と愛の事業団　常務理事　大浦哲
２．出席者紹介	読売光と愛の事業団　常務理事　大浦哲 ・事業団側出席者（理事長、常務理事、選考委員代表） ・受賞者側出席者（団体名、できれば個人名、役職）
３．表彰状及びトロフィー贈呈	読売光と愛の事業団　理事長 水田邦雄→受賞各団体１～２人
４．お祝いの言葉	読売光と愛の事業団　理事長 水田邦雄
５．選考委員総評	読売福祉文化賞選考委員/読売新聞東京本社編集委員　保高 芳昭
６．閉式の辞	読売光と愛の事業団　常務理事　大浦哲
７．記念撮影	理事長含め、出席者全員の集合写真、団体ごとの写真
８．懇親会場へご案内	32 階レセプションルーム（午後１時までに移動必須）

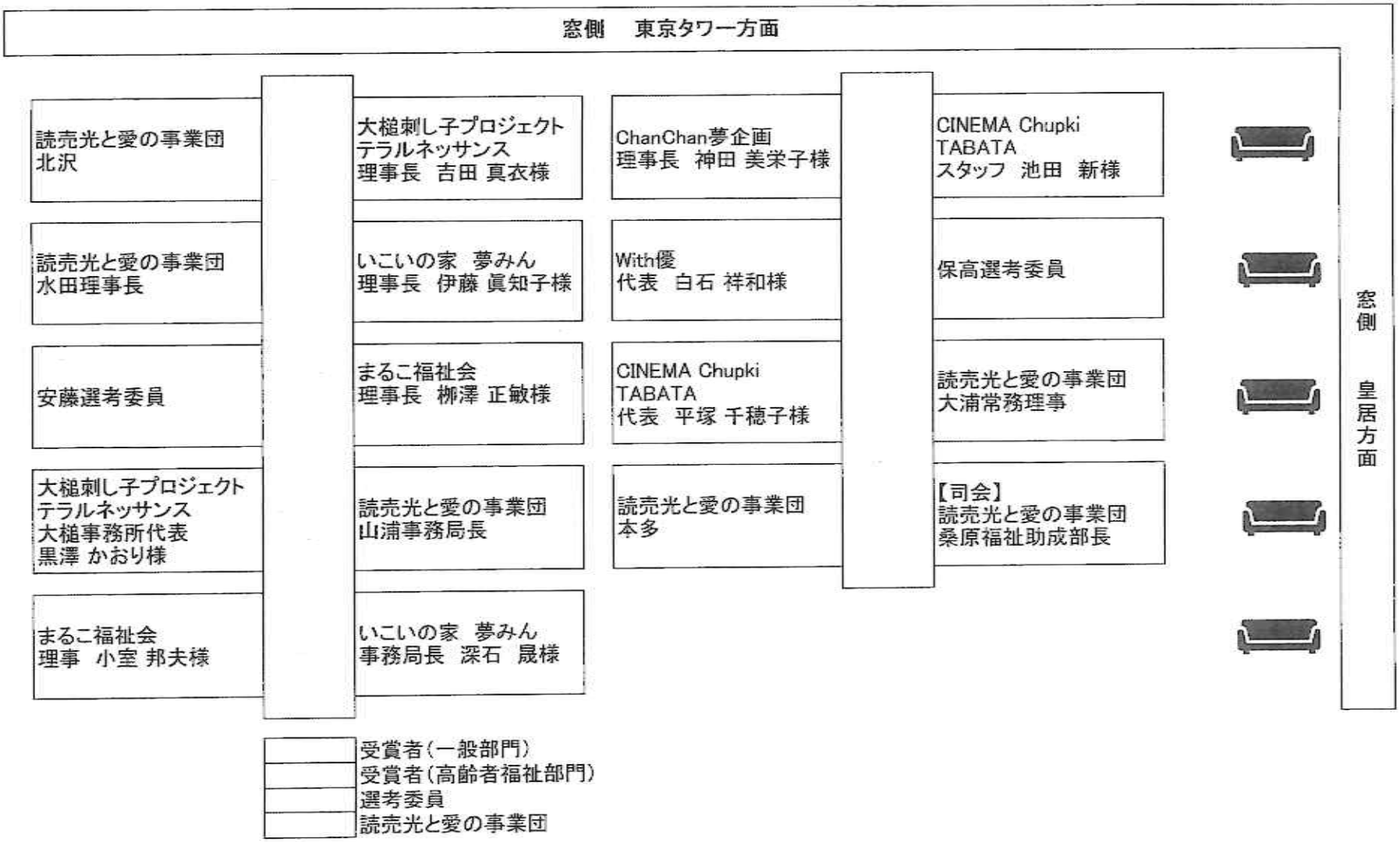
【一般部門】受賞３団体

団体名	活動内容	所在地
NPO法人　With優（ユウ）	不登校やひきこもりなどの若者の自立支援を目指し、地域の人々を巻き込んだ「失敗してもいい場所」づくり。フリースクールのほか、夜の相談窓口でもある会員制居酒屋運営での就労トレーニングも実施。	山形県 米沢市
CINEMA（シネマ） Chupki（チュプキ） TABATA（タバタ） （合同会社 Chupki）	目や耳が不自由な人たちが安心して映画を楽しめる日本唯一のユニバーサルシアターを東京・田端で運営。車いすスペースや完全防音の親子鑑賞室を設け、全作品で日本語字幕とイヤホン音声ガイドで対応。	東京都 北区
NPO法人 ChanChan夢企画	北九州市内に住む12歳以上の知的障害者が演じる「チャンチャン劇団」を主宰。「個性をみがけば誰もが主役」を信条に活動。今年7月に30周年を迎えた。 年1回の定期公演のほか、海外公演も。	北九州市

【高齢者福祉部門】受賞３団体

団体名	活動内容	所在地
大槌刺し子（オオツチ）プロジェクト	東日本大震災で被災した岩手県大槌町で高齢者女性らに「刺し子」の制作・販売を主導。生きがい、コミュニティ形成、文化継承目指す。本部は京都市で、アジア・アフリカなどで紛争・災害被害者の支援活動を展開。	岩手県 大槌町
NPO法人 いこいの家　夢（ムー）みん	分譲開始から50年以上、高齢化率55%の大規模集合住宅（横浜市戸塚区）で、長年にわたって高齢者のための交流サロンを運営。サロンでは介護予防プログラムやランチを実施。住民同士の助け合い活動も行う。	横浜市
社会福祉法人 まるこ福祉会	東日本大震災を機に平均75歳の高齢者がボランティア団体を設立し、ホール、ギャラリー、サロンを地域住民に開放。ギャラリーに作品を展示した高齢者は500人超。子ども食堂も運営し、地域の伝統料理も継承している。	長野県 上田市

ランチ懇親会　席次表


窓側　東京タワー方面
読売光と愛の事業団
北沢
大槌刺し子プロジェクト
テラルネッサンス
理事長　吉田 真衣様
ChanChan夢企画
理事長　神田 美栄子様
CINEMA Chupki
TABATA
スタッフ　池田　新様
読売光と愛の事業団
水田理事長
いこいの家　夢みん
理事長　伊藤 眞知子様
With優
代表　白石 祥和様
保高選考委員
安藤選考委員
まるこ福祉会
理事長　栁澤 正敏様
CINEMA Chupki
TABATA
代表　平塚 千穂子様
読売光と愛の事業団
大浦常務理事
大槌刺し子プロジェクト
テラルネッサンス
大槌事務所代表
黒澤 かおり様
読売光と愛の事業団
山浦事務局長
読売光と愛の事業団
本多
【司会】
読売光と愛の事業団
桑原福祉助成部長
まるこ福祉会
理事　小室 邦夫様
いこいの家　夢みん
事務局長　深石　晟様
窓側　皇居方面
受賞者（一般部門）
受賞者（高齢者福祉部門）
選考委員
読売光と愛の事業団

信州民報　2023年（令和5年）12月28日（木曜日）

上田市

まるこ福祉会が「読売福祉文化賞」受賞！

高齢者部門で社会福祉法人の受賞は全国初

上田市長瀬の（福）まるこ福祉会（柳澤正敏理事長）はこのほど、第21回「読売福祉文化賞」を受賞したことから25日、上田市役所へ土屋陽一市長、小相澤隆幸副市長らを訪問して受賞報告を行った。

柳澤理事長（写真右）らが受賞報告をした

読売福祉文化賞は、読売光と愛の事業団と読売新聞社が2003年に設けたもので、障がいやハンデを持つ人たちも健常者とともに、地域社会の一員として楽しく生活できる福祉文化を創造し、発展させる担い手を発掘するのがねらい。一般部門と高齢者部門の2部門で、毎年各3個人・団体を顕彰しており、高齢者部門で社会福祉法人が受賞するのは全国初だ。

この日は、柳澤理事長と小室邦夫総務課長、小山厚志人事・企画管理課長の3人が訪問し、受賞報告と日ごろの活動内容を報告した。

小室課長は「東日本大震災から福祉を中心とした社会貢献活動がスタートした」と、地域の人とともに取り組んだ復興支援活動に始まり、子どもから高校生、大学生、地域住民、高齢者も巻き込んで子ども食堂（平成30年8月開始）を充実させていった活動など、受賞につながった取り組みを報告。

さらに「福祉の原点に立ち返り、高齢者施設、障がい者施設の運営はもとより、社会貢献活動を地域の皆さんと一緒に進めながら、住みやすい地域をつくっていきたいと応募した」など、受賞の経緯を説明した。

柳澤理事長は受賞の感謝を伝えるとともに、「日本中の社会福祉法人が、こういった形で地域福祉を実践する形になればよい」と思いを語る。市へは「地域で困りごとがあったら社会福祉法人を核にして上手に使っていただき、協働で何でもやっていきましょう」と呼びかけ、土屋市長らは地域福祉活動の功績を称えて受賞を祝った。

「人の心に幸せの種をまき、人を育てる」

明治の文豪・幸田露伴の「努力論」の中に、「人間の生き方」を三つに分類したところがある。それは「惜(せき)福(ふく)」「分(ぶん)福(ふく)」「植(しょく)福(ふく)」である。「惜福」とは、自分が持っている財産や宝を無駄遣いしないこと。「分福」とは、自分だけ楽しまず、人に福を分けてあげること。「植福」とは、幸せを、人の心の畑の中に、種を時いてあげること。そして、幸せの花を咲かせてあげる人のことです。

私たちまるこ福祉会は、この「植福」を、障害の有無にかかわらず、どんな人々も体得できるよう、施設やグループホームにおける様々な作業や生活をとおし、また、その人の人生において、心の畑に幸せの種をまき、幸せの花を咲かせることを、永遠に目指していきます。

○理念の達成を目指し、具体的実践項目として、次の事を「職員指針」と定めて、前進ある日々を送っています。

（1）オアシス宣言

「オ」…　思いやりの心で

「ア」…　明るさを大切に

「シ」…　幸せなときを

「ス」…　過ごせる職場　ホーム　まち　人生を目指す

（2）　「あいさつの心」

あ…あかるく笑顔で

い…いつでも

さ…さきに

つ…つづけて

（3）「明るい職場は、心も成長」

み…認め合う心　（尊重）

た…高め合う心　（向上と練磨）

よ…寄せ合う心　（協調）

（4）ＡＴＭ

Ａ…明るく　　Ｔ…楽しく　　Ｍ…前向きに

『五つの誓い』

一　口は、人を励ます言葉や感謝の言葉を言うために使おう。
二　耳は、人の言葉を最後まで聴いてあげるために使おう。
三　目は、人の良いところを見るために使おう。
四　手足は、人を助けるために使おう。
五　心は、人の痛みがわかるために使おう。

心も体も誰かを励ましたり、勇気づけられるように使い、感謝の気持ちで使っていけば、良い日が待っている。」（腰塚勇人さんの言葉）』

五つの誓い

「全ては、みんなの幸せのために」

総務課長　きらり施設長　小　室　邦　夫

創立20周年誠におめでとうございます。設立準備から今日まで、常に福祉に信念と情熱の全てを掛けられ陣頭指揮を執られた理事長に衷心より感謝申し上げます。また、全ての職員の皆様に心から感謝申し上げます。

その陰で支えていただいた、創立当時からお世話になっている方々やチームあったかい輪の皆様の並々ならぬご支援とご協力に、御礼申し上げます。

我が法人の「人の心に幸せの種をまき、人を育てる」理念を、私は、日々、職員の皆様、利用者や地域の方と共に実践できることが喜びであります。

現代の世界各地の侵略や変動気象、甚大な災害等、不透明な危機の時代にあってこそ、私たち一人ひとりが強き心で、利他の精神を持って、総ての人の幸せのために仕事ができることに誇りと使命を感じます。

「人は、苦労をしないと本物の人間になれない」との指針を大切に、「私は、今日も勝ちます」と心で誓い、30周年に向かって前進して参ります。

「輝く未来に向けての熱き決意」

人事・企画管理課長　小　山　厚　志

私たちの法人は、複数の分野が内部循環という仕組みを機能させた力、大規模災害に対する備えを持つ地域社会のセーフティーネットとしての拠点の力を持っています。

これを、本来持つ就労支援やグループホーム運営などの多角的な支援能力と併せ、地域の皆様にも様々なイベント等でボランティアとして運営に参加して頂くなかで、真に地域社会と一体になって貢献する社会福祉法人となり、更なる発展を目指していきたいと考えます。

また、障がい者の生涯を支えながら更なる発展を目指して行くために、職員全員が一丸となり、日々の活動に対する精査と確認・実行を行い、互いに切磋琢磨し努力を重ねていきたいと思います。

更に、自身も研修と研鑽を重ね、職員やボランティアの皆様と協力して、利用者の満足度の高いサービスを追求し、地域の皆様をはじめ、利用者、ボランティアの皆様、そして職員が共に真の幸せを感じるために、なお一層頑張っていきたいと思います。

「目指すもの」

経理課長　井　出　亜由美

私がまるこ福祉会の事務員として勤務し始めたころは、事務員とは言いっても畑で農作業をしたり、急にどんぐり山へ行って作業をしたりと様々な仕事がありました。朝出勤してから、今日の仕事は何かな？ そんな状態なので、常に着替え・長靴・雨合羽を用意していたのを思い出します。これは、理事長の「即実行」する行動力の高さによるものです。

障がい者の就労施設なので、有難いことに多種多様な仕事の提案をいただきました。理事長は、どんな内容の提案も納得がいくまで検討し諦めません。様々なことに挑戦してきました。この信念は、まるこ福祉会20周年を迎える今も変わることはありません。その信念が利用者を生涯支えることの出来る施設となりました。

まるこ福祉会が発足より目指すもの、それは「まるこ福祉会にかかわる全ての人が幸せになること」です。そのためには、新しいことへの挑戦をしながら前進あるのみです。

「地域に愛されるとんぼハウス」

とんぼハウス施設長　下　村　みゆき

まるこ福祉会創立20周年おめでとうございます。創立前よりご指導いただきました理事長には、心より感謝申し上げます。

当初は小さな小さな所帯でした。20年、いろいろなことがありましたが、早いと感じるか、やっとと感じるかはひとそれぞれです。どちらにしても大変おめでたいこと、そして大変素晴らしいことといえるでしょう。これはすべて関係者の皆様の暖かい心とまるこ福祉会職員の努力の積み重ねで今日の日を迎えることができたと思います。

継続は力なりとありますが、決して簡単にたどり着く道のりではありませんでした。そして今、私たちは未来に向け第一歩を踏み出しました。

これからは今まで通りのやり方や考えが通用しなくなるかもしれません。そのために今まで以上に、自分たち自身が変わり続けるとともに、皆様とつながっていくことといくことで新しい価値を作っていけますことを願っております。互いに成長し続けるサービス提供集団であり続けたいと強く願っております。

「地域と共に」

きらり副施設長　田　中　二三枝

きらりには、作業スペース、ぐらんまるしぇ、きらりホール、きらり市民ギャラリーがあり、通所の利用者、お店を利用する方、ギャラリーで作品の展示をする方が利用しています。時には、コンサート等のイベントでは、利用者と地域の方が一緒になって楽しんでいます。

また、近くにある上田養護学校の生徒さんも、きらりの見学、ぐらんまるしぇでのパンの買い物学習や食事、きらりホールで学級レクリエーションをするためにきらりを訪れる回数が増えています。地域の敬老会の開催、様々な会合等にも利用していただいています。

ぐらんまるしぇでは、ボランティアチーム「あったかい輪」の方が、コーヒーを淹れ、お客様やきらりの利用者に提供し、優しい言葉をかけてくれます。

A・T・M（明るく、楽しく、前向きに）を合言葉に、これからも益々、地域の方とのふれあいを大切に、地域に開かれた施設として発展していくまるこ福祉会「きらり」であるよう努力していきたいと思います。

「地域に開かれた施設をめざして」

地域密着型特別養護老人ホーム大樹　施設長　田　中　洋　子

まるこ福祉会20周年を大樹職員、利用者の皆様と共にお慶び申し上げます。

「障がい者も高齢者もこの地域で安心して暮らせる居場所づくりをしている」まるこ福祉会に就職し私が思った事でした。

私は20年以上高齢者福祉に携わってきましたが、実際に障がい者が高齢になり介護が必要になったらどこに行けばいいのか。

まるこ福祉会での取り組みに超高齢者社会問題では、一番後回しにされてしまう「高齢になる障がい者の居場所づくり」を目標の一つとし大樹でも取り組んできました。この事は私の福祉に対する考え方が180度変わる人生のターニングポイントとなりました。

「人間は誰もが幸せになる権利がある。」まるこ福祉会がめざす理念でもあり、「全ての人の幸福」その人の人生おいて心の畑に幸せの種をまき、幸せの花を咲かす事のできる組織づくり、人材育成を目標に、地域で安心して最後まで暮らすせる居場所づくりが目指して尽力して参ります。

「ともに歩むグループホーム」

グループホームとんぼ管理者　金　井　正　子

現在、まるこ福祉会には、グループホームが4か所あり利用者は通所事業所に通いながらホームで生活されています。それぞれのホームに特色があり、特に令和5年春に完成したホームとんぼⅢはバリアフリーの構造で、入浴設備は特別浴槽と手すり付き個別浴槽が設置されており、支援により安全に入っていただいています。

ホームでは、一人ひとりの持てる力の発揮と自立支援に向けた取り組みを行っています。利用者の皆さんの生活の様子を見ていますと、趣味の幅が広く活動的に過ごされています。また、助け合いの精神も持ち合わせており、困っている仲間がいれば自然と手を差し伸べてくれる皆さんです。

週末には、買い物に出掛け地域とのつながりも大切にしています。スーパーや薬局、美容院など色々なお店に行き地域の皆さんにも育てていただいています。

これからも生活の幅を広げて行かれる様、見守っていきたいと思います。

私たち職員は、世話人（支援員）の皆さんと協力しながら、利用者の生活向上に向け、ともに歩みを進めていきたいと思っております。

「一歩を踏み出せた自分」

とんぼハウス　利用者　市　村　初　江

とんぼハウスに来てから『通う』という楽しみができた。今の自分は小さな仕事でも遣り甲斐を持って取り組めている。

一般企業にいた時は人との付き合い方や、自分が思っていた以上の仕事を受け持ってしまうことがあり苦労した。生きづらさ、暮らしづらさを感じて、だんだん世の中から置き去りになっていくような思いになった。

でも、私はとんぼハウスに来て一歩を踏み出せた。今は、のびのびと楽しく生活できることが幸せだと感じている。

「将来はグループホームで自立したい」

きらり　利用者　佐　藤　栄　寿

僕は、まるこ福祉会に通所を始めて16年になります。パンの作業で、今ではパン生地を一人で練ることができるようになりました。もうちょっと仕事が増えて、工賃も上がるといいなと思います。今の仕事が好きなのでこれからも続けていきたいです。

そして、将来はグループホームで生活をして自立したいと考えています。イベントやバス旅行などみんなで楽しく過ごしたいです。

「感謝の言葉」

大樹　利用者代表

まるこ福祉会20周年おめでとうございます。

私は、入居し6年近く経ちました。昔は外回りの仕事をしながら畑仕事をしてきました。大樹ではプランターで野菜を作る事が楽しみで時期になると野菜作りをします。ここに居ると一人になる事はないし食べ物も困る事はないから安心しています。

今年97歳になりました。100歳を目標に頑張りますのでまるこ福祉会の職員皆様も体に気を付けて頑張って下さい。

「みんな仲良く、楽しい生活をいつまでも」

グループホームⅢ　利用者　半田　卓・瀧澤歩夢

僕たちは新しいグループホームが昨年できて、そこで生活しています。今まで自宅で生活してきたので、慣れるまで少し時間がかかりましたが、きらりの仲間やホームの皆さんとの生活は楽しいこともあると感じています。世話人さんたちもたくさんいて、僕たちの生活で入浴や食事の用意、掃除など色々応援してくれています。僕たちは、自分で出来ることは人の手を借りずに実行し頑張っています。自分でたくさんの事が出来た時には、嬉しいです。

ホームではイベントもあり、回転ずしに行きお腹いっぱい食べたり、音楽のコンサートにサントミューゼにも行きました。これからもみんなで楽しい時間を過ごしていきたいです。みんなで仲良く、元気で生活していきたいです。

2017年5月12日

「工事の音、うるさいね」

利用者の声

障害福祉サービス事業所、きらりの改築工事は、平成29年５月から２か月かけて始まったのでした。

コンクリートを打ち砕く音は、同じフロアーで仕事をしている利用者や職員にとっては、まさに、うるさい音、騒音として受け止めていました。

その音に耐え切れず、ある女性利用者が叫びました。「工事の音、うるさいね」その一声に、だれもがうなずき、「うるさい」、「うるさい」の声だけが、周辺に広がっていったのです。職員も、「どうしようか」と困惑した顔を隠せませんでした。

その時でした。ある女性利用者が、こう叫んだのでした。

「私は、うるさいとは思わないよ。だって、あとで、きれいなきらりになるんだから」と、更に続けてこう言いました。

「仕事をしている人は、きれいな建物を作るために、一生懸命、仕事をしている。一番、このうるさい音を、一番近くの耳で聞いている人は、その仕事をしている人だと思う。」と。

『心がきれいだと、うるさい音も、音楽になる』ことを、みづきさんは、私たちに教えてくれたのでした。

その後、利用者や職員の朝礼でお伝えをしました。その後は、「うるさい」という口癖は、ほとんどなくなったのでした。

さらに、この実話は、工事現場の社員朝礼でも、職場の責任者から現場の社員全員に伝えられたのでした。その責任者は、こう語っていました。

「今まで、いくつもの現場工事を担当してきましたが、このような言葉を言われたのは、人生、初めてのことです。どんなにつらい仕事でも喜んでできるようになりました。」と。

Ｍ・Ｍさんの感性のすばらしさに脱帽です。そして、相手の立場に立って考えられる、この点も感動です。

2019年7月18日

「ねえ、ねえ、ねえ、いいところ見つけたよ」

休憩後の10時40分頃のことでした。上田プラスチック株式会社から帰ってきた車が、きらりの玄関前に到着した時のことです。

Y・Kさんが、私のところに走って来たのでした。「ねえ、ねえ、ねえ、いいところ見つけたよ」と、息を切りながら一気にそう言ってきました。

「どんないいことを見つけたか、教えてくれる」と聞こうとするより先に、つかさず語気を強めて言ったのです。

「あのね、あの段ボールを積んだ車が来たらね、M子さんとK子さんが、男子より先に、車から製品の荷物を降ろすために、すぐ、車の前に走って行ったんだよ。それでね、すぐ、職員の方と一緒に、荷物を降ろしたんだよ。重いんだよその段ボールは。すごいね。偉いね。なかなかできないね。」

◎この日は、猛暑で外気は、35度を超える暑さです。その中を納品に行き、その帰りは、製品を車に積んできらりに戻って来たのでした。そこに、女性利用者２人は、懸命に作業に取り組んだのでした。

大変な場面を、Y・Kさんは、逃さずにちゃんと見ていたのです。お友だちの良さを直ぐに発見する心の清らかさ。

そして、その良さを皆さんにお伝えしようとその模様を教えてくれたのでした。この話は、早速午後の帰りの会で紹介をすると、利用者から大きな拍手が自然に捲き起こったのでした。

「悲しさは、皆で分ければ消え失せる、喜びは、２人で分かち合えば４倍に」

2018年5月15日

「鏡がきれいだと映るものもきれいに映る」

～Y・Kさんのすばらしさ発見～

Y・Kさん「①Tさんは、足がけがをしているけど、大丈夫かなあ、でも、いい男だよ。
リールの仕事も早いよ。すごいよ。」
「②T・Rさんも、早いよ。仕事も早いよ。すごいよ」
「③Tちゃんも、落ち着いていてすごいよ」
「④K・Yちゃんは、高等部で後輩、先輩のお友だちです」

こうして、Y・Kさんは、おともだちの素晴らしいところを、よく見ていて、見つけて話してくれました。

近くにいた人たちから「Y・Kさんは、段ボール箱の中に、いろいろな宝物が詰まっているんです。すごいですよ、いっぱいあります」と言ってくれました。

それを聞いていた、私は、大変嬉しくなりました。お友だちの良いところを見つけ出すということは、それだけ、Y・Kさんの心が、きれいで、大きくて、深いからからです。

社会では、いじめやいやな事件がたくさん起きています。絶対あっては、ならないことが、残念にも平気で起きています。どれほど、大勢の人たちが悲しみ、苦しんでいるのでしょうか。

それに比べて、Y・Kさんやみなさんは、人のよさを発見できるという、素晴らしい個性と心を持っています。

心がきれいだから、まわりのきれいなものがきれいに見えるのです。例えば、鏡が曇っていれは、きれいなお花もきれいに映りません。同じように、こずえさんや皆さんの心の鏡がきれいだから、きれいなものがきれいな心の鏡に映るのです。なんと、素晴らしいことでしょう。

2019年9月20日

「壁の写真が落ちています」

9時22分にS君が、職員に伝えてきたこと、それが、「壁の写真が落ちています」でした。

その職員が、現地に行くと、理事長と雪村いづみさんが握手をしている写真が、模造紙から落ちかけていたのでした。この写真は、理事長もみんなも日頃から大切にしていた思い出の写真でした。

S君は、落ちていた写真を何とかしようと試みていたのですが、なかなか壁に貼れなかったのでした。

それに気づいたS君は、職員に教えてくれたのでした。

S君は、いつも、自分たちが作業をする大切な事業所の部屋全体を見ているのです。きれいな壁にきれいな写真が飾られていることをいつも望んでいるのです。S君のそのきれいな心は、今、S君の心のギャラリーに展示されています。

「黙って掃除をしていたT君」

朝8時45分、事業所内で、1人黙々と掃除をしていた利用者がいました。

清掃用具箱からそっとほうきを取り出し、何気ないしぐさで机の下を掃除したのでした。

5分ほどすると、掃除をする場所は、食堂に移り始めました。椅子を移動させてから、その椅子の周辺にあるごみをきれいに掃き始めたのでした。

この間10分は、なんとさわやかな時間となりました。だれかに言われてから掃除をするのではなく、自ら進んでの掃除でした。

みんなのために、そして、みんなが気持ちよく仕事ができるようにと考えて、掃除をしたT君に拍手を送りたいと思います。

（2020年４月21日　ＦＡＸ送信されたプリントから抜粋）

「草取りをしてくれた皆さん、ありがとう」

道路で車を走らせていると、まるこ福祉会と書いてある大きな看板の下で、大勢の人たち（障害者の皆様でしょうか）が、何かしゃがんで仕事をしているようでした。

よく見ると、草を取っていました。車の音もきっとうるさいはずなのに、全員の皆さんが、一生懸命作業をしていたのでした。

作業をしている皆さんは、きっと草をとって、きれいな駐車場にして、大勢のお客様を、心からお迎えしようとする心の表れだと思いました。

そして、よく見ると、車の通る道路の近くにある草まで取ってくれていました。思わず、ありがとうございますと言いたくなるほど、いい気分になりました。自分たちの駐車場だけでなく、大勢の人々が通る道まできれいにしようとする、心の大きさを感心しておりました。

車の横に座っていた、おばあちゃんは、「偉いねえ、みんなのために、きれいな道にしようと、草をとっている皆さんは、本当に、ありがたいと思いました。すばらしいことだと思います。

誰が見ていてもいなくても、みんなのために道をきれいにしようとする心こそが、きれいだと思いました。

ありがとうございました。心のきれいなみなさんへ

2019年9月20日　利用者のミーティングで

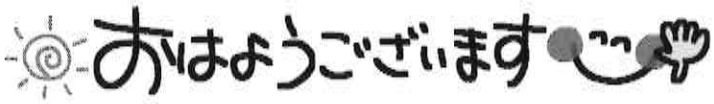
「この世を平和へと導くには、２つの力が必要である。
１つは、正義。もう一つは、礼儀である。礼儀の基本はあいさつである」

（ドイツの文豪、ゲーテの言葉　1749年生まれ）

・毎日、何気なくおこなっているあいさつ。最も地道であり、究極でもある。それを続けることもすばらしいことです。

・利用者のＫさん、Ｍさんはじめ多くの方が、毎朝、事業所に来るとき、必ず、「おはようございます。」と言って大勢の人の心に太陽を昇らせてくれます。

・「あいさつの心」を、毎日、実践したいと思います。
あ・・明るく、**い**・・いつでも、　**さ**・・先に
つ・・続けて　を実践している人は、偉大である。



社会福祉法人まるこ福祉会の障害福祉サービス事業所「きらり」に通所している
Mさんの作文を紹介します。

Mさんは、３年前の令和元年６月４日の午前８時、自宅から自転車で通所する途中の道路で、前から歩いて来た小学生の横列を避けようとハンドルを切ったところ、深さ80センチの側溝に自転車ごと落下し、顔面を打ち、救急車で運ばれるという大きな事故が起きてしまいました。

救急センターに運ばれた彼女は、顔面と唇、歯から流血が止まりませんでした。緊急手術後、ベッドに戻った顔面は、包帯がぐるぐるにまかれ、申し訳なさそうな２つの目だけが、包帯からのぞかせている状態でした。

事故を聞いて駆け付けた母親は、ベッドの前で、包帯だらけの我が娘を見た瞬間、娘のMさんは、涙をこらえながら必死にこう言ったのです。

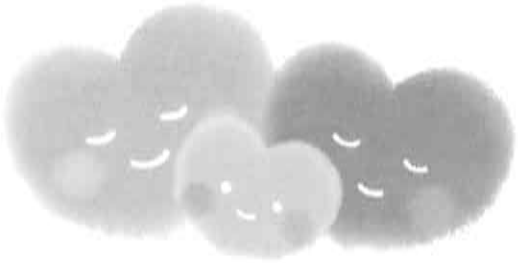
「お母さん、ごめんなさい、こんな顔になって、許して、ごめんなさい」

最後は涙で聞こえないほどでした。その時です。

「大丈夫だよ。お母さんの子だから。必ず、元通りの顔になるから」と、お母さんは、力強い声で、娘に言ったのです。

「おかあさん、ごめんなさい、ありがとう」とMさんの目は、もう涙で見えないほどでした。

その２か月後に退院し、自宅で書いた作文が、まるこ福祉会「心の広場」のコーナーに掲示され仲間も毎日見ています。



『大丈夫だよ』

Mさん

例え、顔に、一生残る傷ができていても、ただ、その事で
落ち込んだり、沈んだり、泣いたりしないで、心の中から

「いつもの様子で　進んでいけば　そんなに傷ついた顔を気にせず、
いつも通りに進んで行けば
だんだんと　自然に落ち着いて
いつも通り　通常になるから
安心して　いいんだよ」

その事を　心の中で　思っていれば
自然と直るから　　大丈夫だよ

そのような事を　忘れているから
安心して　まだ　人生は　長く続くから

まっすぐ　希望の道へと
まっすぐ　進んでいけば
また　新しい未来が　待っているから

きっと　大丈夫だよ
大丈夫だよ
（作　２０１９年8月１４日　Mより）

２０１８．５．１

「おかあさん」

利用者　Ｍ・Ｍさん

朝早く起きるおかあさん。おかあさんの顔をみるとほっとして、安心します。やさしいおかあさんの顔が大好きです。

私も、一緒に起きるけど、布団の片づけは、私の仕事です。その間、お母さんは、毎朝、ご飯の用意をしてくれます。おかあさんの料理は、最高です。

その料理をつくってくれるお母さんの手は、温かく、そのあたたかい手で、食事を作ってくれます。ありがとう、おかあさん。

きらいへの送り迎えも、おかあさんがやってくれます。きょうも、あしたも、ずっと。
天気のいい休みの時は、私とお父さんとお母さんの３人でドライブにいきます。

今、きらりで仕事ができるのも、こうして、3人でドライブにいけるのも、みんな、おとうさんとおかあさんのお陰です。
私は、いつも、心の中で、おとうさん、おかあさん、ありがとうと言っています。いつまでも、元気でいてください。

２０２１年2月２６日

「利用者の姿から学んだこと」

５万円を寄贈してくれた、信越国税局の職員のお話し～（K･Fさん）

（2021 年2月 25 日　午後8時　電話にて）

まるこ福祉会

３年ほど前に、祖母から、まるこ福祉会でボランティアをしてごらん、素晴らしい環境のところだからと言われました。

その後、私は、横浜国立大学で就職活動をしているときでした。まるこ福祉会のきらりで、障害者の皆様と一緒に仕事をさせていただきましたところ、ある背の高い若い男性（利用者）の方が、何やら、手にメーターでしょうか（時計）をもって、時間になると、同じ障害者に呼びかけていました。

すると、障害者の皆さんも、その呼びかけに合わせて、掃除をしたり、仕事を開始したり、食事をするのでした。

この光景から、ここの職場には、言葉に出さなくても、心が繋がっている事だと思いました。信頼とは、このことでしょうか、

そして、レストランに行くと、その障害者の方と、老人ホームの方、地域のボランティアの方が、楽しそうに、コーヒーを飲んだり、お話をしておりました。

障害者の施設の暗さや、辛さ、困難さなど、何も感じられませんでした。
家族といいますか、ファミリーと言いますか、そんな温かさを感じました。

私は、そのまるこ福祉会でのボランティアの貴重な経験が、就職試験の時の面接で、大変役立ちました、

世の中、大変な社会であっても、心の明るさがあれば、職場の環境を良い方向に変えていけるということを学びました。

そして、障害の有無は、心で決まることも学びました。だれでも、どんな人でも、周りの人間を明るくできることも学びました。

この経験を、今の職場で生かしていきます。

社会福祉法人まるこ福祉会２０年の歩み

平成15年　2003年	４月１日　丸子町社会福祉協議会の事務局長として柳澤正敏が着任 ５月９日　社会福祉法人設立の決意・準備委員会をスタート
平成16年　2004年	３月29日　社会福祉法第31条第１項の規定により「社会福祉法人まるこ福祉会」が認可 ４月１日　社会福祉法人まるこ福祉会「知的障害者通所授産施設とんぼハウス」の開所
平成19年　2007年	４月１日　障害者自立支援法による「障害福祉サービス事業所・多機能型事業所」就労継続支援Ｂ型　定員24名　生活介護　定員６名　開始 12月１日　グループホームとして「ホームとんぼ」開設
平成20年　2008年	１月24日　緊急理事会において柳澤正敏が理事長に推薦される １月29日　柳澤正敏が理事長に就任　(上田市役所を退職) ６月26日　福祉文化活動の一環としてワールドキャンパスインターナショナルと国際交流 ９月10日　発芽玄米パンの製造に成功し、大企業での無人販売スタート 11月２･３日　県を代表全国ふるさとフェア（横浜赤レンガ）でパン販売 11月21日　ＮＨＫイブニング信州収録「発芽玄米パン」わが町自慢の逸品にて放映
平成21年　2009年	７月24日　初めての利用者の海水浴　(新潟県石地海岸) 12月１日　就労継続支援Ｂ型　定員30名（通所）に変更 12月12日　すてきなパパ講座開催
平成22年　2010年	３月１日　㈱ツルヤ全店で発芽玄米食パンを販売 ７月13日　ワールドキャンパスインターナショナルと国際交流 ７月23日　利用者の海水浴　(新潟県石地海岸) ８月１日　㈱ツルヤへ「信州きのこ米ぬかで育った改良土」を初出荷 ８月24日　パントマイム上演　(小島屋万助・羽鳥尚代) ９月14日　信濃毎日新聞の「ひと探訪」コーナーに「障害者の生涯を手助け」と題し柳澤理事長が紹介される
平成23年　2011年	３月５日　とんぼハウスで「イ・ヨンボ」ホームコンサート開催 ３月11日　東日本大震災　この日から、災害支援を始める 市内企業・市民に呼びかけ災害支援物資をとんぼハウスに集める (米、防寒具、薬、日常品等様々) ３月22日　第１回　東日本大震災の災害支援物資を11トン車で、福島

	県いわき市と南相馬市に届ける 3月24日　第2回　災害支援物資をいわき市に届ける 3月27日　第3回　災害支援物資をいわき市に届ける (災害物資を4月～12月まで車両2台分を継続して届ける) 3月31日　どんぐり山の土地建物の一切の管理を本会に託される 4月1日　グループホームとんぼⅡ　新築・開所 5月14日　ボランティアを含め70名で、どんぐりの植樹500本 5月16日　とんぼハウス　利用者の送迎サービス開始 7月22日　利用者の海水浴　(新潟県石地海岸) 12月6・7日　福島県の災害支援として、福島県「華の湯ホテル」に仮設住宅に住む被災者を招待しコンサートと温泉・飲食で交流支援
平成24年　2012年	1月26日　とんぼハウスにトレーラーハウス完成 2月4日　長瀬パン工房完成 4月1日　相談支援事業所「とんぼハウス」を開設 4月21日　災害支援活動の一環で、栄村の仮設住宅へ支援ボランティア 5月12日　どんぐりの植樹1,000本達成 6月15日　上田映劇にて『愛染かつら』をNPO孫の手と協働で無料開催 8月11日　第1回　霊泉寺クリーンフェスタ開催 8月28日　ショッピングセンター「ラッピー」跡地、イオンと売買契約が成立し土地・建物を取得、法人の基本財産として登記 12月15日　障害福祉サービス事業所「きらり」開所 「障害の有無に関らず、人はみな特徴があり、無限の可能性がある」その人でなければならない「きらり」と光る人間になってほしいとの願いで「きらり」と名付け、「就労継続支援B型」の定員20名からスタート 三代目コロムビアローズ・野村美奈の友情出演で歌の披露
平成25年　2013年	1月25日　まるこ福祉会の法人本部をきらりに定める 3月8日　とんぼハウスの改修工事完了 6月20～30日　「狐塚ほたる祭り」の駐車場として、まるこ福祉会の駐車場を無料開放 7月12日　第2回　霊泉寺クリーンフェスタ開催
平成26年　2014年	3月13日　きらりにて「イ・ヨンボ」ホームコンサート開催 7月12日　第3回　霊泉寺クリーンフェスタ開催 8月8・9・10日　災害支援活動の一環「福島っこ夏の学校」開催 10月4日　「社会福祉法人まるこ福祉会創立10周年記念式典」開催

	11月10日　災害支援の一環として、福島県浪江町の馬場町長講演会開催 12月26・27・28日　災害支援活動として「福島っ子冬の学校」開催
平成27年　2015年	2月26日　災害支援活動でシンポジウム「福島の子どものために今上田でできること」開催 3月27・28日　災害支援活動で、「福島っ子春の学校」開催 4月1日　ボランティア団体「チームあったかい輪」結成 4月30日　「ホームとんぼⅣ」開所 5月30・31日　東日本大震災被災地気仙沼にて理事会・評議員会を開催し視察研修実施 7月11日　「クリーンフェスタ・イン霊泉寺2015」開催 7月19日　きらりにて矢杉良一の絵画展と武田徹のトークショー 8月16・17・18日　東北から東京への避難者を支援（食事・観光） 8月20・21日　福島母子リフレッシュ事業の支援
平成28年　2016年	6月8日　マイクロバスにて利用者の観光旅行「トトロの旅」始まる 6月18日　信州国際音楽村にて黒坂黒太郎さんと利用者がコカリナ演奏 6月28日　きらりにて「野村美奈」コンサート開催 7月9日　第5回　霊泉寺クリーンフェスタ開催 10月15日　厚生労働省の先進的事業整備計画である福祉空間施設「あったか空間きらり」開所 サロンあったかい輪、きらりホール、きらり市民ギャラリーが開設 パン工房ぐらんまるしぇと総合厨房が事業開始 10月27日　横浜市緑区の民生児童委員138名視察研修 12月21日　あったかい輪クリスマス会「武田徹」トークとハーモニカ
平成29年　2017年	1月23日　地域診療所「かんわ」開設 3月21日　地域密着型特別養護老人ホーム「大樹」開所 4月19日　お花見コンサート開催「小山貢渓」・「米谷儀男」 7月8日　「クリーンフェスタ・イン霊泉寺」開催 7月13日　野村美奈コンサート開催 10月2日　パレットハウス開所
平成30年　2018年	3月15日　きらりにて落語と紙芝居「立川流・立川かしめ」開催 4月5日　「大野俊三」（グラミー賞2回受賞）チャリティーコンサート「春・希望のハーモニー」を信州国際音楽村ホールこだまで開催 4月9日　「雪村いづみ」チャリティーショー開催 6月4日　「三浦潤一」画伯きらり市民ギャラリーで展示開始

		7月23日　シンガーソングライター「湯澤かよ子」コンサート開催 8月4日　第1回こどもレストランきらっと開始 8月22日　きらりホールにてハナレイハワイアンズ演奏会 9月4日　きらり市民ギャラリーで、県下初の「鳥里鳥沙チベット写真展」開催 9月15日　きらりホールにて「岩沢あゆみ」コンサート開催 11月21日　「大井まゆみロゼッタシャンソン教室」より歌のプレゼント 11月28日　映画「兄消える」発表試写会、俳優「柳澤慎一」より本会の紹介あり
平成31年 令和元年	2019年	2月2日　「月刊福祉2月号」グラビアの7頁にわたり、まるこ福祉会掲載 2月28日　シンガーソングライター「イ・ヨンボ」コンサート開催 3月4日　中国の農業関係者等11名と国際交流 埼玉県東朋短期大学「浅香教授」本会視察 3月22日　フランスの農業関係者13名と国際交流 5月1日　改元「令和」元年スタート 『人々が美しく心を寄せ合う中で、文化は生まれ育つ』 5月1日　「令和記念樹」の植樹 5月2日　あったかい輪の皆さんがきらりにてフリーマーケット開催 6月19日　ＮＨＫ総合テレビ、「イブニング信州」で、こどもレストランきらっと放映 6月22日　ＳＢＣ信越放送ラジオ「ぶらり散歩」でも、こどもレストランきらっとの様子がラジオ放送 7月24日　社会貢献ワーク…中国北京の学生19名どんぐり山にて草刈りボランティア、終了後に餅つきと国際交流 午後は「遠藤一己」ひとり音コンサート開催 8月8日　きらりホールにて「ヒロ・タッキー」による腹話術 8月24日　きらりホールにて「岩沢あゆみ」コンサート開催 9月3日　田中美恵子バイオリンふれあいコンサート開催 9月22日　福島県南相馬市へ職員研修 10月12日　台風19号の大雨と大風の影響で箱畳沢が氾濫しホームとんぼⅣが床下浸水、水深15cmの道路を利用者9名引率しホームとんぼⅠ・Ⅱに避難するがそこも下堰が溢れ、再度床下浸水、特別養護老人ホーム大樹に避難

	11月12日　チェコスロヴァキアのプラハブラウンシュタイン「ライヤー」アリーナペッカトン「ハーブ」の演奏会開催
令和２年　2020年	パンデミックの前兆でコロナ感染拡大 １月18日　「遠藤一己」チャリティーコンサート開催 ２月27日　安倍晋三首相が、新型コロナウイルス感染防止対策として全国の小・中・高校の学校に対して休校を要請 ３月３日　「休校中こども支援レストラン」を開始し19日まで開催 (５月６日のＮＨＫイブニング信州にて放映) ４月８日　４月７日の新型コロナウイルス緊急事態宣言を受け「まるこ福祉会緊急対策本部」設置 ７月10日　宮崎県産の鰻を鰻重として日本一安い価格で販売 ７月30日　とんぼハウスの土地建物を上田市から取得 ８月１日　こどもレストランきらっとで「立科アンサンブル」の演奏会開催 ８月８日　きらり夏まつり「夏の歌まつり＆平和の心　詩の朗読コンサート」開催 10月３日　第25回こどもレストランきらっとを、どんぐり山で開催 立科シンフォニーの演奏・山歩き・ジップライン等野外遊びを楽しむ 10月12日　「台風19号に学ぶ」で、避難訓練と消防署員の講演 10月15日　「福祉空間施設開設４周年記念行事」開催　「ロゼッタシャンソン教室」「近藤聡」(バイオリン)「秦野正博」(ピアノ)によるコンサート 11月５日　「食の健康塾」北海道「川西輝明」ドクターによる講演会 11月23日　「蓼科音楽の森」結成式をきらりにて行う
令和３年　2021年	１月16日　第１回うえだこども食堂を、上田社会福祉協議会で開催 ２月６日「こどもレストランきらっと祭り」開催　550名が参加 ３月11日　丸子修学館高校の生徒が企画した「あれから10年　３．11震災の心バトンリレー」開催 ３月30日　きらりにて「第１回０円食堂・０円スーパー」開催 ５月１日～６月30日　「谷本清光」画伯の絵画展示会 ６月１日　ＮＰＯホットライン信州の活動をサポートするために、東信地区のこども食堂の物流拠点として、ギャラリー横の事務所開設 ６月26日　災害支援活動の一環として、まるこ福祉会役員が福島県いわき市視察研修 ７月５日　「小河滋二郎」博士顕彰会の研修会をきらりホールで開催

	8月6日　「平和の心メッセージとコンサート」開催 9月16日　ＮＰＯホットライン信州と連携「相談窓口まるこ福祉会」発足 10月15日　「福祉空間施設開設５周年記念行事」開催　「大井まゆみロゼッタシャンソン教室」「蓼科音楽の森」の皆さんの人形劇及びピアノ演奏など実施 10月27日　チームあったかい輪結成５周年記念研修で、静岡県視察 12月４日　「子ども食堂＆カフェ・子どもの居場所づくりセミナー」開催 12月19日　「０円スーパー」を上田市長瀬市民センターにて丸子ライオンズクラブと協働開催
令和４年　2022年	1月4日～3月末　きらり市民ギャラリーで「堀尾園子」の油絵展開催 2月5日　第42回こどもレストランきらっと開催　「すし処はせ川」の生寿司と「近藤聡」の生バイオリンを楽しむ 2月28日　上田高校の生徒５名が、校内で集めた食料品等324点寄贈 3月5日　第43回こどもレストランきらっと開催　「秦野正博」のピアノ演奏を楽しむ 3月11日　上田高校生が企画「あれから11年３．11震災の心　バトンリレー」で、避難訓練と高校生の被災体験を聞く 4月20日　とんぼハウスで、ツリーハウス、滑り台の「とんぼ癒しの空間」オープニング 7月1日　「市川正臣油彩画遺作展」開催し、絵画「浅間山」は、こども食堂の皆様にと寄贈され、ホール内の左右２か所に掲示 8月6日　第48回こどもレストランきらっとを開催、上田高校生の被災体験発表等 8月30日　横浜創英大学、関西国際大学、京都光華女子大学から４名の大学教授が視察研修 10月1日　「第50回こどもレストランきらっと記念セレモニー」開催 11月19日　東京霞が関の全国社会福祉協議会で開催された「2022全国ボランティアフォーラム」において、栁澤理事長が「ひろがるボランティアの輪　居場所づくり」について事例発表
令和５年　2023年	3月1日　こどもレストランきらっとで、高校生と大学生が小学生に伝える「３．11東日本大震災の震災から学ぶこと」を開催 4月1日　第56回こどもレストランきらっと開催 「近藤聡」バイオリンの生演奏を楽しむ

	5月19日　「佐々木秀美ボランティアコンサート」開催 7月24日　かがやき工房が完成 9月29日　「福島の魚を食べる会」を開催、１都９県から135名が参加 10月５日　「相澤洋正」ボランティアコンサート開催 10月7日　第61回こどもレストランきらっと「相澤洋正」ピアノ演奏を楽しむ 11月９日　連合婦人会主催の「暮らしのフォーラム」開催 12月２日　国際的に有名なユベール・スダーン指揮の「オールモーツァルトプログラム」演奏会にまるこ福祉会として、関係者を含め175名が参加 12月11日　読売新聞本社（13階・32階）において、「第21回読売福祉文化賞」の授賞式及び祝賀会に受賞の栁澤理事長と小室理事が出席 12月27日　地域に開かれた災害対策として、非常用ガスバルクと大型ガス発電機（三相200Ｖ）と100Ｖの発電機２台を設置しブラックアウト時にも水洗トイレが利用でき、事務所や厨房も電気使用が可能となる
令和６年　2024年	１月１日　午後４時10分、令和６年能登半島地震が発生 １月８・９日　まるこ福祉会職員有志として、小山厚志課長以下３人が、輪島市の「社会福祉法人弘和会」の一互一笑に災害物資を３トン車で運搬し、２ℓのペットボトル「ときわの命水」1,500本、布団上下と毛布一式を60組、米、トイレ用に使うビニール袋、割り箸、紙皿等を現地へ届ける １月17日　「がんばれ能登半島、震災の心　バトンリレー」 能登半島地震と阪神淡路大震災における被災者とボランティアの発表後、避難訓練をし、ブラックアウト時のガス発電によるトイレ使用等の効果を説明 ２月３日　第65回こどもレストランきらっと開催、総計7,142名の参加 ２月23･24日　能登半島地震災害支援として、小山厚志課長が輪島市の社会福祉法人弘和会の一互一笑に、２回目のボランティア活動として派遣 ３月２日　第66回こどもレストランきらっと開催　ドゥルガ　バハドゥール　スベディ駐日ネパール特命全権大使をお迎えし国際交流を実施 ３月８日　まるこ福祉会、You tubeチャンネル開設 ３月11日　高校生と大学生が創る「震災の心バトンリレー」 ３月29日　社会福祉法人まるこ福祉会創立20周年記念祝賀会の開催及び20周年記念誌発行

まるこ福祉会の「社会貢献活動」

社会福祉法の第４条に、「地域福祉の推進は、地域住民が相互に人格と個性を尊重し合いながら参加し、共生する地域社会の実現を目指して行われなければならない。」とあります。

私たちは、創立当初から、この地域福祉に視点を置き、「地域の灯台」として、様々な団体や人々と協働で、「社会貢献活動」を進めてきました。その代表的な活動として、①ボランティア団体「チームあったかい輪」との協働、②こどもレストラン・休校中こどもレストランの運営、③「０円食堂・０円スーパー」の開催、④社会事象を地域課題として捉えた活動、⑤福祉空間施設での活動、⑥どんぐり山の環境整備、⑦地域に開かれた災害対策を始めとした取り組みを、ここに紹介します。

1　ボランティア団体「チームあったかい輪」との協働

私たちの願いは、地域住民との協働による『地域福祉の灯台』としての自覚と使命に燃え、地域住民の文化活動及び人権尊重の精神の高揚を推進し共生社会に輝く「生涯学習の学び舎」を構築するものであります。

平成27年に結成されたボランティア団体「チームあったかい輪」の皆様との協働は、令和６年で９年目を迎える。会員数30名、平均年齢75歳の皆様は、月曜日から金曜日まで、午前11時から午後１時半まで毎日、当番制でサロンあったかい輪のカウンター内に入り、コーヒーをお客様に提供し、来客や利用者の話し相手になったりする。令和６年２月までのボランティア活動は、1,750日間に及びます。

また、きらりホールで行われる「えんじょいプログラム」のボッチャや布遊びを始めとした各種講座の運営もされています。

あったかい輪の皆様の長年にわたる多大なご尽力により、当初「白いサティアン」と言われたこの福祉空間施設は、生まれ変わり「地域住民の心が繋がり温まるオアシス」となり、その結果、ボランティアとして参加される皆様は、日々輝きの笑顔とはつらつとした姿から、「生涯、青春」そのものであり、来客の人々に、勇気と希望を与えてくれている。「たった一杯のコーヒー」から「潤いいっぱいの幸せ」の時間を楽しめるサロンになったと多くの方々の声が聞こえてきます。

2 「こどもレストラン、休校中こどもレストラン」の開催

子ども食堂の原点は、平成12年に東京の練馬区で始まった「貧困家庭の子どもに食事を提供する」ことが発端であるが、現在は、様々な課題解決の活動にと変容しています。

現在、全国で9,131余か所（ＮＰＯ法人全国こども食堂支援センターむすびえ、2023年12月調査）あり、充足率約41%です。

私たちの「こどもレストラン」（通称、こども食堂）は、平成30年８月４日に第１回を実施して以来、毎月第１週の土曜日に開催し、令和６年２月現在、7,142名の参加者をみています。

（1）まるこ福祉会が目指す子どもレストランの第１の特長は、核家族化や超高齢社会の到来により、子どもからお年寄りまで、互いに支え、認め合い、高め合う人権尊重を基盤にした、思いやりの心を耕すこどもの居場所づくりである。と同時に、異世代間交流の場として企画運営をしています。

（2） ２点目の特長としては、その運営スタッフの中心として、地元の高校や大学の学生たちが、毎回意欲的にボランティア活動として参加し成長している点です。子どもと共に遊びや学習、集団活動を通して、子どもとの関わり方やコミュニケーション能力を学び、将来は、子どものための職業に就きたいと考え、大学の教育学部や福祉学部を受験し見事合格した高校生、大学卒業後、教育関係や福祉関係に大勢の方が進出。中でも、市町村県の職員となって児童相談所や福祉施設で勤務する姿、学生ボランティアから教員となって教え子と共にこどもレストランに　ボランティア参加している姿等、輝く姿が随所で見られます。後段に体験記を記載します。

（3）「子どもレストラン・きらっと」での風景から

○新聞記事から「高校生と大学生のボランティアに拍手」

『ボランティアで参加した地元の高校生と大学生18名が、英語鬼ごっこで、小学生をおんぶして逃げ回る姿。転んで床に座り泣いている女の子の手を引いて椅子に座らせ安静を施す女子高校生。部屋で学習する小学生に寄り添い助言する大学生。皆で作ったピザを、テーブルでは小学生が大学生と談笑しながら食事を。清掃も若いボランティアが行いました。先日は、26名の高校生と大学生が、子どもを引率して近くのバラ園に遠足。横断歩道では高校生が小学生の手を引いて渡る姿が。バラ園で写真を撮ると、小学生、高校生、大学生が肩を寄せ合ってカメラの前に座る姿。昨年、ユネスコで発表された「子どもの幸福度」では、日本は38カ国中37位の最低の数字である。物の豊かさ

には恵まれても心の豊かさに欠乏している日本の子どもたち。

しかし、子ども食堂で、学校や家庭では味わえない異年齢集団で遊ぶ・学ぶ・食べることで、自然に心がつながっている。大学生は、「ボランティアで子どもと触れ合うと自分の心が磨かれます」と。「今時の若者は」と言われた過去は去り、「今どきの若者は、豊かな心で熱と力がある」と感じているこの頃です。』（令和３年７月１日付、信濃毎日新聞）

（４）体験記　Ｎ・Ｎさん（信州大学卒業後今春、東京Ｇ大学院に合格）

『今から４年前の高校３年生の５月に、初めてこどもレストランにボランティアとして参加。きっかけは主に２つ。一つ目は、こども食堂という場所に興味があったからです。ある日、母子家庭で塾に行けない子どもに勉強を教えたり、ご飯を提供している「子ども食堂」という存在を知りました。私の家庭も母子家庭であるため、似ている境遇の子の力になりたいと思いました。もう一つは、私自身が学校の先生を目指しており、子どもと関わる経験をしたかったからです。私は中学生の時に起立性調節障害という病気を患い、３年間不登校になりました。しかし、中学３年生の頃に出会った一人の先生の影響で、私の中で先生になりたいという思いが芽生えました。そして、高校進学を目指して勉強し、丸子修学館高校に進学しました。

そんな高校３年の４月、母にまるこ福祉会でこどもレストランが開かれていること教えてもらい、学校の帰りにすぐに向かいました。突然行ったにも関わらず、まるこ福祉会の方々は快く迎え入れて下さり、以後こどもレストランに参加させていただいています。

実際に活動に参加して、こどもレストランという場所の温かさを感じました。子どもたちが一生懸命に遊ぶ姿や、お料理を作って笑顔で報告してくれる姿、美味しい！とご飯を食べる姿を見て、こどもレストランという場所が子どもたちにとってどれだけ大事な場所であるのか感じました。また、この場所は私自身の居場所にもなっていました。いつ来ても温かく迎えて下さるこの場所で私はたくさんの経験をしました。子どもたちとの関わりだけなく、同世代のボランティアの方々との交流や、普段関わる機会の少ない大人の方々との交流など、お家や学校では経験できないことばかりで、私の毎月の楽しみになっていました。

当時の私は、大学生の方々の姿をみて、子どもと関わる姿勢を学んだり、大学のお話を聞いて大学生への憧れを持ちました。また、大人の方々とお話をすることで色々なことを学び、自分の中でやりたい事がどんどん増えていき、自分の視野が広がり、大人も子どもも世代を問わずに繋がりを持てる場所の良さに身をもって感じました。

ここで学んだことを活かし、不登校生の多い現代にあって、その背景や子どもの心を

もっと深く学び、子どもの幸せを実現できるため、大学院での研究を目指して受験したところ、東京学芸大学大学院に合格することができました。私の目標は長野県の小学校教員です。たくさんのことを経験させてあげられるような先生を目指していきたいと思います。』（詳細は 56P を参照）

（5）体験記　「こどもレストランで学んだこと」　高校１年　Nさん

『みなさん、こんにちは。わたしは、現在、高校に通っているNと申します。私の過去についてお話します。私は、小学校２年頃から、心がやんでしまい、自分を傷つけてしまうようになり、がんばって学校に行きましたが、中学２年になると、学校に行くのがいやになり、１か月間休み、そのうち、全然行けないときがありました。

家庭内の事で悩み、自分的に、何が嬉しくて、何が悲しいかよくわからなくなり、その結果。みんなに会うことがいやになり、顔をみることも、話すことも、すべてがいやになり、仲間の集団にも入れず、「私は、一人ぼっちだ。これから、どうやって生きていったらいいのか」、「もう、どうでもいい」という気持ちの毎日で、毎日が色でいえば真っ黒でした。

結局、中２年と３年の時は、「うつ病」にかかり、夜も寝れない、食事もできない、友達は、いない。これからいったい、どうしたらいいのか、すべてがいやになりました。

うつ病になると、夜は、２時か３時に寝て、１時間しか寝れないときもあり、夕方起きるときもありました。

学校に行っても、だれもいない保健室、それも１人。もう、がまんできなかった。勉強もわからない。人に会えば「引きこもりだ」と嫌なことを言われ、それに学校も人が多いから、クラスにも入れなかった。うつ病で、変頭痛にもなった。いじめも受けた。これまでは、毎日が、黒色で地獄でした。

こんな私に、「こどもレストランに行ってみたら」と声をかけてくれたのが、保健の先生とカウンセリングの先生でした。

昨年の12月だと思います。まるこ福祉会に初めて、こどもレストランに行きました。

最初は、とても緊張していたことと人が多かったことだけで、自分は、いったい、こんな人が多いところに来れるのかなと不安もたくさんありました。

そして、こどもレストランがきっかけで、私は、生まれ変わりました。

最初の不安を一気に取り消してくれた人たちがいました。その人たちから、「中学校を卒業したら、どこに行くの」と聞かれ、いきなり「丸子修学館高校においでよ」と言ってくれたのでした。その時、私は、嬉しくて、涙が止まりませんでした。

私は、それまでは、中学を卒業したら、何もやりたくない気持ちだったので、その時は、「わからない」としか言えませんでした。こどもレストランでおやきを作っている

と、あるおばあちゃんが、「これ、手伝って」といわれ、手伝ったら、おばあちゃんから「ありがとう」と言ってくれたのでした。そこで、私は、決めました。

こどもレストランに来て、本当によかった。引きこもりの私が、こどもレストランで、ボランティアになれるなんて、10年前のあの自分が考えられません。こんなに生き返れるなんて。嬉しくて言葉になりませんでした。

こどもレストランは、こどもに食べ物や食事を提供してくれる。それだけではありません。参加する私たち一人ひとりの生き方まで、輝く方向に変わると思います。こどもレストランには、仲間が、います、先輩がいます、尊敬できる地域の人たちがいます。だから、私は、こどもレストランで変われたと思います。社会にも、人生にもたくさんの「ありがとう」の言葉があります。

私は、その「ありがとう」の言葉で、これから、人から「ありがとう」と喜んでもらえる人になれるよう、福祉を勉強して、将来は、人を助ける仕事に就きたい。そんな自分になりたい。私の夢は、介護福祉士になることです。』

（6）「休校中　こどもレストラン」の活動から

コロナ禍により全国の学校が休校となった令和２年３月３日から同年３月19日までの間、私たちの福祉空間施設を開放して、親が仕事で留守家庭となった児童生徒を対象に、「休校中こどもレストラン」と称して、学習支援や生活支援、食事の無料提供の活動を実施。135 名にも及ぶ児童生徒は、学校も学年も違う異年齢集団の中、１日にして友だちになり、ボランティア参加の高校生や大学生、さらには地域住民の有志が積極的に子どもたちに関わり幅広い人間関係の中で、多彩な学習や活動ができました。

ある保護者は、「コロナで暗い毎日も、利用する度に、家に帰ってくるなり、仕事から帰った私たち親に向かって、一気にとても楽しそうに、その日の出来事や生活の状況を話してくれたのでした。」また、ある保護者は、「子どもも私たちも、本当に助かりました。感謝の気持ちでいっぱいです。」と。「とてもバランスのよいスケジュールで大変良かったです。学校の宿題も大学生に教えていただいたり、美味しい昼食もお腹いっぱいいただき、大学生のお兄さんやお姉さんと一緒に遊んだり生活ができたことが、とても意味のあることでした。」また、「こどもたちにとって、ストレスのない充実した日々でありました」との声が聞かれました。

また、３月11日は、あの東日本大震災のことを避難訓練を通して体験学習をすることも出来ました。本当なら、同じ学校で同じ先生のもと避難をするところでしたが、この日ばかりは、全く違う場所で、違う友達と、違う大人の指導者の下で、突然の避難ができ、より実践的な避難訓練となったのです。

この日は、元学校教師もボランティアで参加していただき、道徳の授業も展開するこ

とができ、いじめや差別のない、人権尊重の精神まで学習を深めることができたのです。

子どもたちは、自分の学校では体験できないことばかりで、極めて新鮮な教材により深まりのある人権教育ができたと実感しました。

さらには、地元の音楽家がボランティアとしてオカリナの演奏を体験的な音楽学習として展開してくださり、こどもたちは、思わぬ楽器演奏により興味深い音楽教育を体験することができたのです。

ある小学生は、「ぼくは、初めて来たときに、しっかりやっていけるか心配だったけど、先生（これは、まるこ福祉会の職員やボランティアの学生や地域住民のことを指します）たちが、しっかり僕の分からないところを教えてくださって本当に助かりました。バス旅行にも連れて行ってくださり、楽しい思い出となりました」と。

集ったこどもたちの笑顔からは、満足感に満ち溢れた有意義な活動であったことが伺えます。

ここで得た貴重な体験と活動から、私たち職員は多くのことを学びました。困った時は、互いに助け合う心が大切であるという基本精神から、「人が一番うれしいと感じるときは、人を助けた時、そして、人から助けられた時」であることを実感することができたのです。

3　無料の食糧支援「0円スーパー、0円食堂」

コロナ禍の中、令和3年3月30日、生活困窮者に温かな食事を届けようと、「0円スーパー、0円食堂」と称した食糧支援の取組に挑戦。

（1）当日、古びた自転車に乗ってやっと到着したある老人は、ビニル袋にお米や野菜を入れて持ち帰り、その翌日、我が法人を訪ねて来ました。「昨日は、沢山の食糧をいただき助かりました。これで3日間はもちます。隣の家に住む方は、足もなく独居老人で生活苦だったので、実は私が2人分の食糧をいただいて、その半分を差し上げたのです。その方も大変喜んでいましたよ。今日は、そのお礼に、何もないので古着を持ってきました。何かに役立ててください。」と少し古くなったシャツ3枚とタオル3本を提供してくれたのです。その老人2人は、6畳一間の団地住まいでした。

老人は、確かに大変な日常生活を送っていると思われるが、食糧という物質には恵まれていなくても、その人の心は何と大きく、美しいものであるか、この老人の心こそ、大空より大きいのである。たとえ狭く小さな部屋で暮らしていても、その方の心は、自己中心的な生き方でなく利他主義の生き方をしていたのです。

○新聞記事から「0円スーパー、0円食堂」で学んだ心

『先日、「0円スーパー、0円食堂」を開店し、黒毛和牛の焼き肉弁当とうな重117食また、お米や野菜等が2時間で終了。ある独居老人は、「これで、やっと腹いっぱいのご飯が食べられる」と、ご婦人は、「コロナで職を失い、食べ物も満足に買えませんでした。大助かりでした」との感想が。コロナ禍での生活困窮者を支援する目的で、どうやって必要とする人を見つけるかが課題でした。

そこで、我が社会福祉法人の障害者と職員が一緒になって各家庭を訪問してチラシを配布したり、趣旨に賛同した高校生5名がボランティアとして参加。さらに、地域の農家からお米や21社に及ぶ県内外の業者からも食材が届けられたのです。

食材を提供された独居老人は、半分の食材を仲間に配ったと話され、翌日、お礼にと古着を法人に届けられたのです。

分福の心とは、今困っている人の心に寄り添い、行動する心であり、その思いやりの心と心が広がり、地域住民の心を耕す肥沃な土壌となることを教えていただきました。人間の心の本当の温かさと美しさ、そして他人に尽くそうとする精神の輝きに感謝です。』

(令和3年5月8日付、信濃毎日新聞)

このような地域住民の小さな声を、より大きな希望を実現できる機会と捉え、12月下旬の歳末に、コロナ禍で生活に困っている方々を中心に、令和3年12月19日「0円スーパー、0円食堂」を開催した。

今回は、丸子ライオンズクラブとまるこ福祉会が主催し、日赤奉仕団を始めとした各種団体や会社等を協力団体として地域とのつながりを生かし、社会貢献活動の一環として「人と人がつながりから、誰もが輝き、絆を深める地域社会の構築」を目指しました。当日までに食料品や日常雑貨品は、長野県内外34社から大量に集まり参加者も407名を超えました。

(2) 11月下旬、「0円スーパー、0円食堂」を聞いたという80歳代の御婦人が軽トラックで来た。「私は農家で、今年はじゃがいもが豊作でした。我が家は、今、主人との2人生活です。19日に、皆さんでおすそ分けしてください。」と言って、ジャガイモの入った段ボール4箱と大根を寄贈されたのである。心が老いなければ、人は美しい心のままでいられると感じたのである。

12月初旬も、「大したものでないけど、餅とスープを持って来ました。12月19日、困った方に差し上げてください」と。

これらはほんの一例であるが、12月に入ってからは毎日のように、各種団体や組織、個人からも大量のお米、野菜、果物、日常品、浄財等が届けられたのである。

（3）令和３年12月19日、２回目の「０円スーパー・０円食堂」の開催。午前８時には、スタッフが20名余も集まり、寄贈された食料品や日常品を会場内に移動を始めた。そこに、来場者第１号のご夫婦が８時45分には到着していた。「新聞のチラシを見てきました。まだ年金がもらえないので、ここで食料をもらえると助かるよ。生活費で一番切り詰めているのが食糧費だから。ありがたい」と。午前10時過ぎには、高校生を始めボランティアスタッフは、94名に達していた。

午前１１時を前に、10時45分と同時に、「０円スーパー、０円食堂」が開店した。その瞬間に50人以上の人が一気に会場内に入っていった。

ここからは、来場者の声を以下に紹介したい。

①50代の兄と40代の妹さんのお二人で来られ、妹さんの声。「兄は、車の代行の仕事をしていますが、まだコロナ禍の影響で給料は、以前の半分以下です。そのため食料は、兄が深夜のお店で値引きされた食品を買って来てくれます。私は、足が障害でなかなか外に出て買い物ができませんので、買い物は兄に頼みます。今回は、こんなにたくさんの食料や日常品までいただき、大変助かります。これで１週間はもちます。」

②30代のお母さんは、小学生の娘さんを連れて来られた。「母子家庭ですので、買い物は私がします。新聞に入っているチラシをみて、自転車で一番安いお店を探し、そこで商品を選び、少なめにして購入します。でも今日は、選ぶこともなく、悩むこともなく、たくさん食料品をいただくことができました。うれしいです。ありがたいです。」と。

会場内を見渡すと。父子家庭、外国籍の方々、地元の大学生等が、「助かる」、「うれしい」と連発しながら各食料品や日常品をビニル袋や持参したマイバッグに喜んで入れていた。その時であった。玄関は、帰る人がスリッパを脱いだままにした状態であったので、上田高校の生徒が、乱雑になったスリッパをそろえてくれていた。さらに、「靴は、間違えないように」と書いた掲示物も整頓してくれた。

こんな心遣いが自然にできる高校生ボランティアも大変ありがたい。

③40 代の母親は、２人の娘さんを連れて来た。「今日は、日曜日でも主人は仕事です。私が、家計をやっていますが、主人のボーナスが出ないんです。これって、あり得ますか。だから、これほどまで食品をもらえてうれしいです。夕飯は、何にしようか、娘たちと相談します。」と。

その年の12月下旬、「０円スーパー、０円食堂」の願いがボランティア参加した高校生の心に広がっていった。『地域の人のためになることをしよう』と上田高校の生徒有志は、口コミやポスター等で、生徒の全家庭に呼びかけ、324種の食料品を集め、まるこ福祉会に届けてくれ「真心贈呈式」を行なったのです。

「77年前の明文を、蘇らせた高校生の行為」

令和４年２月28日、上田高校生の皆さんが、324種の食料品を我が社会福祉法人に

届けてくれた。　私たちは、「真心贈呈式」と銘打って、５人の生徒さんから直接その数々の品をいただき、御礼に、障害者全員で、「ふるさと」を歌った。

式の中で、生徒さんは、「コロナ禍で大変な人たちにと、全校生徒に口コミやポスターで呼びかけたところ、たった２週間で缶詰や乾麺等を始め家庭から持参した324種が集まり、これは世界の貧困を調べる中で、日本でも同様なことがあると考え、生徒有志で計画をしました」と。

今、ロシアのウクライナへの軍事侵略で、罪のない子どもたちの命が狙われ、生活苦にまでなっている現状がある。生徒の本当の願いは、ウクライナへ届けたい気持ちであったと察するが、この善意ある行為から、ユネスコ憲章にある『戦争は、人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない』の言葉が蘇ってきた。

国際社会で絶対に許すことのできない卑劣なロシアの侵略が起こっている最中に、私たちは何をなすべきか悩む今、この高校生たちの純粋な心と勇気ある行為が、77年前に採択された明文を大人の私たちの心に教えてくれているようでした。

これらの実践から、弱者を「助ける」という地域住民の意識は、地域で互いに「助け合う」という住民の意識変革につながったのである。それは、地域社会が変わる本源的なものかもしれない。また、地域の課題や困りごとをみんなで解決していく力を育む地域社会へと変わっていく契機にもなったと思う。また、他者の幸せを考えることで、自分の幸せをより深く豊かなものになっていく。それが可能となる地域社会の土台を協働でつくっていきたい。

4　社会事象を地域課題として捉えた活動　～災害支援13年～

平成23年３月11日に発生した東日本大震災（最大震度７、Ｍ９）で、その日から災害支援活動を始めた栁澤理事長は、市民からお米、防寒服、薬、日常品を収集して、３月22日、24日、27日と福島県いわき市と南相馬市に物資を届け、その後も、福島県内の温泉施設に被災者家族を招待したり、春夏秋冬の年４回、被災家族を上田市に迎え自然の中で遊んだりパン工房での体験等、今日までありとあらゆる心和む災害支援を行ってきました。

令和５年９月29日には、同年８月24日に福島第一原子力発電所の処理水放出に伴い、中国、ロシアによる漁獲輸入禁止の影響と風評から、「がんばれ福島！　福島の魚を食べる会」を開催、１都９県から135名の賛同者が集まり、福島県常磐物の魚を食べて協力をした。この報道が県下各地に流れ、10月２日からは、長野県庁の食堂でも１日20食の福島県産の料理が作られるようになったのです。

これらの経験と地震の教訓から、災害支援と助け合う心の重要性を肌で学び、その震災の心を語り継ごうと様々な挑戦を開始。この災害支援は、今年で13年目となる。主たる行事の一部を紹介したい。

（1）「震災の心、バトンリレー　10年」　令和３年３月11日実施

３．11東日本大震災に学ぶ　～講演と詩の朗読コンサート～

この日の参加者は、丸子修学館高校生、地域住民代表、福祉会利用者100名で、内容としては、講演と詩の朗読が中心でした。

・講　　演　　体験談として、真っ先に被災地に飛んだ柳澤理事長

・詩の朗読　　丸子修学館高校、地域住民代表、まるこ福祉会利用者代表

今回初めて丸子修学館高校の生徒が、司会と運営に積極的に関わり、詩の朗読についても、２年生230名が国語の時間に、「震災」や「助け合い」をテーマに詩を創作し、当日は、その代表作４編を生徒が披露してくれたのです。

（2）「震災の心、バトンリレー　11年」　令和４年３月11日実施

上田高校生の司会で、内容は、①上田市消防署員の方を迎えて避難訓練、②福島県で避難した経験を基に、その時の状況と福島原発のこと、これからの生き方についての上田高校生の体験発表、③「支え合いの心」フードバンクin上田高校生の生徒発表、④利用者の歌の発表「ふるさと」、⑤語り「今、欲しいものは何ですか」「被災の小学校３年生の希望ノート」であった。

この日、世界で危機の日常化が進む中、孤立したまま困難を深めている人々を絶対に置き去りにしない精神を、皆で保ち続けていこうと決意。

また、パンデミック宣言の１週間後に、あのドイツのメルケル首相が
演説した言葉は、未だに私たちの心に宿っているのです。それは、「私たちの社会は、一つひとつの命、一人ひとりの人間が重みを持つ共同体である」と。

こうした眼差しを失わないことの大切さは、巨大災害が起こるたびに、警鐘がならされてきた。それを、私たち自身も心の警鐘として今後も打ち鳴らしていきたい。

（3）「８．６　平和の心　メッセージ・コンサート」令和３年８月６日

広島に原爆が投下されて76年を迎えた令和３年。「戦争ほど悲惨なものはない。戦争ほど残酷なものはない」と世界の誰もが叫びたいことである。その戦争の恐ろしさから、世界の平和を目指して、命や人権の大切さを守り継承していくために、高校生と大学生が実行委員会を作り、地域住民や障害者と共に以下の内容で実施。

・日　時　　2021年８月６日（金）10：00～11：30

・会　場　　まるこ福祉会　きらりホール（上田市長瀬2885－3）
・参加者　　児童・生徒・学生、地域住民、まるこ福祉会利用者
　　コロナ感染予防対策により、140名
・発表者　　小学生、高校生、大学生、地域住民、利用者の代表者
・当日の司会は、大学生、内容として、①ピアノ演奏とオカリナ演奏を背景に作文と詩を朗読。詩と作文は、小学生、高校生、大学生、障害者、地域住民の代表が、戦争、平和、命の大切さ、人と支え合うことの大切さ、家族、仲間、地域社会で想う事等を発表。②96歳の柳澤正雄様がシベリア抑留の「戦争体験」を切々と話した。③実行委員長あいさつ（大学生）、④連合婦人会の皆様による紙芝居（広島原爆）⑤小・中・高・大学生と地域住民が共に「平和への誓い」を発表後に皆で感想発表。

（4）ヒロシマ原爆投下77年目　　令和4年8月6日、こどもレストランでコンサート開催、タイトルは、「高校生が小学生に伝える、ヒロシマ原爆と命の尊さ」であった。命の尊さを学ぶことは、永遠の学習であり、それを、絵本を通して、高校生が子どもたちの心に訴えることは、学校教育では見られない光景です。そこには、子どもと高校生が一緒に学ぶ姿があった。伝える側も伝えられる側も、同じステージで考えることができる。家庭教育でもなかなか成立しない学習が、「きらりホール」という場ででき、地域住民の居場所となっているのが、「きらりホール」です。そこに、子どもたちの学ぶ姿を地域住民も一緒に参画することで、共に、学び合えるのです。老若男女の誰もが共に学べる地域社会、共生社会であり『共育』、その生涯学習が成立する地域社会の姿でした。

○新聞記事から「子どもたち同士で学ぶ平和」

『広島・長崎に原子爆弾が投下されて78年。私たちのこども食堂では、中・高校生と大学生が、小学生に平和の尊さを伝える催しを開催した。第1部は、小学生に原爆をわかりやすく伝える本の読み聞かせ、第2部は、被爆体験の詩の朗読を大学生が行った。第3部は、高校生5人が「平和の誓いを未来へ」のテーマで、日常生活で感じていることを発表した。最後に、地域の方々が感想を述べてくれた。「78年前の出来事を忘れることなく、若い学生の皆さんが、本や詩や感想発表を通じて、小学生に自分の考えを堂々と述べている姿に感銘を受けました」、「ひろしまのピカの本の読み聞かせは、思わず涙がこぼれました。

皆さん、ありがとう」読み聞かせの本は、高校生が図書館を歩き回ってやっと見つけた貴重な本だった。この夏休み、地域で小学生と中・高・大学生が共に真剣に学ぶ姿に平和の尊さを感じた』（令和5年8月20日付信濃毎日新聞）平和に関する問題意識は、学校教育だけでなくあらゆる機会で醸成していくべきことであり、今回の企画は、多くの小学生や学生たちにとっては、新たな課題把握により平和への深い思いが心に宿った

と思います。

（5）「8．15終戦の日　平和の心　詩の朗読コンサート」令和2年8月6日の広島と9日の長崎の原爆投下及び8月15日の終戦の日から78年を迎えた令和2年、平和について、大学生、養護学校、地域住民と共に学ぶ機会となりました。それは、歴史の教訓を忘れることなく、平和の尊さと平和の文化及び人の温かさと支え合うことの大切さを、子どもからお年寄りまでみんなで確認するために、自作の詩を朗読。

・日　時　　2020年8月8日（土）10：00～10：50
・会　場　　きらりホール　　100名
・参加者　　上田養護学校児童生徒、保護者、来賓、地域住民代表、長野大学生、信州大学生、利用者
・朗読者　　上田養護学校児童生徒5名、長野大学生・信州大学生、地域住民代表、利用者代表　　合計10名
・詩の内容　詩の題名は、おかあさん、おとうさん、家族、ともだちなど、広い意味で、身近な人や大切な人のことについて、支え合うことや温かさ、また、命の大切さや平和、戦争等について書いた。

（6）「阪神・淡路大震災から26年　地域住民と防災炊き出し訓練」

1995年（平成7年）1月17日に発生した阪神・淡路大震災（震度7，M7.3）から26年を迎える本年、死者6,434人にも及ぶ大地震の教訓から当時、ボランティア活動で参加した人の体験や地震の概要を聞くことを通して、地域住民と共に、地震時の避難方法を学び、また、地域住民による炊き出し訓練から、人と支え合いながら生活することの大切さを知る機会となり、炊き出し訓練は、丸子地区赤十字奉仕団と連合婦人会、丸子社会福祉協議会の協力のもとに開催されました。

（7）「震災の心　バトンリレー」阪神・淡路大震災29年　令和6年

今年の元旦、午後4時10分、世界が驚愕した能登半島地震（震度7，M7.6）が発生し、まるこ福祉会職員有志3名が能登半島の輪島市にある社会福祉法人弘和会に水3トン（2ℓボトル1,500本）、布団上下と毛布一式60組、米、トイレ用のビニール袋、紙皿等を3トントラックで、13時間30分かけて届けたのでした。

それを受けて、1月17日、①阪神・淡路大震災へのボランティア活動体験、②実際の被災者体験発表（近藤小枝子様）、③能登半島地震のボランティア参加者の体験発表（小山厚志課長）、④能登半島地震被災体験（下村みゆき施設長）、⑤地域住民と共に避難訓練、⑥炊き出し、⑦ブラックアウト時におけるガス発電機の効果について説明の内容でイベントを開催した。当日の朝は、8時25分頃からSBC信越放送のラジオ生中継

を始めに、ＮＨＫ総合・SBC信越放送・長野放送・丸子テレビの各マスコミが報道してくれました。

体験発表の中で、「人間は弱い、でも人間は強い」、また、13時間かけて物資を届けた相手先の被災者から「私たちは、住む家がありません」の声を聴いた時、「13時間なんて大したことないんだと実感した」話など、参加した150名の心に染み入る言葉が、心の奥深くに横溢。

また、ガス発電機の設置により、ブラックアウト時でも、45秒後に事務所や厨房にも電気が通り、井戸水もポンプで吸い上げて水洗トイレが利用できるなど、その効果の大きさに感動が広がったのでした。

5 福祉空間施設での活動

平成28年10月15日にオープンした福祉空間施設は、①サロンあったかい輪、②きらりホール、③きらり市民ギャラリー、④パン工房のぐんまるしぇ、⑤老人ホーム大樹ときらりの利用者及び職員の食事を担当する厨房（平成29年２月１日給食開始）、⑥こども食堂の東信地区物流拠点の６施設は、子どもからお年寄りまで、だれもが気軽に足を運び、潤いの時間を心豊かに過ごせることが出来る「オアシス」の場として、『地域福祉の灯台』の役目を果たしています。

きらりホールは、令和２年のコロナ禍前は、年間３万人余の来場者があったが、現在、えんじょいプログラムとして６教室の講座が実施され、地域住民が講師となって地域住民のために多種多彩にわたる文化や趣味の講座を開設し生きがいとなる活動を推進。中でも、布あそび、ボッチャ、パドル体操、ヨガ教室を始めとした各種講座の開催は、幅広い方々が利用し、11,000人の講座参加者が誕生しました。

きらり市民ギャラリーでは、毎月の展示内容を変え、この７年間、より多くの住民の生きがいの場として絵画展、油彩画展、写真展、タペストリー展等を開催し、42団体650名が作品を展示された。

また、各種の展示により、地域住民に鑑賞の機会をつくり、潤いの場を提供。小中高・養護学校の児童生徒の美術教育の一助にもなっています。展覧会は、今日まで７年間で80回開催し、約３万人が鑑賞されています。

サロンあったかい輪の店内には、東日本大震災の福島県南相馬市の「物産販売支援」コーナーがあり、海苔を始めとした南相馬市の物産を、まるこ福祉会で購入し、「サロンあったかい輪」で販売をして売上金を全額送金。この取り組みを地道に継続している。

6 どんぐり山の環境整備　今後の活用が期待される

その歴史は、９年前にさかのぼる。平成23年５月13日、第１回のどんぐりの植樹を500本行う。当時、75名のボランティアが参加。「荒れ地から自然公園を作ろう」との願いの第一歩が始まったのである。

どんぐりの実を前年から土壌に入れて育て上げ、「クヌギ」（苦を抜く意味もある）の小木となった500本を平成23年から９年間植樹した結果、通称、「どんぐり山」として自然環境の美化と潤いの場所づくりが創出でき、以後、毎年３回、地域住民とボランティアで草刈りの整備活動を行い、今年で13周年を迎えます。

令和２年10月３日（土）は、第25回こどもレストランが、ここ、どんぐり山で開催。110名（子ども27名、保護者14名、ボランティア69名）が、自然豊かな森林を背景に、トレッキングや野外レクレーション、ジップライン等を中心に、午後はコンサートでも堪能。

このどんぐり山での身近な取り組みは、自然体験と環境教育の視点から、国連の「持続可能な開発目標」（SDGs）に繋がる大切な事業として、環境保護と森林再生に寄与することで今後も継続していきたい。

今後は、墓地公園としての活用も計画されています。

7 地域住民の自治活動に協力し、災害対策にも貢献

地域住民の避難所として、施設（トイレ、水の確保も含め）と駐車場を提供しています。特に、地震や台風を始めとした災害時に、断水や停電等ブラックアウトが発生した場合は、非常用ガスバルクと大型ガス発電機（三相200Ｖ）と100Ｖの発電機２台と井戸水を活用しています。

また、被災時の水洗トイレの利用、総合厨房での食事の提供、事務所でのパソコンやコピーの使用も全て可能となります。さらに、米・味噌、水・非常食等の備蓄もあり、ブラックアウト時における地域住民の安心・安全の確保により、地域のセイフティーネットを構築します。

町会の敬老会を始め、各種の会合開催の場所としてきらりホールを提供し地域行事開催の実施を支援しています。

以上が、地域貢献活動としての主たる取り組みであるが、その他にも以下の内容で取り組んでいます。

8　幼保の園児との文化・教育交流の推進

長瀬・依田保育園やちぐさ幼稚園を始めとして、地域の園児と障害者・老人ホーム入居者との観劇や音楽鑑賞の交流を長年にわたり推進。毎年の恒例行事として、劇団ばくの演劇公演があり、幼・保の園児たちは、年齢差を超えて、みんなと一緒に楽しんでいます。

9　地元の養護学校生徒の受け入れにより、地域交流と金銭教育を支援

上田養護学校の生徒の教育実習を毎年受け入れ、勤労の大切さを学ぶ機会を提供。高等部１年～３年の全生徒が見学や現場実習を経験。また同生徒たちに、ぐらんまるしぇでの買い物を実体験する機会を提供し、金銭教育を支援することもできました。事前学習として身に付いた知識や経験は、将来への進路にも繋がり、卒業後の進路に役立っていると思います。

10　高校生、大学生のボランティア活動の受け入れ

１０　高校生、大学生のボランティア活動の受け入れ
丸子修学館・さくら国際・上田・上田東の各高校の生徒及び長野大学、信州大学の学生たちに、こどもレストランやきらりでのボランティア活動を通して、福祉に対する体験学習の機会と進路指導の一助を提供。

11　地域住民のエコ活動への支援と貢献

地域住民がエコ活動として取り組んでいる古布や衣類、アルミカン等の収集を支援するために、まるこ福祉会に提供されたものを有効活用する取り組みをして久しい。とんぼハウスやきらりでは、その空き缶回収を推進し、地域住民のエコ活動を支援している。また、再使用できる衣類や補助着の受け入れをして、障害者や老人ホーム入居者への提供に協力。

12 県外定住者の支援

北海道出身者の上田市への定住を推進するために、その就労の場を提供し、地域住民との交流を図った。また、福祉空間内の一室で、マッサージ治療を施し、地域住民に憩いの場を提供。

13 シェルターの受け入れ支援

住宅と食事の場を提供し、社会復帰への貢献。

以上、社会貢献活動として、13の事例を紹介しました。これは、国連が推進するＳＤＧｓの活動にも繋がっている取り組みであります。

これからも、さらに地域の皆様と協働で積極的に取り組んで参ります。

こどもレストランで学んだ事

『私が歩んできた道と未来』

信州大学教育学部4年　成澤　乃彩さん

私は、丸子で生まれ丸子で育ちました。小学生までの私は学校が大好きな元気な子どもでした。ですが、中学校に進学して一か月が経ったころ、私は急に倒れてしまいました。倒れた原因は、起立性調節障害でした。起立性調節障害とは、自律神経の働きが悪くなり、起立時に身体や脳への血流が低下する病気です。　そのため、朝になかなか起きることが出来ない、全身の倦怠感、頭痛、立ちくらみなどの症状が起こります。小学校高学年から増加し始め、中学生、高校生になるとおよそ4人に1人が起立性調節障害を抱えているといわれています。重さは人それぞれですが、私はこれが原因で中学校約３年間不登校になりました。

学校が大好きで友達と話すことも大好きだったため、学校へ行けなくなるのは非常にショックなことでした。不登校になった私は、居場所がなく、家でずっと過ごしていました。そのため、勉強も遅れが出ていました。この時の気持ちとして、「お先が真っ暗」という言葉がぴったりだったと思います。実際にこの頃の私の口癖だったと思います。不登校になってからは友達と連絡を取ることもなかったため、私には家族しかいませんでした。中学２年生になると体調が徐々に回復していきましたが、長い期間休んでいたため行きづらく、結局ずっといけませんでした。学校に行っていない自分に罪悪感を毎日感じていました。

そんな私ですが、中学３年生の12月、高校受験をしたいという気持ちが湧きました。なぜかというと、高校に行かなければ社会で働けないと思ったからです。その当時の私は、学校がすべてであり、他の選択肢が思い浮かびませんでした。そのため、12月からは中学校の別室登校を開始しました。そこでは、勉強を教えてもらうだけでなく、勉強で疲れた時のリフレッシュ方法を教えてもらうなど、私の気持ちに寄り添ってくださる先生と出会いました。この先生に出会ったことで、私も子どもの気持ちに寄り添うことのできる先生になりたいという夢を見つけました。また、自分でYouTubeに上がっている無料の動画をみて勉強したり、母には数学を教えてもらいました。朝から夜の12時まで勉強をし、３年間で習う５教科の勉強を約３か月で習得しました。この時は高校に受かれば外に出られる、落ちたら一生引きこもりだろうと思っていました。

この頃、そばでずっと支えてくれていた母や祖母、別室登校の先生には感謝の気持ちでいっぱいです。そのおかげもあり、丸子修学館高校に合格することができました。不登校だっ

た私が地元の高校を選んで進学するというのはハードルが高いことだと思います。正直、私も怖さがありました。なぜ怖かったかというと、不登校だった過去を知っている人がたくさんいると思ったからです。ですが、丸子修学館高校に行って良かったと思いました。

同じクラスには同じ中学から進学した子が４人いました。この中の２人は私が不登校になってからも気にかけていてくれた友人でした。この２人は今も付き合いがあり、先週も長野市まで会いに来てくれました。このうちの１人と９月に会ったとき、中学校時代の話をしました。時間がたったから今だからこそ話せることが多くありました。私は当時の気持ちを打ち明けました。正直、当時の私は、「生きているのがつらいな。死んでしまいたいな」と本気で思ったことがありました。そのことを今だからこそ話すことができました。そうしたら、その友人は、泣きながら「生きていてくれてありがとう」と言ってくれました。

私はこの時、心の底から生きていて良かったと感じました。また、当時の友人は、私に対してどう支えたら良いか分からず、ずっと悩んでおり、声をかけたくてもかけれなかった日のことを今でも覚えていると泣きながら話してくれました。中学生の頃は家から一歩でるのも怖くて、自分のことを知っている人がいない場所で暮らしたいと思っていました。しかし、今はこの丸子が大好きです。それも、この丸子に住む人たちの暖かさに触れたからだと思います。

私が丸子福祉会が開催している子どもレストランきらっとと出会ったのは高校３年生の４月です。ある日テレビで子ども食堂のニュースをみました。その子ども食堂では、無料でご飯を提供したり、学習支援を行っていました。私自身、中学生の頃に勉強で苦労をしたため、私も困っている子どもたちの力になりたいと思っていたところ、母から「丸子福祉会で子どもレストランが開催されているよ」と教えてもらいました。教えてもらってすぐに丸子福祉会に伺い、ボランティアをさせていただきたいとお伝えしました。そして、高校３年生の５月から現在までボランティアとして参加させております。

高校生ボランティアとして参加をし、自分より年下の子どもたちだけでなく、自分より年が上の大学生や地域の皆さんと関わることができ、私の居場所になっていました。ここでたくさんの暖かい方々と関わりました。ここに来ている皆さんは、私という人間を認め、受け入れてくれました。ここに来たことで自分も自分を認めることができるようになりました。

ボランティアで得た経験などを活かし、信州大学教育学部の推薦入試を受け、無事合格することができました。

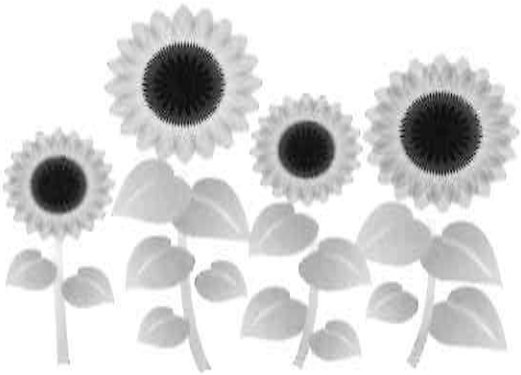
大学に入ってからは、子どもレストランきらっとのほかに、長野市で教育学部の友人と共にこども食堂のボランティアを行ったり、今年度の４月から８月までは長野県が行っている

フリースクール認証制度検討会議の公募委員に応募をし、不登校経験者として会議に参加させていただきました。不登校だったという過去をコンプレックスに感じていた私ですが、最近はこの過去を自分の強みとして捉えることができるようになりました。

このような大学生活を経て、私は大学卒業後に教員としてすぐに働くのではなく、大学院に進学し、さらに自分の専門性を高めた上で教員になりたいという思いが湧きました。そして、私は、先月末に大学院を受験し、先日、無事合格することができました。春からは東京学芸大学の大学院に進学します。生まれ育った長野を初めて出ることになるため、寂しい気持ちもありますが、さらに成長した姿で長野に帰ってくることができるよう、精進してまいりたいと思います。そして、将来は生まれ育った長野県や大好きな丸子に恩返しできるよう、また未来ある子どもたちの成長を支えることができるよう頑張りたいと思います。

そして最後に、ここまでの私の話を聞いていると、どこか美談に聞こえるかもしれません。不登校だったけれど、今はうまくいっている。そのように見えるかもしれません。ですが、不登校を経験した、もしくは現在不登校であるという人の中には、つらい思いをし、悩んでいる人の方が多いと思います。私のようなパターンはまれであると思います。一人で悩んでいる人たちを救うためには、地域が一体となって支えていく必要があると思います。

そのためにも、私はこれからもこの地域に関わり続けていきたいと思います。そして、丸子のみならず、全ての地域の子どもたちが笑顔で過ごせるように、周りの皆さんと協力して今度は私が支える立場になりたいです。（ご本人の了解をいただいて実名で紹介）



2022年11月5日

「第51回こどもレストランに参加して」

E高校のH・K先生のお話

「私は、去年まで長野大学のゼミに所属している時、教授から、「将来、学校の先生になるのなら、まるこ福祉会が運営している、『こどもレストラン』でボランティアをした方がいい。そこに来る、子どもたちとしっかり接すると、子どもたちの心が分かるようになるし、こどもとどのように関わっていったらいいか、その答えがでるよ。」と指導をいただき、それ以来、こどもレストランのボランティア参加をすることが出来ました。

その結果、学校の教員を目指し合格後、本年４月より、松本にあるエクセラン高校の教諭として、現在、勤めております。

そこで、今度は、うちの高校の生徒たちにも、私と同じように、まるこ福祉会のこどもレストランでボランティア参加をさせてあげたい。そこで、学校や社会で経験できない貴重な経験を積ませたいと思い、今回電話をしました。

その結果、うちの高校生が初めてボランティア参加をすることができ、貴重な体験をつかむことができました。本当に、ありがとうございました。

参加する前、学校で、５人の女子生徒たちと、あいさつの練習をしました。子どもに接するといっても、最初は、あいさつが肝心です。そのあいさつから、子どもたちの心に中に入っていければと思いました。

当日の11月５日（土）開催の第51回こどもレストランには、教え子５人が、ボランティアとして参加したのでした。最初は、どのように子どもたちと関わっていったらいいか戸惑うこともあったと思います。でも、それも勉強です。団子づくりやおにぎりづくり、そして、キッチンカーにお絵描き（長野大学の生徒が企画）と、時間が経つにつれて、こどもたちとの心の距離は、段々と縮まっていきました。

それは、理論でも理屈でもありません。こちらから心を開いて、こどもの心に飛び込んでいけばいいのです。そこに、笑顔があると、もっと親近感がでてきます。実は、私

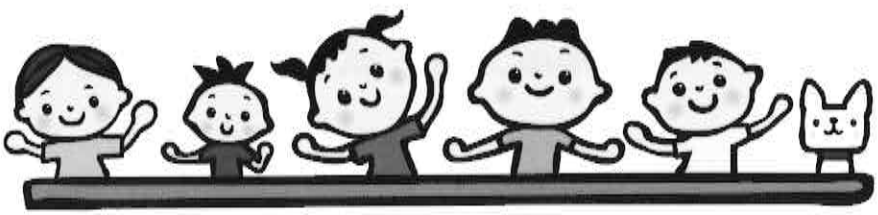
が大学生時代、ここのこどもレストランで体得したことです。

教え子５人は、それなりに、実践してくれました。終了後、生徒に感想を聞くと、全員が、「来てよかったです。学校や家庭では、小学生の子どもたちに接する機会はないけど、ここに来ると、思っていた時より子どもたちは、素直でした。これから、もっと子どもたちと関わり、子どもたちの心や関係作りを学んでいきたいと思います」と、目を丸くして語ってくれました。

私自身、こどもレストランに最初にボランティア活動に参加した時は、消極的であり、子どもたちとどのように関わっていったら分かりませんでした。でも、他の大学生の動きを見ていたり、子どもたちが、何もしないでホールにしゃがんでいる大勢の姿を目の当たりにした時、私は、はっとしました。私は、何をしているんだろうと。そこから、自分への問いが始まり、徐々に、子どもたちへの声掛けが始まり、一緒に体験をするようになりました。この体験を今度は、自分の教え子たちにも伝え体得させたい、そんな思いで、今回来させていただきました。本当に、ありがとうございました。

でも、子どもたちも大きく変わりました。当初は、孤立した子どもたちばかりで、他の学校の子どもたちと遊ぶ姿も全くなかったのですが、今では、すごいですね、誰とでも積極的に遊んだり、料理を作ったり、勉強したり、「仲間」が
出来たと思います。もっと言えば、「家族」です。誰でも、受け入れてくれる居場所です、誰でも認めてくれるオアシスです。

今回の体験から、私は、教え子をこどもレストランにボランティア参加させて本当によかったと、心の底から思いました。これからも、また、お世話になりますが、よろしくお願い申し上げます。



令和４年９月２日

こどもレストランに子どもを参加させている母親の感想

（上田市在住　40代母親　S、Kさん）

平成30年８月４日の第１回目から、何度も子どもがお世話になっております。ありがとうございます。小学校１年の男の子と小学校４年の男の子がおりますが、最初に比べると、今の子ども２人は、すごく変わりました。成長できたのかなと実感しています。

まず、最初は、自分から行動ができませんでした。メロンパンを作る時も、そば打ちをする時も、遠くから見ているだけでした。学校でも、不登校気味で、一人でいる時が多かった状態であることは担任の先生から聞いていましたので、やっぱり、そうなんだと。うちの子ども２人は、よそ様の子どもさんと比べて、消極的で、学校に対しても将来も、不安や心配を感じていました。

ところが、こどもレストランに参加をしていくうちに、少しずつ他の小学校の御子様と出会えるようになり、会った時、自然と子ども同士で挨拶ができるようになっていました。それから、一緒に遊ぶことができるようになり、苦手な勉強も同じ机を並べて少しずつですが勉強をするようになったのです。でも、最初の頃は、消極的でした。

それから、家でも、学校から帰ってきたら、自分から進んで勉強をすることができるようになったのです。でも２年はかかったと思います。

こどもレストランに参加しても、うちの子どもから他校のお友だちに声をかけることができるようになり、一人で遊んでいる子どもがいるときは、「一緒に遊ぼう」と積極的にお友だちと関われるようにまでなったのです。不思議です。

私のママ友の子どもたちも、一人遊びのこどもたちが多かったのですが、こどもレストランに参加するようになってからは、仲間と遊べるようになった子どもが増えてきたと感じます。これは、私のお友だち同士でも話題になっていることです。こどもの成長は、すごいですね。それでも、高校生や大学生の皆様に感謝いっぱいです。本当にありがとうございます。

丸子北中学校生徒 見学　令和２年２月19日（火）

『どんな人がいても、みんな平等なんだ』

生徒の手紙から

「今日は、見学をさせていただき、ありがとうございました。私は、働いている人を見て、働くという大切さを知りました。私は、理事長が言っていた、『どんな人がいても、みんな平等なんだ』ということに、私は、心を動かされました。さらに言われました。『どんな人がいても、おかしくないんだよ』と。自分に自信がついたように思いました。

私は、小学校のころから、よくいじめられてしまい、だれもわかってくれなくて、落ち込んでしまったことも、何度もありました。でも理事長様を信じて、毎日、しっかり前向きにがんばりたいです。本日は、本当にありがとうございました。きらり様も、元気で明るくがんばってください。」

（丸子北中学校　Ｏ・Ｋさん）

たった３分の理事長の言葉であっても、立ち去った理事長であっても、その中学生は、決してその４文字を離さなかった。それどころか瞬時にして心に刻んだのだ。

多くを語らなくても、長時間の立派な講演でなくても、体験に裏付けられた確かな一つの真実の言葉は、中学生の心のひだに自然に入っていった。

時間にして３分。その180秒の中で、探し当てた言葉、珠玉の言葉が「平等」の４文字であった。彼女は、これからの人生に生かそうと、自信をもった瞬間である。

私たちの理念を構築する基底に、「植福」がある。人々の心に幸福の種をまくことの意味である。

今回の施設見学で得たものは何か。それは、彼女の肥沃な大地となる豊かな心に、きっと、この「平等」の４文字が希望の種となり、将来は、必ずや大きな花を咲かせる時を作れたことだと思う。それを、中学生から教えてもらった。

私たちの地域福祉は、この、幸せの種をまき続けることが使命の一つである。まいた種が各地で、そして日本で、世界で、幸せの花を咲かせていく。この遠大なる幸福事業を毎年行う実践家を目指していきたい。

令和３年６月７日

「高校生と大学生のボランティアに拍手」

私たち、まるこ福祉会が運営する子ども食堂「子どもレストラン・きらっと」での風景です。

ボランティアで参加した地元の高校生と大学生18名が、英語鬼ごっこで小学生をおんぶして逃げ回る姿。転んで床に座り泣いている女の子の手を引いて椅子に座らせ安静を施す女子高校生。部屋で学習する小学生に寄り添い助言する大学生。皆で作ったピザを、テーブルでは小学生が大学生と談笑しながら食事を。清掃も若いボランティアが行いました。

先日は、26名の高校生と大学生が、子どもを引率して近くのバラ園に遠足。横断歩道では高校生が小学生の手を引いて渡る姿が。バラ園で写真を撮ると、小学生、高校生、大学生が肩を寄せ合ってカメラの前に座る姿。

昨年、ユネスコで発表された「子どもの幸福度」では、日本は38ヵ国中37位の最低の数字である。物の豊かさには恵まれても心の豊かさに欠乏している日本の子どもたち。

しかし、子ども食堂で、学校や家庭では味わえない異年齢集団で遊ぶ・学ぶ・食べることで、自然に心がつながっている。大学生は、「ボランティアで子どもと触れ合うと自分の心が磨かれます」と。「今時の若者は」と言われた過去は去り、「今どきの若者は、豊かな心で熱と力がある」と私は言いたいです。

（信濃毎日新聞に掲載、紹介された記事）

2021年12月20日

「0円スーパー、0円食堂」での来場者の感想から

ある職員が言った。「会場に来るとき、暗い顔で不安そうな人も、帰る時は、重いバックを持って笑顔になって帰っていく姿が印象的だった」と。私たちは、今できることを、今したいのです。

①50代の女性が語った。「私は、専業主婦です。家計のやりくりはコロナで今一番大変です。そこで食費を一番先に削るのです。主人も娘もいますが、体調が悪くて家にいます。だから生活が大変。でも、今日は、こんなにもたくさんの食料をいただき、少しでも生活が楽になるかと思うとうれしいです。」

②80代のおばあちゃんが来た。「いやあ、こんなにもたくさん、どれを頂くか迷ってしまいました。こんなにたくさん食べ物を出してくれる方に、感謝したいです。そういう方がいるんですね。大事にして食べたいです。」

③母は、60代で、父親は70代、私は、40になったばかりです。「両親が障害をもっているので、買い物は私がしますが大変です。歳をとってきて段々とわがままが出てきました。これは要らない、これを食べたいと。でも、こうやって、たくさんの食料をいただけるなんて、ありがたいと思わないといけない。と両親に言ったのですが、分かっているかどうかです」

④長野大学生が２人でやって来た。「高校までは、家にいて親の作った食事をただ食べていたけど、今、自炊をしていると、やっと親のありがたさが分かってきました。仕送りは２万円、アルバイトで８万位だけど、コロナ禍で居酒屋のバイトが超減ってきたから、今日の食材は生活費が少しういて助かります。」

大学生にとっても、今回の「0円スーパー、0円食堂」は、意味のある開催であったと思う。長野大学生は、20名程来ていたようである。特に、外食に頼らず自炊をしている学生ほど、食材と親の手料理は、有難味が分かったと実感する。

⑤70代の独居老人は、「こんな世知辛い世の中にあって、たくさんの食料品などを寄贈してくれる方がいるなんて、日本もたいしたもんだと思いました。何もしないで文句だけはしっかりと言う人が多すぎる。もっと困った人のことを考えないといけない。私も、含めてだがね。」

⑥30代と50代の女性の親子は、「珍しい食品が結構ありました。それに、普段食べられないカニまでいただきました。そのカニ雑炊なんて初めて食べます。高級チョコレートもいただきましたし、外国のオレンジジュースもいただき、超嬉しいです。高級チョコレートは、久々です。」

⑦80代のおばあちゃんは、「団地に住んでいます。足もなく車もないので、今日は、お友だちの車に乗って連れてきてもらいました。ここに来れない人がいるので、その分まで持っていっていいですか。」と。早速に２人分の食料品を持って帰ったのである。確かに、本当に困窮している人は、この場所に来れない現状がある。その人のことまで考えての行動であった。

本当に生活に困っている大勢の人のために、食料等を提供し、人に光を当てたい。そのためには、大勢のボランティアの力を借りながら、進めていくことが肝要だと感じる。

⑧「母と私の二人で生活をしています。けど、母は、病気で判断ができないので、私が母に代わって食事の準備もしています。

だから買い物が大変です。出来る限り他の店より安いものを選んで買ったり、節約しながら買ったりしてます。今回は、大変助かりますし、無料だし数も多くて嬉しかったです。」と、30代の娘さんがこう応えてくれた。

⑨「ありがたいです。妻は、体の具合が悪いので買い物にも行けません。私が買い物をしますが、石油の値段が上がって物も高くなっていますから、今回は、助かります。こんなにもたくさんの食料品をどっさりいただきました。」と、70代後半の初老が話してくれました。

⑩こんな老夫婦もおりました。「コロナだったり、寒かったりして、外になかなか出られませんでした。買い物も、あまりしないので、家には食べ物も大してありません。今日は、久しぶりに夫婦２人でここに出かけることができました。それに、２人分までたっぷりと食材をいただき、キャベツはあまりにも大きくてびっくりと同時にずっしりと重かったです。買い物難民だからね。助かりました。ありがとうございました。」と、何度も御礼をしながら帰っていきました。

⑪40代のお母さんが、３人の子どもを連れてきました。「うちは、８人家族だから大変です。お米も一升はすぐ終わります。お米は、８人分８袋ももらっちゃいました。おかずがなくても、お米さえあれば何とかなります。醤油をかけてもマヨネーズをかけても食事ができます。そうそう、ＱＰマヨネーズも８本もらいました。一人１本だから、子どもの１本ずつ持たせます。これでおかずがなくても助かります。スーパーで買い物をして

もすぐ１万円になってしまいます。今日いただいた分は、どのくらいの金額になるのかしら。来年こそは、明るい年になってほしいです。」

来場者を見ると、コロナ禍の影響等で日常の生活と歳末に不安のある人が大勢いた。その方々は、必死で生活をしていると思う。何としても、どの家族にとっても幸せの毎日となることを願わずにはおれなかった。

社会福祉法人　まるこ福祉会　こどもレストランきらっと　実績

No.	実施日	児童数	こども	(レオ)	長次	修学	児童	保護者	V大人	Vまるこ	職員	Vパレ	ボラ	来賓等	参加者数
1	2018年8月4日	56	51	5				30	8	20	8	13	12	15	154
2	2018年9月1日	81	76	5				37	9	12	9	13	24	3	179
3	2018年10月6日	54	47	7				47		10	10	11	15	3	150
4	2018年11月3日	70	69	1				43	1	13	12	11	15	5	169
5	2018年12月1日	79	72	7				39		12	8	9	21	7	175
6	2019年1月5日	62	57	5				30	19	16	6	14			128
7	2019年2月2日	75	67	8				39	11	13	4	13	18	13	175
8	2019年3月2日	72	67	5				34	11	13	4	13	14	13	163
	平成30年度　合計	549	506	43				299	59	109	61	97	119	59	1,293

No.	実施日	児童数	こども	(レオ)	長次	修学	児童	保護者	V大人	Vまるこ	職員	Vパレ	ボラ	来賓等	参加者数
9	2019年4月6日	49	39	10				9		10	21	6	10	3	108
10	2019年5月4日	17	16	1				2		13	3	7	11	14	67
11	2019年6月1日	18	17	1				5		12	5	8	22	8	78
12	2019年7月6日	35	33	2				14		13	4	11	18	5	100
13	2019年8月3日	29	28	1				8		10	5	12	14	1	79
14	2019年9月7日	50	45	5				14		16	4	12	12	2	110
15	2019年10月5日	36	30	6				5		19	4	7	9	5	85
16	2019年11月2日	40	38	2				13		17	4	7	22	10	113
17	2019年12月7日	32	30	2				7		15	4	8	24	3	93
18	2020年1月4日	30	28	2				11		11	6	12	13		83
19	2020年2月1日	40	28	3	2	3	6	9	3	15	6	11	7	7	100
	2020年3月3日		コロナウイルスの感染拡大を防止するため学校が3/3～3/19まで休校！												135
	2020/3/3～3/19	135	135												
	平成31・令和元年度計	511	467	35	2	3	6	97	3	151	66	101	162	58	1,151

No.	実施日	児童数	こども	(レオ)	長次	修学	児童	保護者	V大人	Vまるこ	職員	Vパレ	ボラ	来賓等	参加者数
20	2020年4月4日	24	19	0	2	0	3	5		18	4	4	3	7	65
21	2020年6月6日	41	22	2	9		8	10		15	5	8		8	87
22	2020年7月4日	34	24	1	9			7		18	6	7	5	11	88
23	2020年8月1日	48	34	2	12				11	14	4	7	10	9	103
24	2020年9月5日	16	12		4			3		12	4	5	2	11	53
25	2020年10月3日	37	27	1	7	2		14		20	5	5	4	25	110
26	2020年11月7日	40	25	1	8	6		12		16	5	6	9	1	89
27	2020年12月5日	52	37		8	7		14	5	13	4	6	1	4	99
28	2021年1月9日	29	27		2			11	6	16	7	8		15	92
29	2021年1月16日	76	76					49		24	3	2		16	170
30	2021年2月6日	115	84	1	3	7		31	5		46	22		332	550
31	2021年3月6日	42	32		3	7		11	21	15	7	9	2	8	115
	令和２年度　合計	554	419	8	67	29	11	167	48	181	99	89	36	447	1,621

No.	実施日	児童数	こども	(レオ)	長次	修学	児童	保護者	V大人	Vまるこ	職員	Vパレ	ボラ	来賓等	参加者数
32	2021年4月3日	59	40	6	6	7		16	8	15	8	5	6	8	125
33	2021年5月1日	53	34	3	4	8	4	14	6	16	5	5	2	5	106
34	2021年6月5日	38	7	3	10	14	4	2	8	13	17	7		4	89
35	2021年7月3日	59	34	1	14	8	2	16	13	4	4	4	15	12	127
36	2021年8月7日	66	18		2	5	41	5	13	23	2	5		2	116
37	2021年9月4日	12	12		0	0	0	5		11	5		6	1	40
38	2021年10月2日	20	16			4		9		13	5	5	5	2	59
39	2021年11月6日	39	24	2	11	2		9	11	5	10	8		5	87
40	2021年12月4日	51	26	2	10	10	3	8	20	1	22	10		10	122
41	2022年1月8日	27	15		6	6		5		11	8	4	16	2	73
42	2022年2月5日	21	10	1	6	5		2	10	9	7	2	1		52
43	2022年3月5日	22	7		3	5	7	0	7	13	5	4		10	61
	令和３年度　合計	467	243	18	71	74	61	91	96	134	98	59	51	61	1,057

No.	実施日	児童数	こども	ｴｸｾﾗﾝ	長次	修学	児上田	保護者	V大人	Vまるこ	職員	Vパレ	ボラ	来賓等	参加者数
44	2022年4月2日	59	40		6	7	6	16	8	15	8	5	6	8	125
45	2022年5月7日	46	36	0	4	1	5	11	6	11	4	5		4	87
46	2022年6月4日	20	4	0	10	6		3	5	9	4	2		5	48
47	2022年7月2日	53	37		16			13	7	13	4	4		7	101
48	2022年8月6日	31	23			8		7	5	12	3	2		4	64
49	2022年9月3日	38	30		3	5		11	5	13	4	4		2	77
50	2022年10月1日	42	28		4	6	4	10	11	18	4	4		29	118
51	2022年11月5日	59	28	5	16	6	4	8	18	14	4	3			106
52	2022年12月3日	46	22		18	4	2	9	12	13	4	4		5	93
53	2023年1月7日	41	32	4	2	2	1	9	29	12	5	4		6	106
54	2023年2月4日	33	31			2		11	9	16	5	4		5	83
55	2023年3月4日	40	30		2	4	4	7	9	16	4	2		9	87
	令和４年度　合計	508	341	9	81	51	26	115	124	162	53	43	6	84	1,095

No.	実施日	児童数	こども	ｴｸｾﾗﾝ	長次	修学	児上田	保護者	V大人	Vまるこ	職員	Vパレ	ボラ	来賓等	参加者数
56	2023年4月1日	33	21		9	2	1	6	6	16	4	2		9	76
57	2023年5月6日	51	30		10	11		9	10	18	7	3		20	118
—	2023年6月3日	0	0							13	4				17
58	2023年7月1日	50	30		20			13	17	12	4	5		3	104
59	2023年8月5日	37	21		6	7	3	10	11	17	4	5		3	87
60	2023年9月2日	34	32		1	1		11	6	15	4	4			74
61	2023年10月7日	33	22		10	1		8	3	14	6	4		4	72
62	2023年11月4日	37	20		12	1	4	6	6	18	4	6		4	81
63	2023年12月2日	47	26	6	12	2	1	8	9	23	4	5		7	103
64	2024年1月6日	33	20			2	5	9	22	22	5	3		14	108
65	2023年2月3日	27	24				3	9	8	24	4	5		8	85
66	2024年3月2日	36	28		1	1	6	12	9	20	4	6		15	102
	令和５年度　合計	418	280	6	81	28	23	101	107	212	54	48	0	87	1,027

総計	児童数	こども	ｴｸｾﾗﾝ	長次	修学	児上田	保護者	V大人	Vまるこ	職員	Vパレ	ボラ	来賓等	参加者数
	3,007	2,256	119	302	185	127	870	437	949	431	437	374	796	7,244

新聞記事とテレビ放映記録で見る
まるこ福祉会の歩み

2004年（平成16年）4月10日（土曜日）　東信 地域 22

ここでは、新聞・テレビ等で見る「まるこ福祉会20年」の歴史の中で、主な活動事例を新聞記事で紹介します。

信濃毎日新聞

第三種郵便物認可　信濃

福祉安定目指し新法人

丸子町社協 県内初の試み

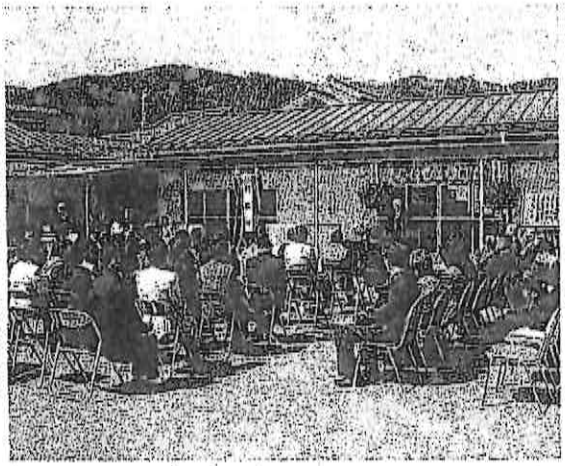
丸子町社会福祉協議会（向角辰文理事長）はこのほど、社会福祉法人「まるこ福祉会」を設立した。県社協によると、社協の社会福祉法人設立は県内初で、全国的にも珍しい。合併問題や人事異動など流動的な町政の中で、別法人が単独で福祉事業を請け負うことにより、運営を安定させる。

設立に伴い、町社協が地域の千曲川左岸の中核福祉施設を目指して運営してきた障害者共同作業所「とんぼハウス」が新法人へ移管。知的障害者通所授産施設として再出発した。新法人は、づく授産施設になったことで、国、県からの支援（運営）費が、以前の三倍以上になるという。二十人以上が利用でき、給食や嘱託医による健康管理を受けられる。

築三十八年の木造平屋三百三十平方㍍の建物を改修。基準を満たすため、給食室やスロープなどを付けた。職員八人が常駐。開所は原則的に平日朝から夕方まで。共同作業所も継続し、木材や段ボールを使った製品づくりなどをする。

町は改修費約四百三十万円を負担し、土地と建物を無償貸与。町社協も、社会福祉法人設立時に定める必要額千五百万円を全面的に助成した。そのため、国、県の補助金を受けずに、構想から一年で開所に至った。

町社協によると、共同作業所は九五年に開所したが、障害者支援は在宅介護が主流になった影響で、利用者が急増。町内から授産施設建設の強い要望が出ていた。



まるこ福祉会が運営する知的障害者授産施設「とんぼハウス」の開所式

共同作業所を通所授産施設に

日刊 地域を開く身近な新聞　2008年(平成20年)10月1日(水曜日)

東信ジャーナル

発行所 〒386-0005 ㈱東信ジャーナル社 長野県上田市古里2256-7
発行人 井出正義 TEL 0268-23-6632 FAX 0268-26-1403
日、月と祝日の翌日は休み (3連休にならない発行) 購読料／1ヵ月980円

発芽玄米20%のパン きょう発売

まるこ福祉会が丸子物産館「花風里」で

社会福祉法人まるこ福祉会（柳沢正敏理事長）はきょう1日から、運営する上田市生田の信州国際音楽村近くの丸子物産館「花風里（はなかざり）」＝武重和彦館長＝で発芽玄米入りのパンの販売を開始する。発芽玄米を提供する㈱ファンケル発芽玄米＝本社・東御市＝によると発芽玄米を20%使用したパンは全国でも初めてだという。

焼き上がった発芽玄米パン

パンをこねる利用者

ファンケル発芽玄米社の発芽玄米粉 発芽玄米入りうどんも

発売する保存料を使わない安心安全な発芽玄米パンは、低カロリーで良質なタンパク質やギャバなどを含み栄養価が高いのが特徴。もちもちした食感で、かみしめると甘みが口の中に広がる。

今回は米粉を使ったパンに合う限定の「クルミだれパン」（200円）も発売する。そのほかの「ねぎみそパン」「巨峰ジャムパン」などは150円、ベーグルパンなどは100円。割引販売も行う。

同館では同法人の運営する障がい福祉サービス事業所の利用者と職員が共同でパンを作り販売してきた。今回、新たなパンを販売するのは、作業を行っている障害者の賃金の向上を目指す同法人が、同社から発芽玄米を使ったパン作りの提案を受け、打開策になると思ったことから。同社から20万円の寄付を受け縦型ミキサーも購入した。

発芽玄米を粉にして焼くパンは、ふくらませる技術が難しく、武重館長、職員の田中二三枝さんらが大手パンメーカーに研修に行き、技術を習得した。

また、ファンケルは知的障害者の特別子会社、ファンケルスマイルを運営している。今回のパン作りに関わっている同社の木村保夫さんは「パンを通して発芽玄米を多くの人に知ってもらえたらうれしい。まるこ福祉会が自立した企業形態でやっていけるようになることを願っている」と話している。

発芽玄米入りのうどんも同時に販売する。営業時間は午前10時から午後5時。月曜日、祝日の翌日定休。問い合わせ☎43・4800

信濃毎日新聞
31 地域 2008年（平成20年）10月17日（金曜日）

上田の障害者施設「とんぼハウス」

手作り「発芽玄米パン」

独自色を出し食感が人気

玄米の粉が入った生地をこね、パンの形を整える利用者

上田市下田の社会福祉法人「まるこ福祉会」が運営する障害者施設「とんぼハウス」は十月から、料料の80%に小麦粉を、20%に発芽玄米の粉を使った手作りパンの販売を始めた。以前は調理済みの既製品を解凍して発酵させ、焼いて売っていたが、独自色を出そうと考案。発芽玄米の粉は小麦粉よりも割高になるが、これまでより材料費の総額を抑えられるためパンの値段は変わらない。「もちもちした食感」を武器に、施設の収入増につなげたいと期待をかける。

まるこ福祉会が指定管理者として運営を委託されている市の物産館「花風風（はなかざり）」で販売。とんぼハウスに通う知的障害者五人と、まるこ福祉会の職員五人の計十人が、クルミ入りのみそやネギみそを包んだオリジナルパンや、焼きそばパン、あんパンなどを、一日に二百―三百五十個作る。値段は一個百五十―二百円。市丸子地域自治センター、丸子文化会館、地元企業で出張販売もしており、八割は売れるという。訪問販売を受けている弁当店のアルバイト女性（19）は「歯応えがよくて、腹持ちがいい」と話す。

以前は約五十個作って売れるのが八割、一日千―五千円だった売り上げが、十月からは平均約三万五千円に伸びた。生地をこねて形を整えている利用者の男性（30）は「やりがいがある」と声を弾ませる。出張販売をする女性（19）は「今の方が売れるのでうれしい」と笑顔だ。

とんぼハウスは、一般就労まで時間を要するとみられる人が対象の就労継続支援B型などに位置づけられる多機能型事業所で、知的障害者を中心に三十四人が通う。障害者自立支援法の施行で施設への助成金は減っている。

まるこ福祉会の柳沢正敏理事長は「どこでも売っているものでは飽きられてしまう」と考え、最近増えてきた米粉パンとの違いを出すため、食物繊維などが豊富という発芽玄米を選んだ。柳沢理事長は「施設を取り巻く現状は厳しいが、なんとか軌道に乗せたい」と話す。今後は企業への無人販売も検討する。

「ふくしまっ子春の学校」

3回目 まるこ福祉会が受け入れ

原発事故の避難者支援事業

日程を終え音楽村出発を前に閉会式

ＮＰＯ法人子どもプロジェクト（福田恵美理事長）＝東京都新宿区＝が主催する福島の原発事故避難者支援事業「ふくしまっ子春の学校in上田」が3月27日から29日まで、上田市丸子地域などで行われた。同市長瀬の社会福祉法人まるこ福祉会（柳沢正敏理事長）が協力しており、受け入れは3回目。

福島県内他地域と東京都内に避難している17家族50人が参加。鹿教湯温泉に宿泊し、信州国際音楽村などを訪れた。

同事業は独立行政法人福祉医療機構の3年間の社会福祉振興助成事業が区切りを迎えるに当たり、継続のための連携を先頃、主催者や福島県内で支援に取り組むＮＰＯ法人、同福祉会、上田市東日本大震災被災者支援実行委員会などが話し合った。柳澤理事長は「夏、冬、春の3回の受け入れを続けてきた。今後も協力する」と話した。

大成功だった「第一回こどもレストラン」

信濃毎日新聞　2018年（平成30年）8月5日　日曜日

東信

作って食べて地域に絆

上田

障害者・ボランティアら参加「こどもレストラン」

上田市長瀬の障害福祉サービス事業所「きらり」で4日、地域の子どもや障害者、ボランティアらがピザ作りなどを楽しむ「こどもレストラン」が初めて開かれた。事業所を運営する社会福祉法人「まるこ福祉会」と同市のNPO法人「子育て応援団はれっと」が子どもの居場所づくりや異世代交流を進めようと企画。市内外の子どもら約50人と多くの大人が参加した。

普段障害者らがパンを製造している工房や隣接する食堂が会場。ピザ作りでは、子どもと大人が一緒にピザ生地を延ばし、工房の窯で焼いてもらって食べた。県稲荷山養護学校（千曲市）高等部2年の滝沢歩夢さん（16）＝上田市＝は「ピザ作りが楽しかった。また来たい」。母みつ子さんも「普段地域の人との関係が薄いのでこうした場はありがたい」と話していた。

まるこ福祉会の小室郁夫理事（65）は「交流の場づくりを進めたい」とし、今後も毎月第1土曜日に開く予定だ。

ピザ作りなどを楽しんだこどもレストラン。子どもと大人の交流の場として継続を目指す

- 子ども　51名
- 大人　30名
- スタッフ　50名
- 来賓　29名

160名参加

マスコミ8社取材

子どもたちの声から

- 「今度はお友だちを連れて来たい」
- 「やさしいお兄ちゃんがいて楽しかった」
- 「おかあさんと一緒にピザを作れてうれしかった」

2018.8.4(土) 10:00~15:00

毎日新聞　2018年（平成30年）8月17日（金）

ボランティアの女性たちやシェフとピザづくりを楽しむ子どもたち＝上田市長瀬のきらりで

障害者らが料理をつくる「こどもレストラン　きらっと」（仮称）が、上田市長瀬の障害者福祉サービス事業所「きらり」で始まった。子どもや障害者、地元住民らが交流できる場として、事業所を運営する社会福祉法人「まるこ福祉会」と上田市のNPO法人「子育て応援団ぱれっと」が企画。障害者が運営に関わる子ども食堂は県内初だという。【ガン・クリスティーナ】

子ども食堂 シェフは障害者

上田「誰もが安心できる場に」

初めてレストランが開設された4日は、市内外の親子ら約80人が参加。子どもたちはボランティアと一緒にピザ作りを楽しんだ後、事業所の利用者である障害者らが用意したパスタや野菜などが並ぶビュッフェをおいしそうに食べていた。両親と参加した県稲荷山養護学校（千曲市）高等部2年の滝沢歩夢さん（16）＝上田市＝は「ピザづくりが楽しかった」と話し、母みつ子さんは「子どもが他の人と楽しく交流しているところを見てうれしかった」と喜んだ。

事業所では、精神や知的障害を持つ利用者がパンや老人ホームの食事などを作っている。この日のメニューを提案した小浜真治さん（50）は「子どもも大人もおいしく食べられるメニューを考えた」と話す。元々、料理人だったが、5年前にうつ病を発症。数年間は自宅に引きこもっていたが、約2年前から事業所に通いはじめたという。子ども食堂で交流を楽しんだ小浜さんは「人のために料理を作るのはうれしい。障害者が子どもと関わる機会はあまりなく、自分もよくなると思う」と話していた。

まるこ福祉会の理事・小窪邦夫さん（65）は「誰が来ても安心できる場にしたい」と語る。「障害者がシェフだと、障害者も来やすいのでは。先輩が頑張っている姿を見て、障害の有無に関わらず社会をよくする一員だと感じてほしい」と参加を呼びかけている。

今後は毎月1回、第1土曜日の午前10時～午後3時に開催する予定。18歳まで無料で、大人は500円。問い合わせはまるこ福祉会（0268・71・6263）。

東信ジャーナル

2019年(平成31年)2月5日(火曜日) (4)

南米の日系農業女性と交流会

上田のまるこ福祉会「きらり」利用者と餅つき

声を合わせて「よいしょっ」と餅つき

南米各地で活躍する日系農業女性6人は1月31日、上田市長瀬のまるこ福祉会を訪れた。障害福祉サービス事業所きらりの視察や利用者との交流会で互いの理解を深めた。

女性はブラジル、パラグアイ、ボリビアの日系1世～3世、40代～70代。農林水産省の「日系農業者団体女性部の女性活躍推進研修」で来日した。滞在は3週間。地域交流や農村生活体験などが目的。

交流会ではきねと臼で「よいしょっ」と餅つきを楽しみ、利用者が真心込めた歓迎の歌に涙する場面もあった。

同団リーダーの山神好子さん(71)は四国生まれの戦後移民。「パラグアイでイモを育てコンニャクを作っている。この地域の障がい者への接し方に感動した。学んだ知恵を持ち帰り発展させたい」。

一行は29日から2泊3日で上田市下武石の信州せいしゅん村(小林一郎代表)に滞在。依田窪南部中学校の視察やそば打ち体験、大豆加工品(みそやとうふ)などを幅広く学び交流した。

―シニア世代の青春寓話―

映画『兄消える』上映を記念して

シリーズその6　「出会いは一生の宝」

協力者　（社福）まるこ福祉会理事長　柳澤　正敏

映画『キセキの葉書』でファンとなり、知り合った新田博邦プロデューサーとの交流から、映画『兄消える』の制作に微力ではありますが、支援させていただく機会を頂戴しました。

新田氏の映画に掛ける情熱と信念は凄まじいものがありまして、お金をかけないで人生の機微を魅了する作品づくりから、スタッフの皆さんは、我が法人が提供した施設で寝泊まりし、打ち合わせもし、まさに同じ釜の飯も食べながらの制作。

また法人で提供した自転車や座椅子も映画で使用され、撮影に必要なパチンコ店の紹介もできました。

そのお礼にと、主演の柳澤愼一さんは、我が法人の老人ホームで「チャリティコンサート」を。またゲスト出演の雪村いづみさんも、我がきらりホールで「思い出コンサート」をボランティアで開催してくださいました。十代から九十代まで、大勢の利用者さんの心のひだには、お二人の歌と御姿から慈愛が広がり、その場は瞬時にして涙と感動のひと時となり、まるで映画の再現かのようでした。

女優の丸子出身の土屋貴子さんも我が法人のサロンに足を運ばれ、その壁面に展示されている柳澤愼一さんの創作詩『上田想えば』の中の一節にある「光を浴びて輝く峰千曲を渡る四季の香り」に、いつも心を躍らせてずっと見つめていました。

我が法人でお迎えした映画関係者の皆様との出会いは一生の宝であり、『兄消える』とも私の心に永遠に輝きます。

舞台となった上田市内のスナックのカウンターで、文学座の出演者の皆さんら

ご購読申し込みは●読売上田

まるこ福祉会 施設3周年「音楽の祭典」

利用者と職員が歌や踊り披露

アンジェリカの演奏に合わせて踊る利用者

障害のある人の暮らしを支え、福祉サービスを展開する上田市長瀬の社会福祉法人まるこ福祉会（柳澤正敏理事長）は20日、福祉空間施設3周年記念「音楽の祭典」を開いた。

開設当初から支援している「チームあったかい輪」の人たちに感謝を込めて楽しんでもらおうと利用者と職員が歌や踊りを披露。

昼はもちつき大会や昼食パーティーがあり、午後からは信州国際音楽村マンドリンサークルアンジェリカの演奏があった。マンドリンの演奏に合わせて利用者が踊る場面もあり、出演者と利用者が一体となって楽しんだ。「チームあったかい輪」の長瀬音頭などの踊りもあり、楽しいひとときを過ごした。

同施設は平成28（2016）年、地域に開かれた福祉拠点を目指して誰もが利用できる地域交流サロンとして開設。総合厨房、サロンあったかい輪、きらりホール、きらり市民ギャラリーがある。運営は地元のボランティアグループ「チームあったかい輪」（白井由美子会長・29人）と協働で行っている。

カフェスペース「ぐらんまるしぇ」は月曜日から金曜日まで開いている。

柳澤理事長は「地域の支えがあり、施設の利用者は年々増加、今年度は年間約3万人を超えた。今後さらに充実し発展させたい」と話した。

なお、開会式でチームあったかい輪の白井会長に感謝状が手渡された。

コンサートには大勢が集まった（写真はまるこ福祉会提供）

まるこ福祉会がチャリティーコンサート
「音楽」で子どもたちに元気を届けたい

上田市内

（社福）まるこ福祉会は18日、上田市長瀬の同福祉会きらりホールでオカリナ奏者・遠藤一己さんのチャリティーコンサート「ひとり音コンサート」を開催。地域住民や同福祉会の施設利用者ら241人が参加した。

遠藤さんが様々な楽器で演奏
（写真はまるこ福祉会提供）

遠藤さんは北海道出身で、大学卒業後オランダに留学。その後、ヨーロッパ各地の音楽祭にも数多く演奏して活躍した。日本では東日本大震災後、被災地で心の復興支援としてコンサートを行っている。

この日のコンサートではオカリナのほかフルートや尺八など、様々な音色で『さくら咲く』『五木の子守唄』『コンドルは飛んでいく』『コーヒールンバ』など17曲を演奏し、会場からは盛大な拍手が湧き起こった。

また今回は「子どもたちにおなかいっぱいの幸せと満足を」と、遠藤さんの希望でコンサートの入場協力金計12万500円（1人500円）を、同施設の「こどもレストランきらっと」に寄付。集まった協力金は、子どもレストランの運営などに活用されるという。

遠藤さんは、音楽で子どもたちに元気を届けたいとし、「小さな力が大きな輪になりますように」と話した。なお2月1日(土)は同子どもレストランに出向き、演奏も行う予定。

ただいま活動中

様々な年代つながる場

こどもレストラン（上田市）

今月1日昼、上田市長瀬にある障害福祉サービス事業所「きらり」に約90人が集まった。テーブルに並ぶのはオムレツやスパゲティ、野沢菜漬けなどが色鮮やかに盛りつけられたプレート。子どもたちやお年寄りらが談笑しながらほおばり、上田市立神科小4年の低石優斗君(10)は「ご飯もおいしいし、色々な人と仲良くなれるのがいい」と満足げだ。

社会福祉法人「まるこ福祉会」などが運営する「こどもレストラン」が始まったのは2018年8月。障害者や高齢者向けの施設を運営する中、子ども向けの活動にも力を入れようと毎月1回のペースで開催している。これまでに19回実施し、延べ800人以上の子どもが参加した。保護者の評判も上々だ。

心がけているのは、子どもが「食事をするだけの場所」にしないことだ。地域のボランティアが子どもに教える形で、これまでにピザや餅、メロンパン作りなどを実施。食事前には運営に加わる高校生や大学生が小学生に勉強を教えたり、一緒に遊んだりして交流を深めている。

学生にとっても活動の幅を広げる有意義な場所となっている。上田市内にキャンパスのある長野大3年の小松拓弥さん(21)は「様々な年代の人と関わることができて勉強になる。将来は地元で地域作りの仕事に携わりたい」と話す。同福祉会理事の小室邦夫さん(66)は「地域の子どもから大人までがつながる場所。人間関係が広がることで地元への愛着も湧くのでは」と期待する。

業者から野菜や果物などを譲り受けたり、趣旨に賛同する地元企業の寄付で運営費を賄ったりしているが、継続に向けて不安も抱える。小室さんは「安定した運営のため、企業や地域の協力の輪を広げていきたい」と話す。

（横山洋介）

食事だけではなく、交流の場にもなっているこどもレストラン（上田市で）

まるこ福祉会とNPO法人「子育て応援団ぱれっと」（上田市）が運営し、毎月第1土曜日に開催している。小中高校生は無料、大人500円。次回は3月7日午前10時～午後3時、2月28日までに申し込みが必要。問い合わせなどは同福祉会（0268・71・6263）まで。

新型肺炎

休校の子に居場所を

佐久

預け先 フェイスブックで紹介

市民活動サポートセンター

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い小中学校が一斉休校していることを受け、佐久市市民活動サポートセンターは、日中に子どもを受け入れる市民らの活動を、公式フェイスブックで紹介している。休校で子どもの預け先に困っている親たちに情報を発信する狙いだ。

3日は2団体の情報を発信。佐久市内山の住民グループ「いずみ会」は空き家を借りて設けた活動拠点「いずみの家」で午前10時～午後4時、小中学生の勉強や遊びの場所を提供している。野沢小学校内の一室を借りて託児支援に取り組む「学校応援団・ぱれっと野沢小」も取り上げ、一緒に支援を担うボランティア参加も呼び掛けている。

市内では2日から市立全24小中学校が休校。同センターは住民の居場所づくりなどに取り組む団体や個人が、子どもの受け入れを始めたのを知り、スタッフが団体・個人の許可を得てフェイスブックで紹介することにした。

スタッフの佐々木愛歌さん（38）は「困っている親たちの助けになればうれしい」と話している。

勉強や遊びの場の情報を発信するサポートセンタースタッフ

上田

食事提供 学習支援や遊びも

社会福祉法人が「レストラン」

新型コロナウイルス感染拡大防止のための小中学校の臨時休校を受け、上田市長瀬の社会福祉法人まるこ福祉会は3日、同法人の施設内で「こども支援レストラン」を始めた。19日までの平日午前8時半～午後4時、保護者が留守になる小中学生の居場所にしてもらう。無料で食事を提供し、学習支援にも取り組む。

ボードゲームやボールなども用意し、屋内外で遊べる。学習支援も含め、同法人の職員、施設内に拠点があるNPO法人「子育て応援団ぱれっと」のスタッフが対応する。事前に体温やせきの有無など健康状態を聞き取ってから受け入れる。

同じ場所で月に1回、地域の子どもや大人約150人が参加する「こどもレストラン」を開催している。今回のこども支援レストランは子育て中のスタッフが提案した。小室邦夫理事長（66）は「子どもの安全を守るため、少しでも手伝いたい」と話す。

初日は、ぱれっと代表の菅尾秀子さん（59）＝上田市秋和＝の孫で小学校1年の菅尾輝久君（7）＝東京都江戸川区＝が訪れた。「おうちより楽しい。新しいお友達と遊びたい」と話していた。

定員各日20人。事前に申し込む。問い合わせはまるこ福祉会（☎0268・71・6263）へ。

「こども支援レストラン」のボードゲームで遊ぶ輝久君（右）

教訓つなぐ避難訓練　上田

高台に逃げる訓練をする児童ら（11日、上田市で）

上田市の障害者福祉サービス事業所「きらり」で11日、小学生を対象に避難訓練が行われた。震災の教訓を伝えようと、事業所を運営する社会福祉法人「まるこ福祉会」が企画した。

この日は、新型コロナウイルスの感染拡大による休校措置を受け、事業所で開設している「休校中こども支援レストラン」に訪れた児童14人が参加した。子どもたちに道徳指導をしている東御市人権同和教育指導員の柳沢富美子さん(68)が講話した後、参加者は約500㍍離れた高台の寺まで災害を想定して実際に避難した。

震災をほとんど覚えていないという上田市立東小4年、柳原稜君(10)は「とにかく高い所に逃げるのが大事だと学んだ」と話した。同法人の小室邦夫理事(66)は「震災を知らない世代にも命の大切さを伝え、避難方法を体で覚えてもらいたい」と語った。

県内避難者709人

県によると、東日本大震災で岩手、宮城、福島県などから県内に避難している人（2月4日現在）は前年の同じ時期より26人少ない709人となっている。

3.11東日本大震災 9年を迎え、
「休校中 こどもレストラン」で避難訓練
を実施しました。

2020(令和2年) 3月11日(水)
ユニット一同

まるこ福祉会きらり　県内初
美崎太洋さんの個展
上田市

上田市長瀬の（社福）まるこ福祉会「きらり」市民ギャラリーで現在、画家で音楽家の美崎太洋さんによる個展「琉球と港と自然、そして浅間山」が開催中だ。

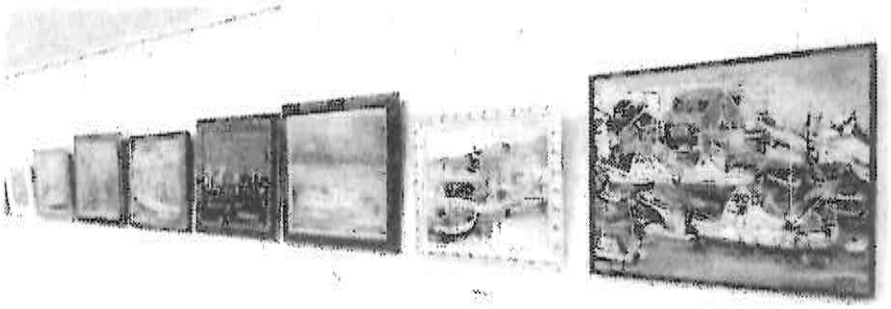
美崎さんは和歌山県出身で演歌・歌謡曲などの作曲を手掛けて長年、音楽家として活動。１９９４年に「絵描きになるぞ」と宣言し、47歳から新たな挑戦を始めて翌年から東京・銀座個展を開催している。今回は、まるこ福祉会関係者の紹介により初めて長野県で作品を発表。個展としては26回目となる。

東京を拠点に自然界の持つ唯一無二の魂をキャンバスいっぱいに描き、色彩の持つ力、エネルギッシュなタッチなどで見る人を魅了する美崎さん。今展には小品から１００号の大作まで48点を展示し、長野の地に感動を与えている。展示作品中22点が「港」を題材とするもので、『江ノ島を望む小さな漁港』（Ｆ１００）、『ＹＯＫＯＨＡＭＡ』（Ｆ80）、『赤い船の仲間たち』（Ｆ50）といった大作のほか、『真鶴港』『氷見漁港』『みなとみらい』や小品『船着場』『灯台』など、船のある風景を感性豊かに描いた作品が並ぶ。

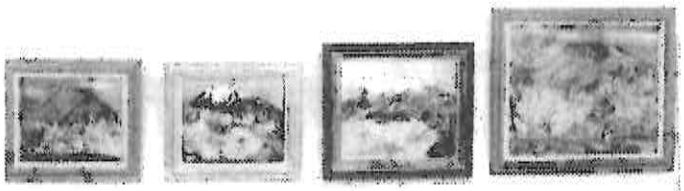
「琉球」がテーマの作品は『琉装花笠』『琉装カナーヨー』『琉装鳩間節』『出番前』など。そして「浅間山」を描いた作品は４点で空の色、樹々の色、山の表情などの違いに〝生きている浅間山〟を感じる。

他にも『みろく様と天女』『サイテクリョー』『田舎の思い出』など、魅力的な作品が並んでいる。

会期は5月29日(金)まで。時間は午前10時～午後４時。土、日曜と祝日は休館。入場無料。



「港」を描いた作品が並ぶ



生きている「浅間山」を感じる作品

平和へ感謝 自作の詩朗読

上田 終戦の日前に

自作の詩を朗読する参加者（8日、上田市で）

15日の「終戦の日」を前に、平和や身近な人への感謝をつづった自作の詩を朗読する会が8日、上田市で開かれた。

同市の社会福祉法人「まるこ福祉会」と長野大学の学生有志が初めて企画した。福祉会が運営する事業所の通所者ら約90人を前に、地域住民や学生ら7人が不戦の誓いや家族への感謝などを読んだ。

終戦に関して祖父から話を聞いたことがあるという同大4年高木風奈さん(21)は、穏やかな日々を生きられるありがたさについて朗読した。「何気ない日常など身近なところから平和を考える機会になった」と話していた。

過去に学び 今は備えて 将来に生かす

助け合い 住民と避難訓練

上田の福祉施設 利用者が高台へ

社会福祉法人まるこ福祉会（上田市）は12日、運営する障害福祉サービス事業所「きらり」の利用者や地域住民と一緒に、水害に備えた避難訓練をした。65人が参加し、約250㍍離れた高台まで徒歩や車いすで移動。昨年の台風19号で同会が運営する別の障害者グループホームの利用者が避難を迫られたことを受け、防災意識を高めようと企画した。

利用者たちは手をつないだり、つえを使う人を支えたりしながら階段を上った。高台まで約10分かけて、全員が到着。利用者からは「災害が来た時に対処できるように勉強したい」と声が上がった。小室邦夫理事は参加者に「自分の命は自分で守る『自助』が大切」と説明。災害時は落ち着いて行動し、日頃から自宅近くの避難場所や避難経路を確認するよう求めた。

小室理事は取材に、昨年の台風でグループホームの利用者が避難したことを踏まえ、「障害者だけで迅速に判断し、避難するのは難しい。地域の理解とサポートが必要と感じた」と話した。「迷惑を掛けたくない」という意識から障害者が遠慮して助けを求めない場合も考えられるとし、地域の人からの細やかな声掛けがあればありがたい」と訴えた。

訓練前には、台風19号の災害現場を取材した丸子テレビ放送や丸子消防署の職員が昨年の被害を紹介した。

手をつないで支え合いながら高台に向かう利用者ら

災害時の心構え 確かめる

阪神大震災から26年 上田で防災訓練

阪神大震災から26年を迎える17日を前に、上田市長瀬の社会福祉法人まるこ福祉会は15日、防災訓練をした。運営施設の利用者や住民ら約70人が参加。炊き出しをしたり、震災当時にボランティアとして活動した人の体験を聞いたり。避難時の注意点や災害時の心構えを確認した。

地震発生を想定し、利用者らは屋外の駐車場に避難した。炊き出しは地元の丸子地区日赤奉仕団が実演。熱に強いポリ袋にコメと水を入れ、用意した鍋でゆでて炊き上げた。袋で密閉するため、ゆでるための水は川などでくんで使える、と説明した。

大阪府豊中市出身の自営業秦野正博さん（50）＝立科町＝は震災翌日に被災地で、がれきの下に埋もれた人たちを救助した体験を話した。傾いた建物には決して入らないよう強調。「災害時は落ち着いて行動し、他の人にも思いやりを持って」と呼び掛けた。

柳沢正敏理事長は「災害の時は命を大切にし、助け合っていくことの大切さを知ってほしい」と話していた。

集まった利用者を前に、ポリ袋に食材を入れて大鍋でゆでる日赤奉仕団員

ドライブスルー方式で「こども食堂」

上田市社協とまるこ福祉会 カレーライスや豚汁など

上田市社会福祉協議会（宮之上孝司会長）とまるこ福祉会（柳澤正敏理事長）は16日、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ドライブスルー方式で初の「うえだこども食堂」を上田市ふれあい福祉センター駐車場で行った。

カレーライスの盛りつけなどの準備

家族の人数分も受け渡し

コロナ禍の自粛などで生活に困窮している人、外国籍家庭や子どもに食事を提供して支援しようと、新たに「うえだこども食堂」を立ち上げた。

初回はカレーライスと豚汁などで、朝から上田市社協とまるこ福祉会の関係者約30人が向かい入れなどで準備。駐車場に大鍋を設置し、カレーなどをテークアウト用の容器に盛りつけた。使用した米はまるこ福祉会の利用者（障がい者）が収穫したもので、前日から野菜のカットなどを行って、職員や障がい者が取り組んだ。食べ物と同時に、参加飲食店での利用で割引になる「ハッピーチケット補助券」なども配布。

オープニングのあいさつで、まるこ福祉会（上田市長瀬）の柳澤理事長は「こども食堂をここで行うことが願望でした。平成30年8月からこども食堂をまるこ福祉会でこれまで28回開き、大勢に食事をしていただくことができた。上田市の中心部で開きたいと考えていた。上田市社会福祉協議会とドライブスルーで行うことができた。子どもたちの未来に夢を与えたい。継続して行いたい」。宮之上会長は「朝早くから準備していただいた。まるこ福祉会と共通することは、困っている人がいたら、目の前のニーズに対応する、支え合い、助け合いを行う。今日も一日いい日だったという日が続くことを願っている」とそれぞれあいさつ。来賓で土屋陽一市長も訪れた。

開始時間になると、車で訪れる家族や、偶然に社協を訪れて利用する人もあり、家族の人数分手渡されると「こんなにいいの。ありがとう」と喜んでいた。

上田のまるこ福祉会が防災炊き出し訓練

阪神・淡路大震災を教訓に

「コロナ禍、助け合う精神を」
利用者や地域住民ら参加

上田市長瀬の社会福祉法人まるこ福祉会（柳澤正敏理事長）はこのほど、1995年1月17日に発生し甚大な被害をもたらした阪神・淡路大震災の教訓に学ぼうと「1・17防災炊き出し訓練」を行った。

訓練で駐車場に避難する利用者ら

「コロナ禍のいま、困った時に助け合う精神を確認する場」として企画し、同法人が運営する障害福祉サービス事業所の利用者や地域住民ら約50人が参加した。

「大きな地震が発生して厨房から火が出た」との想定で、参加者全員が屋外の駐車場まで避難する訓練を行い、丸子地区日赤奉仕団の協力で災害救助用炊飯袋を使った炊き出しを体験。阪神・淡路大震災の被災地でボランティア活動をした秦野正博さん（50）＝立科町＝の体験談を聞いた。

炊き出し訓練で米や水などを入れた災害救助用炊飯袋を大釜でゆでる

訓練前には同法人のスタッフで元上田地域広域連合川西消防署副署長の小林家寿さん（69）が阪神・淡路大震災の概要を説明し「自分が住む地域は地震が少ないから安心という過信が大惨事となった1つの要因。ここ丸子地域でも地震はいつ起きるか分からない」と注意を喚起した。

秦野さんは大震災発生翌日には被災地の神戸市東灘区に入り1週間、ボランティアで人命救助活動を行った。「全ての建物が倒壊したり傾いていたため水平線の基準がなく、頭がくらくらした。寒さと緊張で感覚が麻痺し、その日の活動を終えてからようやく足に釘が刺さって血が出ていることに気づいた」などと話し「大きな災害が起こった時はあわてず冷静に。思いやりを持って行動することで命が助かる」と述べた。

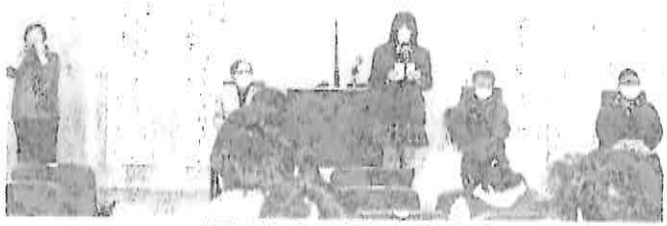
限られた地球資源を大切に!!
新しくても　古くても
車は前後にしか走らない
有限会社 コヤマモータース
TEL (0268) 35-3312 上田市岩下96-8

まるこ福祉会

「震災の心、バトンリレー」
利用者ら「福光」交流
講演や高校生の詩朗読も

上田市長瀬の社会福祉法人まるこ福祉会は11日、10年前のこの日に発生した東日本大震災を振り返り、教訓を確認し合おうと「震災の心、バトンリレー10年」と題した講演と詩の朗読会を同法人のきらりホールで開いた。同法人が運営する障害福祉サービス事業所の利用者や地域住民ら約80人が参加した。

講演する柳澤理事長



高校生らが詩を朗読

同法人の柳澤正敏理事長は震災の10日後には食料品や生活必需品をトラックに積んで被災した福島県に向かい、その後何度も足を運んだ。福島の子どもたちを上田に招くイベントでは参加者から「支援団体が障がい者施設とは思わなかった。温かく迎えてもらってうれしかった」と感謝されたとし「最大の支援者は障がい者。みんなが元気でがんばっていることが被災した人への励ましになる」と語りかけた。「ハード面の復興から、これからは心と心の温かい交流がある『福光』が大切。利他の精神で小さなことでも、いまやれることで被災者のために尽くしていきたい」と話した。

利用者や丸子修学館高校生による詩の朗読、地域住民の体験発表などもあった。

「0円弁当」「0円スーパー」

上田のまるこ福祉会 食事や50種類以上の食料品提供

上田市長瀬の社会福祉法人まるこ福祉会（柳澤正敏理事長）は、このほど、コロナ禍で生活に困難さを感じている人などに食事や食料品を渡す「0円弁当」「0円スーパー」の取り組みを初めて行った。

来場者に明るく対応するスタッフら

黒毛和牛の焼肉弁当70食とうな重30食は事前に電話で予約を受け付け。同法人のホールには県内外の協賛企業14社が提供した米や野菜、果物、菓子など50種以上の食料品をずらりと並べた。

弁当は地元の農家が提供した米を使用し、同法人のパン工房ぐらんまるしぇで調理。訪れた人は必要な食料品を選び、袋いっぱいに詰めて持ち帰った。

同法人は2018年からこどもレストランを開設しており、新型コロナの影響で職を失ったり収入が減少して生活に困窮しているひとり親世帯や独居高齢者、外国籍住民ら支援が必要な人は多いと判断。チラシを公共施設の窓口に置いてもらったり、同法人が運営する障害福祉サービス事業所の利用者が地元の住宅に手配りして周知した。

この日は115人が来場。3歳の長女を連れて訪れた市内の30代女性は家族6人分の弁当とレトルトカレー、菓子パン、白菜などを受け取り「（コロナ禍で）外食もできず、閉塞感がある。弁当はとてもありがたく、今夜は明るい気持ちで夕食を楽しめます」と感謝した。

丸子修学館高校と上田高校の生徒5人がボランティアで運営に参加。丸子修学館高校の瀧澤七帆さんは児童福祉司を目指しているといい「皆さんの笑顔を見ると、本当に大切な活動なんだと思う。自分が目指す将来に少しでも近づきたいとボランティア活動をさせていただいています」と話していた。

をつなぐ

建設標

創業支援 子ども育てる思い

近年、創業の支援に力を入れている。創業支援には、経営の各分野にわたる幅広い知識が要る。また、創業者の置かれている状況はさまざまで、生活との関連で創業を考えるためには、支援する側の、社会での一定の経験も欠かせない。創業支援は、経営支援のなかでも、特に長年の経験が必要な分野である。

創業は、新たな企業の誕生であり、企業の出生ともいえる。それだけに、真摯な思いで、真剣に取り組んでいる。創業者の今後の生活を左右するものであるだけに、真剣に対応するのは当然のことといえる。

新型コロナウイルス禍での創業支援は、従来にも増して慎重な対応が求められる。市場の変化や顧客の動向を注視し、創業の内容を考える。創業者に寄り添い、一歩踏み込んだ支援を心がけている。

これまでに私が支援した創業は170を超えている。次は200を目指し、一歩ずつ進みたい。知識と経験を生かし、創業者を支援したい。創業を支援する思いは、子どもを育てる思いに近い。これからも、創業支援の専門家としての実績を重ね、若い人達との関わりで、年齢に負けない活力を維持したい。

上田市　今井　裕
（中小企業診断士・70）

尽くそうとする精神に感謝

「0円スーパー」、0円食堂」を開店し、百食余の黒毛和牛の焼き肉弁当とうな重、お米や野菜などを提供し、2時間で終了しました。ある女性は、「コロナで職を失い、食べ物も満足に買えませんでした。大助かりでした」と語ってくれました。

コロナ禍での生活困窮者を支援する目的で企画しましたが、どうやって必要とする人を見つけるかが課題でした。そこで、事業所に通所している障害者と職員が各家庭を訪問してチラシを配布しました。民生委員や趣旨に賛同した高校生5人もボランティアとして参加してくれました。さらに、地域の農家はお米を、21社に及ぶ県内外の業者からは食材が届けられました。

食材を持ち帰ったお年寄りは、その半分を仲間に配られたそうで、翌日、お礼にと古着を届けてくれました。分福の心とは、今困っている人に寄り添い行動する心であり、その広がりが地域住民の心を耕す肥沃な土壌となることを教えていただきました。人間の心の温かさと美しさ、そして他人に尽くそうとする精神の崇高さに感謝です。

松本市　小室　邦夫
（社会福祉法人理事・67）

実り祈りながら編む麻ひも

ようやく伸び始めたサヤエンドウに支柱を立てた。ある程度の間隔で、プラスチック製の棒を立て麻ひもでしばる。あとは、横に斜めにと麻ひもで荒く編み、稲わらとキクイモの茎を使い、ツルが少しでも真っすぐ伸びるように誘引してやる。

これからの季節はとても忙しいのだが、キュウリやインゲンなどの誘引は、ひたすら麻ひもを使って編むのが、私のひそかな楽しみである。どうか今年もたくさんの実りがありますようにと祈りながら。

麻ひもは、昨年使ったものに熱湯をかけ、殺菌、保存しておいたものを優先して使用する。毎年、収穫が終わって支柱を外す時、ひもをできる限り長く残すように心がけているが、ほどくのが面倒な部分は、はさみで切り捨て、そのまま土に戻している。

先日、使用後に微生物の働きで分解される「ひも」が開発されたという記事を読んだ。大いに気になるところである。

長野市　小林　早苗
（主婦・71）

2021年（令和3年）5月29日 土曜日　信濃毎日新聞

上田発 子ども食堂へ食材を

まるこ福祉会 松本のNPOと連携し保管拠点

東信初「互いに支え合う社会に」

上田市長瀬のまるこ福祉会は、NPO法人ホットライン信州（松本市）と連携、同法人の東信地方の拠点として各地の子ども食堂に配る食材の保管などを始めた。食材は同会が月1回開く子ども食堂でも活用。東信地方から同法人に寄せられる悩み相談には、同会の介護福祉士や保育士らが対応する。

まるこ福祉会で保管している食材と小室さん

ホットライン信州は、県内95カ所の子ども食堂とネットワークをつくり、寄付などで全国から集まった食材を各地に配布。青木正照専務理事によると、これまでの県内の物流拠点は長野市や松本市など計5カ所で、東信地方にはなく、それぞれの子ども食堂に直接届けたり、取りに来てもらったりしていた。

まるこ福祉会は2月、同法人から拠点として場所を借りたいと相談を受けた。その後、ネットワークに参加。3月に食材を無料で配った際には牛肉を提供された。

同会はスーパーが撤退した建物を改装して利用。残された大型の冷蔵庫や冷凍庫を活用し、生鮮品も保管できる。本格始動した26日には大手飲料メーカーから提供された乳酸菌飲料約2万6千本が届き、早速受け取りに来た団体もあった。

介護や子育て、経済的困窮といった暮らしの悩み相談にも応じ、行政への橋渡しや助言をする。小室邦夫理事によると、同会も子ども食堂利用者の相談に乗る体制づくりを検討していた。「人間関係が希薄になっている。本当に困っている人に食材をどう届けるかが課題。互いに支え合う社会にしていきたい」と話している。

戦争の悲惨さ 96歳訴え

上田で 講演など大学生ら企画

戦後76年

広島に原子爆弾が投下されて76年となった6日、上田市の「きらり ホール」で、戦争体験者の講演や原爆の被害を伝える紙芝居などが行われ、参加者は平和の尊さについて考えた。

戦争の恐ろしさを伝えていこうと長野大学の学生らでつくる実行委員会と、社会福祉法人「まるこ福祉会」が企画。地域住民や同会が運営する障害者施設の利用者ら約90人が参加した。

講演した上田市上丸子の柳沢正雄さん(96)は15歳の時に満州(現中国東北部)に渡り、学校に行きながら親戚の会社で事務を手伝った。終戦後はシベリアに移送され、十分な食料も与えられず、過酷な労働も経験した。柳沢さんは「朝起きると息が止まっていた戦友もいた。戦争の悲惨さを繰り返してはいけない」と訴えた。

過酷な戦争体験について講演する柳沢さん(6日、上田市で)

また、戦争に関する本を読み、平和への思いをつづった作文を書いた同市立丸子中央小3年の西ノ原光さん(8)は「お父さんの出征で家族がばらばらになったことを知った。戦争はもうやらないでほしい」と朗読した。

実行委員長の同大2年藤多梨里香さん(19)は「地域の人から歴史を受け継ぎ、戦争の恐ろしさを学んでいきたい」と話した。

まるこ福祉会（上田市）

草間 優一さん（22）

知りたい！信州の会社

気を抜かず介助「人のため」実感

上田市長瀬の社会福祉法人まるこ福祉会に4月に就職し、特別養護老人ホーム「大樹」で働く草間優一さん(22)は、同僚と共に利用者の食事や排せつの介助などに当たっている。「感謝の言葉を掛けてもらえた時、人のためになっていると実感できる」と話す。

同市丸子地域出身。福祉に興味を持ったのは小学生の頃だ。当時、一緒に暮らす祖母を介助する母の姿を見て、「福祉は人の役に立てる仕事だ」と感じた。高校卒業後、千葉商科大（千葉県市川市）で経済を学んだが、就職先選びで福祉への関心が再燃。Uターンを決めた。

最初は先輩職員のシフトに一緒に入れてもらい、利用者をベッドから車椅子に移す方法など基本的な技術を教わった。今では比較的自立している人の入浴介助も任される。物を取ろうとして車椅子から落ちないか、足の不自由な人が歩行中に転ばないか、と心配は尽きない。利用者の安全を守るため、「一瞬たりとも気が抜けない」と表情を引き締める。

介護の現場は「思っていた以上に大変だった」。細やかに気配りする同僚のベテラン女性たちは頼もしく、憧れる。介護福祉士の資格を取ろうと勉強も始めた。「職員や利用者に気を配り、広い視野を持って働けるようになりたい」と意気込む。

草間さんのスケジュール帳

午後11時半	就寝
午後8時半	スマホでゲームを楽しむ
午後4時半	帰宅、夕食、入浴
午後4時	終業
午後3時	おやつ配り食事介助、居室の掃除など
午後1時	利用者のケアプランに1日の出来事を記入
正午	昼食、休憩
午前8時	利用者の起床の手伝い、朝食の用意、食事の介助
午前7時	始業
午前6時半	車で出勤
午前5時50分	起床、朝食

就活アドバイス　自分の目で確かめて

就活は早くから動き出すことが大切だと思います。興味本位でもいいので、自分がどういう業界に関心があるかを考え、調べてみてください。私は出身地の上田市や近隣の自治体で就職先を探しました。都内で県内企業の合同説明会に参加したり、上田の公共職業安定所（ハローワーク）に相談し求人情報を探したりしました。

インターネットで多くの情報を集められますが、やはり自分の目で確かめることが大事。インターンシップ（就業体験）に参加するのも一つの手段です。まるこ福祉会を見学した時、職員と話す利用者が自宅で過ごしているかのようにほのぼのとした様子でした。アットホームな環境で働きたいと思い、就職を決めました。

まるこ福祉会　地域に開き 利用者の生涯に寄り添う

2004年に当時の小県郡丸子町（現上田市）社会福祉協議会が設立した。現在は上田市丸子地域で障害者グループホーム「ホームとんぼ」、就労支援などを行う障害福祉サービス事業所の「きらり」と「とんぼハウス」、特別養護老人ホーム「大樹」を運営する。障害者の生涯に寄り添うことを目指し、住まいや就労の場を提供、老後を支えてみとりまで行えるようにしている。

地域に開かれた運営を重視し、施設を利用する障害者や高齢者と住民との交流を大切にしている。法人本部や、「きらり」がある同市長瀬の拠点に併設したパン販売・食事提供の「ぐらんまるしぇ」では、住民がボランティアがサロンを開き、利用者と来客らが会話を楽しむ。拠点施設内のホールは住民の講座などに貸し出している。

地域福祉の向上にも努める。子どもの居場所として子ども食堂を毎月開催。丸子修学館高校（上田市）の生徒や長野大（同）の学生の職場体験を受け入れ、地域福祉の担い手の育成にも取り組む。職員の資格取得を後押しするとともに、職場で活発に意見交換できる環境を整え、人材育成を図っている。

住所	上田市長瀬2865-3
売上高	3億8130万円（2021年3月期）
純利益	非公表
従業員	76人
採用	
21年春実績	大1
22年春計画	若干名
インターン	応相談
連絡先	代表☎0268-71-6263

うちのイチオシ　経験問わず 資格取得を支援

障害者福祉や介護などの事業を手掛けており、幅広い業務を経験できます。職員と面談し、希望する仕事や特性を聞く場を設けています。障害者に関わる職場から特別養護老人ホームに異動した人もいます。年に1回、全職員が参加する研修では、法人の理念や歴史を学び、それぞれの課題や目標について話し合ってもらいます。

「福祉の世界で自分を磨きたい」と信念を持っていれば、経験は問いません。介護福祉士などの資格取得も支援しています。

（聖事　小宮邦夫さん）

まるこ福祉会 きらりホール

8.6平和の心 メッセージコンサート

戦争体験者の講演や各世代が発表

「戦争の悲惨さ繰り返してはならない」

平和な世界を目指し、高校生や大学生による実行委員会が「8・6平和の心　メッセージコンサート」を社会福祉法人・まるこ福祉会のきらりホールで開いた。戦争体験者の講演や児童による平和を願う作文の発表など、各世代が発表した。

戦争体験を語る柳澤さん

広島原爆の紙芝居

作文を発表する西ノ原さん

長野大学の学生や地元の高校生で実行委員会をつくり、小中学生、まるこ福祉会の利用者らも参加。藤多梨里香実行委員長（長野大学2年）は「広島に原爆が投下されたのは昭和20年の本日、8月6日。世界で最初に投下された。戦争は人の命を一瞬にして奪う最悪の凶器です。その後、原爆の被害者は56万人にのぼったと聞く。第二次世界大戦では日本でも310万人が犠牲者となった。戦争体験を聞くなどして命の大切さ、人権の尊さ、家族や友だちと尊重しあい、支え合い、誰もが安心して生きて行かれる社会をつくりたい」とあいさつ。

広島原爆の紙芝居を連合婦人会の池田佐代子さんが行い、瞬時に破壊されて火災が起きた広島市の様子、崩れた建物の下敷きになって避難できずにそのまま火災で亡くなった様子などを伝えた。

続いて、丸子中央小3年生の西ノ原光さんが「戦争はもうやらないでほしい」と作文を朗読。高校生やまるこ福祉会の利用者も、平和とは何かを考えた作文、フードバンクの活動を通した学び、事故遭ってもがんばっている様子などを発表した。

あいさつする藤多実行委員長と会場

戦争体験は柳澤正雄さん（96）が、昭和15年に満州に渡って19歳で徴兵されて陸軍に入隊、シベリア抑留の体験を語った。貨車に積み込まれて移動し、作業をさせられ、食べるものがわずかで、凍傷もひどく、多くの仲間が死亡し、1000人の部隊が80人になったことを語り「戦争の悲惨さを繰り返してはならない」とした。

ほかダンスと合唱も行い、盛り上がった。

信濃毎日新聞 2021年（令和3年）9月17日 金曜日

東信

相談窓口での対応について話し合う橋詰さん（左）と小室さん（中央）たち

生活困窮・介護・子育て…

悩み相談 上田に窓口

まるこ福祉会とNPO法人ホットライン信州

上田市長瀬のまるこ福祉会は、NPO法人ホットライン信州（松本市）と連携し、新型コロナウイルス下で生活に困っている人や介護、子育てに悩んでいる人向けの相談窓口を開設した。同市生田で運営する障害福祉サービス事業所「とんぼハウス」に専用の部屋を用意。県内で8カ所目、東信地方では初めてといい、介護福祉士や元教員らが対応する。

同会が毎月開く子ども食堂ではかねて来場者から相談があり、職員が対応してきた。小室邦夫理事によると、コロナ下で食事や食料品を配った際に「これで数日間は生きていける」との声を聞くこともあり、気軽に相談できる場を設けることにした。

同会の評議員で児童福祉などに長年取り組んできた橋詰邦男さん（78）が中心となって対応する。橋詰さんは「生きる勇気や希望を持てるように支えたい」。小室理事は「親身に寄り添い、解決へ道筋を立てられるようにしたい」と話している。

平日午前8時半～午後5時半。電話（☎0268・43・2567）でも対応する。

丸子LCなど

「歳末の助け合い」生活困窮者支援

「0円スーパー・0円食堂」に400人

米や野菜など無料配布、炊き出しも

多くの人が訪れた0円スーパー・0円食堂

上田市の丸子ライオンズクラブ（柳澤正敏会長）はこのほど、歳末にコロナ禍で生活が大変な人々を支援しようと「0円スーパー・0円食堂」を上田市長瀬市民センターで行った。会場には400人以上の人が訪れた。

上田市社協、NPOホットライン信州、上田市連合婦人会、まるこ福祉会との共同開催。

会場には、大きな袋やマイバックを持参した人たちがあふれ、長蛇の列ができるほどだった。米や野菜、果物、キノコ、缶詰、弁当などの食品やトイレットペーパーなどの日用品を無料配布した。日赤奉仕団による炊き出しで温かい食事の振る舞い、事前予約で灯油の提供もあった。

柳澤会長（71）は「県内外の企業30数社や地域住民から寄贈をいただき大変ありがたい。本当に困っている人に届けることができた」。まるこ福祉会の小室邦夫さん（68）は「歳末の助け合いで、地域住民や高校生らもスタッフとして参加してくれた。支援は行政だけでは難しい。横のつながりで、特に独居老人や外国籍の人、母子家庭や学生など生活困窮者を中心に声掛けをした」と話した。

訪れた人からは「生活がきつい。普段は食費を切り詰めている。1カ月分の食糧をいただいた。感謝でいっぱい」などの声があった。

論をつなぐ

建設標

「さわやかロード」思い今も

2020年度の不登校の実態調査で、県内も依然として多いことが示された。毎朝、通勤する交差点の脇に、「さわやかロード」と書かれた掲示板がある。その横で、地域の方が長年、交通安全とあいさつ運動の励行のため、寒い冬も暑い夏も一年中立っている。先日、その初老の方にお礼を述べた時、この「さわやかロード」の意味を教えてもらった。

十数年前、不登校の生徒が多くて大変だった学校の生徒たちが集まって、不登校の仲間を少なくしようとスローガンを考えた。それが、「さわやかロード」だという。「さ」は、3年間のさ。「わ」は、笑ってのわ。「や」は、休まずのや。「か」は、通うのか。ロードは通学路の道のこと。つまり、「3年間、笑って、休まず、通う、道」を目指して命名された。

現在も見守りを続けるその方は、「だから、私たちも、この生徒たちの心を継いで、毎日、子どもたちと楽しくあいさつを交わしているのです」と続けた。子どもたちの素直な心が今も地域の中にずっと根付いているから、子どもたちは、あいさつができ、明るい学校になっているのだと教えられた。

松本市　小室　邦夫
（社会福祉法人理事・68）

愛するお茶 理解を深めたい

「三歩戻ってもお茶は飲んでいくもの」。私の家ではそう先代から伝えられ、現代もその風習は守られている。もちろん、三度の食事にお茶はつきもの、いつもデイサービスに着くと早々にお茶を入れてくれる。何とも落ち着いた気分になる。私たちの日常生活とお茶との関わりは非常に深い。

そんなお茶について、お茶博士、大森正司さんが本紙に連載されていた。その中で、お茶の殺菌効果は新型コロナウイルスに対しても、一定の効果があると発表している方がいることを紹介していた。

奈良や京都の大学では、お茶のカテキンを加えるとコロナウイルスの活性が弱められたという研究結果を発表した。多めのお茶を熱湯で蒸らし、冷やすと渋いお茶ができ、カテキンの殺菌効果を高められるという。

また、このお茶でうがいをするとより効果があるという。食後に3回、うがいを繰り返すことで、コロナ対策だけでなく、虫歯予防と口臭の抑制にもつながるそうだ。もっともっとお茶への理解を深め、愛用したい。

飯田市　篠田　邦好
（無職・98）

どんど焼き 参加続けて10年

第1子が小学校に入学し、どんど焼きのお誘いがきました。最初は、様子も分からず、手ぶらで行きました。すると、周りの方々が何やらアルミホイルに包んで焼いています。長女が、「みんなと同じにやりたい」と言うので、「来年はやろうね」と1年目が終わりました。

2年目、どうすればいいのかなと思っていたら、学校のお便りにお餅の作り方を載せてくださったのです。アルミホイルにバターを塗るとくっつかないとありました。その通りにやり続けてはや10年になります。

今年は小三の第3子がお餅を担当しましたが、「風邪もひかず、熱も出さず、元気いっぱいに過ごせているのは、一生懸命子どもたちが包んでくれたお餅を焼いて食べているからだね」という話になりました。そして、昔からある行事は先人の知恵であり、意味があって、引き継いでいくことこそがやるべきことなんだなぁと開催してくださることに感謝した日でした。

長野市　古田　圭子
（会社員・46）

フードバンクin上田高校

上田のまるこ福祉会に食料品寄贈

缶詰やレトルト食品など340品

食料を寄贈した「フードバンクin上田高校」のチーム生徒ら

上田高校1、2年の有志によるプロジェクトチーム「フードバンクin上田高校」（今吉七海代表、8人）はこのほど、上田市長瀬の社会福祉法人まるこ福祉会に、集めた食料品を寄贈した。同会で「まごころ贈呈式」が開かれた。

贈呈式には、同校2年の今吉代表ら生徒5人と、竹内光礼教諭が参加。缶詰やレトルト食品、調味料など約340品を提供した。生徒は同会の実施する「0円食堂」にボランティアで参加するなど、以前から交流があったという。

まるこ福祉会の柳澤正敏理事長は「大事な食べ物を届けて頂いた。暗い世の中、明るい光が照らしてくれた。皆で楽しみながらいただきたい」と話し、利用者ら約40人と一緒に「ふるさと」を合唱。生徒に感謝の気持ちを伝えた。

プロジェクトチームは、昨年12月の保護者懇談の期間中にチラシやメールの連絡網を活用。約2週間で生徒や保護者から多くの寄付が寄せられ、今回の寄贈につなげることができた。新型コロナの影響で高校の休業が続いたため、活動は困難だったという。

今吉さんは「寄付を快く引き受けていただき、この日を迎えることができた。これからも会と生徒が、一緒に何かできるといい」と話した。

まるこ福祉会は今後、寄贈された食料品を、子ども食堂やイベント等で活用していくほか、利用者に提供するおやつの調理に用いていきたいとしている。

「フードバンクin上田高校」は、「支援が届きにくい相対的貧困に着眼し、1人でも多くの人の役に立ちたい」と、昨年2月に発足した。校内へのポスター掲示や、昇降口に箱を設置するなどして、寄付を呼びかけている。昨年4月には「上田フードドライブ」に食料品を寄贈した。

読売新聞　2022年(令和4年)3月12日(土曜日)

高校生 被災体験伝える

震災の心 バトン

上田で催し、避難訓練

▲ 自身の震災体験を語る中沢さん(11日、上田市で)

上田市長瀬の社会福祉法人「まるこ福祉会」で11日、東日本大震災の経験を伝えるイベントと、避難訓練が行われた。イベントは上田高校の生徒有志が企画し、施設利用者や地元住民ら約80人が参加した。

「黙とうささげ追悼を」

「あれから11年、震災の心、バトンリレー」と題したイベントでは、福島県いわき市で被災した上田高校1年の中沢拓海さん(16)が自身の体験を語った。当時、中沢さんは5歳の幼稚園児で、両親と兄弟3人の計5人で暮らしていたが、家屋の一部が壊れるなどの被害を受けた。震災後、一家は放射能の影響と余震への不安から上田市に引っ越したが、差別も経験したといい、「当時の日本人は災害が起きた後の『アフターケア』に慣れておらず、差別につながったと思う」と指摘した。

また、「忘れないでほしいのは、(3月11日に)1分間の黙とうをささげて被災者を追悼すること。それを毎年続けるだけで、次の震災への対応が確実に変わると思う」と語った。

まるこ福祉会の小室邦夫理事は「上田高校の生徒たちが震災を受け止め、教訓を後世に生かしていこうと話をしてくれた。その気持ちが感じ取れるイベントになった」と話した。

テープカットする園児や利用者ら

上田の福祉事業所 ツリーハウスや滑り台設置

子どももお年寄りも 交流の場に

トレーラーハウスは予約制で利用可能

上田市長瀬のまるこ福祉会は20日、同市生田の障害福祉サービス事業所「とんぼハウス」に設けた「とんぼいやしの空間」のオープニングセレモニーを開いた。ツリーハウスや滑り台、パーゴラ（日陰棚）などを新設。地域の子どもや高齢者らに使ってもらい、交流を深めたいという。

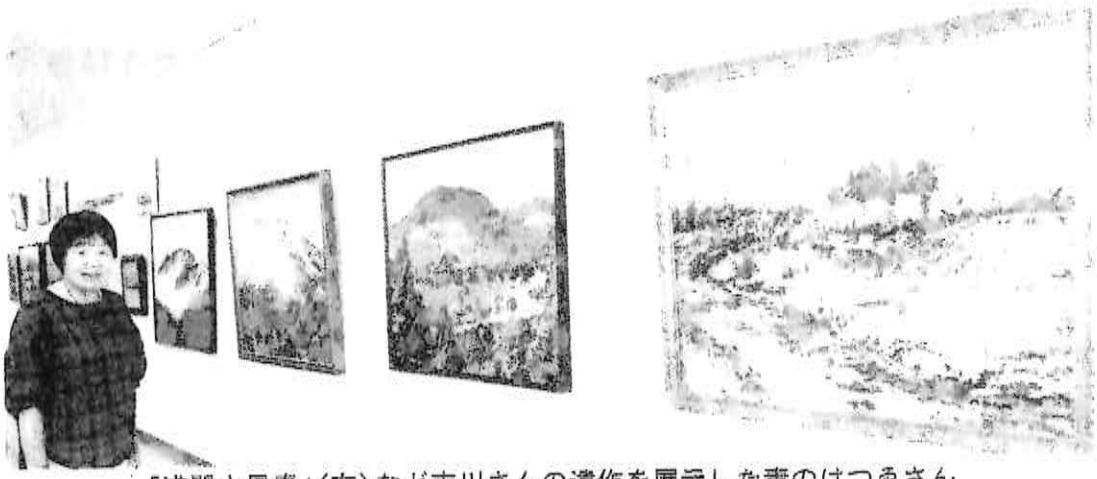
昨年11月に着工、1月に完成した。ツリーハウスとパーゴラは県産木材を使用。県森林づくり県民税を活用した。施設利用者らが使っていたトレーラーハウスを開放し、予約制で地域の人たちの集まりにも役立ててもらう予定だ。

セレモニーには地元の自治会長や近くの依田保育園の園児らが参加。テープカットをして祝った。同福祉会の柳沢正敏理事長（71）は「利用した人が幸せになってくれれば」とあいさつした。

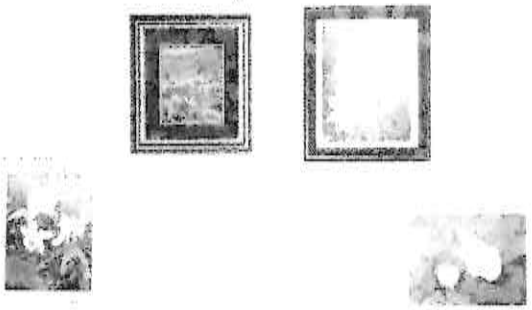
同保育園の遠山利絵園長によると、とんぼハウスは園児が散歩でよく通る場所にある。「自然には恵まれているけれど遊べる場所がなかった。いつでも遊べると聞き、うれしい」と話していた。

東御の市川さん油彩画遺作展

まるこ福祉会ギャラリー



「浅間山早春」(右)など市川さんの遺作を展示した妻のはつゑさん



庭に咲くバラなどを描いた小品も並ぶ

東御市和の故市川正臣さんが情熱を傾けた油彩画の遺作展は上田市長瀬、社会福祉法人まるこ福祉会のきらり市民ギャラリーで開いている。

県展に入選した「浅間山絶景」など100号5点、50号11点のほか自宅の庭で丹精したバラやカサブランカを描いた小品など49点を一堂に展示した。

市川さんは県内の小中学校で教鞭を執り、長門小学校長など務めた。定年退職後の63歳で生涯学習講座「やさしい絵画」に入会して油彩画を始め、風景を得意とした。特に佐久市の生家から仰ぎ見た浅間山には思い入れが強く、雪の山容を描いた作品は多い。病気と向き合いながら絵筆を執り、昨年11月に73歳で他界した。

妻のはつゑさんによると亡くなるまでの10年間で138作品を仕上げたという。市川さんは仲間と上高地や妙高などにスケッチに行った後は必ずはつゑさんを誘って再訪したといい「川や山があり、生活感がある絵を描きたいと言っていた。どの絵もどこから見た風景か分かり、思い出がいっぱいです」とはつゑさん。

「夫は物静かで優しく、穏やかな人だった。いろいろな方の後押しで、生前の夫の願いでもあった個展を開くことができ、わたしも前を見て進んでいけるような気がします」と話した。

8月31日まで。入場無料。展示時間は午前10時から午後4時。土、日曜日は休み。

歴史ある郷土の新聞

信州民報

2022年（令和４年）8月10日（水曜日

発行所 信州民報　日刊：日祝日の翌日及び第2・

〒386-0041 長野県上田市秋和間屋505 TEL 0268-22-7355 FAX

購読料 1ヵ月1,200円

信用・実績 ひな人形・五月人形・盆提灯

人形会館 松葉彌（まつはや）

上田市中央3-6-3（原町）

0268(25)3355(代)

今日は何の日

★道の日

★宿の日

や(8)ど(10)

★健康ハートの日

ハー(8)ト(10)

★沖縄都市モノレール

戦後初の鉄道・那覇空港～首里が開業。2003年

高校生が小学生に伝える ヒロシマ原爆と命の尊さ

上田市・まるこ福祉会

広島に原爆が投下されて77年目の8月6日、上田市長瀬の（福）まるこ福祉会きらりホールで、平和イベント「高校生がこどもに伝えるヒロシマ原爆と命の尊さ」を開催。ちょうど月1回の子ども食堂の開催日で、子どもや保護者・スタッフら約50人が集まった。

絵本『ひろしまのピカ』を読み聞かせる中澤さん

会場には子どもらも多く集った

同福祉会の平和イベントは平成31年から始まり、今回で4回目。高校生らが主となり、「詩の朗読コンサート」などを開催しており、子どもたちから高齢者までが平和な世界・支え合う社会の大切さに心を一つにしている。

この日は上田高校2年の中澤拓海さん（16、市内本郷）が、連作『原爆の図』の作者・丸木俊作の絵本『ひろしまのピカ』を読み聞かせた。幸せな一家を襲った、人類初の原子爆弾と広島市街の地獄絵図のすさまじさ。「ピカは ひとが落とさにゃ落ちてこん」の、最後の言葉に息を呑む。

次いで中澤さんは「ヒロシマ原爆の遺恨と平和の心」と題し、意見発表。「ロシアも米日も核兵器はだめと話し合っているようだが、核が脅しになっている」とし、「日本は核は使用しないというリーダー的役割を果たし、核兵器禁止を」などと訴えた。

発表を終えて、参加者らからは「原爆の恐ろしさが伝わってきた。戦争は人を不幸にしかしない戦争が起きてはいけない」「8月6日を忘れてはいけないと改めて思った」などの感想が。中澤さんは、取材に「子どもたちが原爆にもっと関心を持ってくれればいい」とし、「語り伝えは続けていきたい」と話した。

同福祉会理事の小室邦夫さんは「核兵器の恐ろしさを、子どもたちに受け継いでいってもらわなければいけない。先生でなく、若い人が伝えることが大事。その方が子どもたちにも伝わりやすい」と話していた。

上田市立上田図書館で行った、オン

国で初だ。

電子図書館サイト「デジとしょ信州」（shinshu-kyodo-library.overdrive.com）は全てすることで、単独の自治体では難しかったサービスが実現した。

利用者は同サイトで読みたい電子書籍を選び、借りることで、自身のPC・スマートフォン・タブレットで借りた書籍が読める。利用には、ながまた今後は、各地域で作成されている歴史や文化・自然など、オリジナルの資料を電子化し、活用することも期待される。さらに同日は県立長野図書館が独自で導入し、学術書・専門書を中心とした電子書籍を提供する

●ご購読申し込み・情報なんでも「信州民報」 TEL0268(22)7355 FAX0268(22)6866 ●E-mai

上田市

まるこ福祉会「こどもレストラン」

50回記念セレモニーに120人参加

上田市長瀬の社会福祉法人まるこ福祉会はこのほど、同福祉会きらりホールで「こどもレストラン・きらっと」50回記念セレモニーを開催。ボランティアら約120人が参加し、意見発表や歌とダンスの披露などをした。

50回記念セレモニーであいさつする栁澤正敏理事長

意見発表したボランティアの成澤乃彩さん

平成30年8月4日からスタートした同こどもレストランは、この10月1日で50回となる。この間、5721人がレストランを利用しているという。

この日はコロナ対策をしっかり行い、「こどもレストランで学んだこと」として高校生や大学生ら3人が意見発表した。

そのうちの一人・成澤乃彩さん（信大3年）は、丸子修学館高時代に自ら「ボランティアをしたい」と参加。「こどもレストランがどれだけ大事かわかった」とし、「いろいろな世代と交流ができ、学校では経験できないことがいろいろ経験できた。これからも参加させていただきたい」と伝えた。

そして栁澤正敏理事長から22人に感謝状が贈られ、「皆さんのお陰で最高の料理で、音楽で、芸術でもてなしてこられた。交流をしていただき心から感謝している」と思いを伝え、職員や来てくれる子どもたちにも「50回ありがとう。心豊かで、健康で100回を目指したい。歴史をつくりたい。仲良く団結していこう」と伝えた。

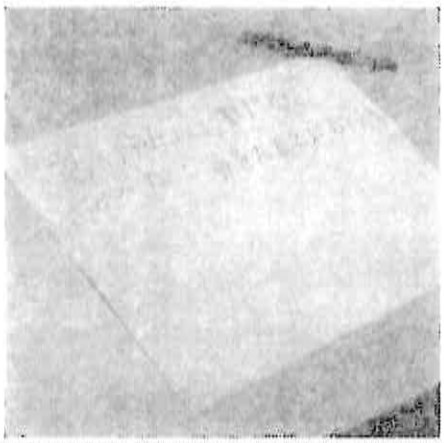
丸子福祉会「3・11災害から学ぶこと」

ボラ活動する上田高校2年有志が企画！

『人を思いやる心の大切さ』伝える

上田市長瀬の（福）丸子福祉会きらりホールで、学ぶこと～東日本大震災の教訓から～』が開かれた。イベントは、同所でボランティア活動を続ける「フードバンクin上田高校」2年生メンバーの武井遥香さん、辰野芽唯さん、長谷のぞみさん、中澤拓海さんが企画したもの。

震災について伝える（写真右から）辰野さん、武井さん、中澤さん、長谷さん



紙に書いた子どもたちの意見は『行動に移す』

この日は月1回、同所が開く子ども食堂55回目の開催日で、子どもたちや保護者、スタッフら約50人が集まった。「災害は『知ること』『考えること』『行動すること』の3つが大事」とし、辰野さんは「地震が起きたら、津波が来たら、原発事故が起きたらどうするか。自分に置き換えて考えてみよう」と問いかける。

子どもらは大人と一緒に机ごとに相談し、思いつく考えを紙に書いていく。内容は「机の下にもぐる」「高いところに逃げる」「地下に潜る」などだ。そして長谷さんが被災者に対して何ができるかを問いかけると、「励ます」「必要なものを届ける」などと答える子どもたち。

最後に中澤さんが5歳の時、福島県いわき市で被災して父の実家・上田市に避難した経験を基に、意見発表。「3月11日には被災者のために黙とうを捧げてほしい」と語りかけ、震災に対して「知り、考え、行動」し、人を思いやる心の大切さを、子どもたちにも大人たちにも分かりやすく伝えた。

信州民報　2023年（令和５年）５月２３日（火曜日）

上田市

歌手・佐々木秀実さんボラコンサート

まるこ福祉会が企画 150人が楽しむ！

「上田の魅力を発信していく」

上田市長瀬の社会福祉法人まるこ福祉会きらりホールで19日、市内菅平高原出身の歌手・佐々木秀実さん（43）のボランティアコンサートが開かれた。

翌20日の信州国際音楽村での佐々木さんの公演を前に、同福祉会の栁澤正敏理事長が要請して実現したもの。佐々木さんは、取材に「歌でボランティアのできる機会は少ない。コロナも落ち着いたので生の音楽を聴いてほしいし、トークと歌で元気になってもらいたい」と話す。

黒のドレス姿で登場した佐々木さんは、歌手になるまでの経緯や歌謡界の話を、おもしろおかしく話しながら『テネシーワルツ』からスタート。秦野正博さん（立科町）のピアノ、近藤聡さん（東御市）のヴァイオリンと合わせて、まずはジャズナンバーで盛り上がる。

また「目をとじて、母への思いを巡らせながら聞いてほしい」と、ピアノの弾き語りで『ヨイトマケの唄』を披露。つぶやくような、感情のこもった声が場内を包んだ。

『愛、燦燦』を弾き語り、佐々木さんは「これからも長野県を拠点とし、上田の魅力を発信していく」と宣言した。

ラストに『愛の讃歌』を熱唱し、アンコールでは『ろくでなし』とシャンソン歌手としてデビューした、佐々木さんらしいナンバーに会場もノリ

笑顔で熱唱する佐々木さん

会場には約150人が参加した

福島応援「魚食べる会」

上田 メヒカリの唐揚げなど

2011年3月の東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故の影響で漁獲量が落ち込んだ福島県の漁業を応援しようと、上田市の社会福祉法人「まるこ福祉会」（柳沢正敏理事長）は9月29日、「がんばれ福島！ 福島の魚を食べる会」を開催した。処理水放出で中国が日本産水産物の輸入を停止するなか、同福祉会では約1か月かけて準備を進めた。

用意された刺し身や焼き魚、唐揚げ、ホッキ飯、あら汁など

魚を食べる会は同福祉会の施設で行われ、趣旨に賛同した1都9県の135人が参加。厨房で調理されたヒラメとマグロの刺し身、ヤナギカレイの焼き魚、メヒカリの唐揚げ、ホッキ貝を使った炊き込みご飯「ホッキ飯」、あら汁などを試食した。参加した土屋陽一・上田市長は「メヒカリは初めて食べたが、歯ごたえがありおいしかった。上田市としても三陸・常磐の海産物を応援したい」と話した。井出庸生・衆院議員も「福島の海産物を応援し、復興が進むことを祈りたい」と強調した。

「福島の魚を食べる会」に参加した人たち（9月29日、上田市で）

福島県いわき市から駆けつけた水産物卸売会社「いわき魚類」の金成裕司・常務取締役（営業統括）は「福島県内の漁港の水揚げ量はまだ、震災前の2～4割までしか戻っていない」とし、「きょうのような会の継続をぜひお願いしたい」と訴えた。

同福祉会は震災発生直後から福島県に支援物資を届ける活動などを続けており、福島の魚を食べる会はその一環。あいさつに立った柳沢理事長は「積極的に福島の魚を食べ、全国で需要が広がるようにしていきたい。みんなで力を合わせ、『がんばれ福島』と応援しましょう」と呼びかけ、参加者から大きな拍手を浴びた。

肉まん作り 子供たち挑む

上田・まるこ福祉会

子供たちに肉まん作りを指導する大井さん(右)(6日、上田市で)

上田市の社会福祉法人・まるこ福祉会で6日、新年初の「こどもレストラン・きらっと」が開かれ、26人の子供たちがまんじゅう作りにチャレンジした。

この日の参加者は子供と保護者、ボランティアの高校・大学生、地域住民、福祉会職員ら計140人以上。子供たちは地元の主婦、大井まゆみさんのアドバイスを受けながら、主に肉まん作りに挑戦。まんじゅう生地をのばして神戸牛を使った具を包み、最後に形を整えた。

地域の高齢者が講師役となって子供たちに体験してもらう趣旨で行われ、あんまんとともに出来上がった肉まんは、各自作ったものを食事会で味わった。大井さんは「みな上手に出来た。肉まんの作り方は本場・中国の方から教わったので、ジューシーで柔らかく、特別な味わいです」と話した。

こどもレストランは2018年8月に始まり、毎月第1土曜日の恒例行事。食事会の前には伝統芸能の日本舞踊、滑稽な踊り「かっぽれ」の鑑賞会も開かれた。

上田市

まるこ福祉会「震災の心バトンリレー」

阪神淡路大震災29年の教訓を活かして

能登半島地震救援活動の様子を語る小山さん

突然の「地震」の報に身をかがめる参加者

炊き出しの昼食に手を伸ばす参加者

阪神淡路大震災から29年目の1月17日、上田市長瀬の（福）まるこ福祉会（柳澤正敏理事長）は、同会きらりホールで「1・17震災の心バトンリレー」を開催。利用者や地域住民ら約150人が集まり、震災への備えに心を新たにした。

同福祉会は、平成23（2011）年3月11日の東日本大震災の直後、柳澤理事長はじめ職員らが11トン車で被災地に支援物資を運んだ。以後も職員研修に行ったり被災地の物産を販売するなど、復興支援に取り組んできた。それ以後、バトンリレーは毎年の恒例事業となっている。

この日は「能登半島地震の被災体験」とし、同会職員の下村みゆきさん（56、腰越）が偶然遭遇した、能登半島地震体験を伝える。下村さんは家族11人で1月1日に石川県小松市に行っており、被災した恐怖の様子を「今でも不安で怖くなることがある」と話す。

続いて同じく同会職員の小山厚志さん（59、牛田）が、能登半島地震現場の輪島市へ1月8日、救援物資を持って行き大雪のなか15時間かけて駆け付けたこと。また阪神淡路大震災当時に丸子町職員だった小山さんが、給水タンク車を運んだ様子などを報告した。

さらに阪神淡路大震災を大阪で体験した近藤小枝子さん（85、中央）が、10年日記に記している記憶を辿りながら地震の瞬間や被災の様子を語る。そして近藤さんの子息でヴァイオリニスト・近藤聡さん（東御市）が『花は咲く』などを演奏し、被災地にエールを送った。

近藤さんの『いのちの歌』の演奏途中で突然、「地震発生」のアナウンスが鳴り、全員が身をかがめて身を守ってから第1駐車場へ避難。全員の安全を確認してから第2駐車場へ移動し、同法人施設の断水時・停電時の対応状況の説明を受けた。その後、参加者は炊き出しで昼食を行うなど、大震災の教訓を様々な方面から学んだ。

3559号　2月12日（月）
発行所　石油化学新聞社
本　社：東京都千代田区岩本町２丁目４番10号
電話03（5833）8840　FAX03（5833）8841
URL：https://www.sekiyukagaku.co.jp
E-mail：lpg@sekiyukagaku.co.jp
振替東京00180－6－37963
支社・局：札幌・仙台・名古屋・大阪・広島・福岡
２０２４年（令和６年）

プロパン・ブタンニュース

©石油化学新聞社2024年　（昭和30年6月8日第3種郵便物認可）　週刊・毎月曜日発行
購読料／年間39,600円（本体36,000円＋消費税3,600円）・6カ月19,800円（本体18,000円＋消費税1,800円）

施設の防災体制紹介

まるこ福祉会　災対バルク発電機　エナキスが導入支援

まるこ福祉会（上田市、柳澤正敏理事長）は1月17日、上田市の障害福祉サービス事業所「きらり」で、震災の教訓を学ぶイベント「震災の心バトンリレー」を行った。震災の記憶を伝えるとともに、災害時にガスや電気に加えて飲料水の確保や水洗トイレの稼働まで維持する施設の防災体制を紹介。近隣住民や併設の特別養護老人ホームへの入居者ら約150人が参加した。

能登半島地震や阪神・淡路大震災で被災地に行った職員や被災者が体験談を話した。職員の小山理恵氏は停電、断水、緊急時の排せつの困難さなど避難生活の実態を語った。その後、別の職員から防災設備を説明、避難訓練や炊き出しも行った。

柳澤正敏理事長

エナキスの支援で災対バルクと発電機を導入

まるこ福祉会は災害対策に力を入れており、運営する「きらり」は完成形と位置付ける。災害時に電力とガスを維持し、炊き出しも行え、業務用冷凍庫で食料も大量に備蓄。災害用井戸で飲料水を確保するほか水洗トイレも使えるようにした。

これらを下支えするのが、エナキス（本社・上田市、長瀬吉夫社長）の協力で導入した災害対策バルクシステムとLPガス発電機だ。2023年度のバルク補助金を活用し、1・T・Oの980㌔㌘LPガスバルク貯槽1基、デンヨーの非常用発電機を単相9・9㌔㍗機と三相12㌔㍗機の各1基を設置した。

停電時は45秒以内に自動で作動し、単相9・9㌔㍗機が事務所棟の照明、冷蔵庫、井戸給水ポンプ、衛生機器、事務機器などへ電力供給を維持。携帯電話の充電もできる。三相12㌔㍗機は施設内の食品保管用冷凍庫や調理機器の電力を賄う。発電のみの稼働させた場合は4日間の電力が維持でき、バルクにガス検が10口備わるため、炊き出しや暖房なども可能だ。

体制整備の背景には、柳澤理事長の強い思いがある。令和元年台風19号で被災し、障がいのある利用者と避難した経験から「一般の避難所は障がいを持つ方の受け入れが困難。障害を持つ方が避難生活をおくり、自由に排泄できる環境の整備が重要と感じた」という。

17日は、上田市の小相澤隆幸副市長が炊き出しを視察し、柳澤理事長と長瀬吉夫社長から災害対策バルクや発電機を含む災害時の備えの説明を受けた。

長瀬社長は「柳澤理事長のLPガスへの理解があって初めて実現できた。電力、ガスに加え、水まで賄う施設の完成に協力できて嬉しい。こうした取り組みの広がりへPRが足りないと感じており、市町村などとも連携していきたい」と話した。

震災の心バトンリレー
（you tube Long ver.）

災害備え 何年経ても

東日本大震災13年

東日本大震災の発生から13年を迎えた11日、県内でも地震を想定した避難訓練や、復興作業に役立つ重機の講習会が開かれるなど、防災への思いを新たにした。

避難 地域支え合い確認 上田

上田市の社会福祉法人まるこ福祉会の障害福祉サービス事業所・とんぼハウスでは11日、「3・11震災の心バトンリレー」が開かれた。市内の高校生が震災への備えを調査した結果を発表した後、地域住民ら約100人が地震を想定した避難訓練を実施した。

「高校生が伝える教訓と知恵」と題した発表会では、上田染谷丘高校1年の宇佐美恋さん(16)が調査結果を模造紙にまとめ、①非常食の用意②災害を想定すること③地域の人と支え合うこと――が重要だと発表。高校時代に東日本大震災で母を亡くした岩手県の女性の作文を朗読すると、涙ながらに聞き入る参加者もいた。

その後の避難訓練で参加者は椅子の近くで頭部を両手で覆い揺れが落ち着いたことを確認し、誘導に従い施設横の駐車場まで移動した。宇佐美さんは「これから起こる災害に備え、地域の人と支え合うことの大切さを再認識した」とし、同会の柳沢正敏理事長(73)は「何年だっても、こうした機会を大切に、備蓄の必要性などを地域の方々にも訴えていきたい」と話した。

震災を想定した避難訓練で施設内から駐車場に避難する地域住民ら（上田市で）

重機操作の講習を受ける中田英寿さん（右）（小布施町で）

がれき撤去 重機講習会 小布施

小布施町では11日、災害時のがれきの撤去などに重機を使えるようにと、重機オペレーターを育成する講習会が開かれ、スポーツ選手ら19人が受講した。このうち6人は17日に石川県珠洲市で実際に活動する。

講習会は、アスリートと社会課題の解決を目指す日本財団（東京都）のプロジェクトの一環。元サッカー選手の中田英寿さん(47)や元ラグビー選手の五郎丸歩さん(38)らが参加し、10、11日の2日間、一般財団法人「日本笑顔プロジェクト」（小布施町）のメンバーの指導を受けた。

講習2日目の11日は、被災地の狭い場所でも的確に重機を動かすため、地面に描かれた三角印に沿って穴を掘る訓練を行った。選手らは操縦する様子を互いに確認し、「ナイス」「難しいね」と声を掛け合った。講習を終えた受講者には整地などが行える小型重機の運転資格が授与された。

中田さんは「何かあってから免許を取るのではなく、事前の準備が重要。扱いは難しかったが、現場に入れるようにしたい」と話し、車いすで講習を受けた軽井沢町出身で元パラアイスホッケー選手の上原大祐さん(42)は「重機は手だけで扱える。自分にできる新しい支援の形を見つけられた」と語った。

役員名簿（敬称略）令和6年3月29日現在

評議員議長	小山田秀士	理事長	栁澤　正敏	監　事	日野　敬輔
評議員	橋詰　邦男	理　事	小室　邦夫	監　事	横山　清春
評議員	小山　勝義	理　事	田中二三枝	第三者委員	栁澤富美子
評議員	八重澤きみ子	理　事	谷口　博	第三者委員	清水　三枝
評議員	金井　章二	理　事	古村　かつえ		
評議員	溝端　勇二	理　事	竹花　真由美		
評議員	宮下　和美				

編集後記

厳しかった冬が終わり、春の日差しも柔らかく心地よい季節になりました。
このたび、まるこ福祉会は社会福祉法人設立20周年を迎え、記念誌を発行いたしました。編集にあたり、この20年間の歳月と活動を改めて振り返ると、地域のテレビ局で放送されたものだけでも相当数にのぼり、多くの皆様に支えられ実を結んだ活動の数々に、改めて感慨深いものを感じました。

さて、私たちは活動の源である、『困っている方々を支える』という使命を持っています。そしてこれからもその使命と共に地域と一体になって発展し、真の幸せをつかむという福祉のあるべき姿の最終形を示すと共に、これまでの多くの活動の記録をアーカイブとして未来の世代に向けて伝えたいと思います。

そして、今後も職員自身が自己研鑽を重ね、ボランティアの皆様と協働し、利用者や地域の皆様が共に真の幸せを感じるために、さらなる努力を惜しまない覚悟ですので、皆様におかれましては、なお一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和６年３月29日

社会福祉法人まるこ福祉会　創立20周年記念事業　実行委員長　小山　厚志
同　　記念誌作成委員会 委員長　小室　邦夫

20年の軌跡

ともに歩む

創立20周年記念誌

2024年（令和6年）3月29日

発行・編集　社会福祉法人まるこ福祉会
〒386-0407 長野県上田市長瀬2885-3
TEL 0268-71-6263/FAX 0268-71-6261

印刷・製本　立科印刷
〒384-2305 長野県北佐久郡立科町芦田1019
TEL 0267-56-1175/FAX 0267-56-3590

こどもレストランで、スベディ駐日ネパール大使と国際交流